三重県埋蔵文化財調査報告170

# 下　之　川　富　田

## ～一志郡美杉村下之川所在遺跡の調査～

１９９８年３月

三重県埋蔵文化財センター

# 序

三重県の中央部に位置します一志郡美杉村は、古来より高い文化を形成してきました地域であります。この雲出川上流部の支流である八手俣川の流域にも、多種多様な文化が形成されつづけてまいりました。

今回発掘調査を行いました下之川富田遺跡は、八手俣川流域の中央部にあたります。今回特筆される発見として、弥生時代前期の、いわゆる遠賀川式土器の出土があります。九州北部に稲作文化が伝播し、それが列島各地にひろがっていくのに伴って伝わったのが、この土器であります。これまで、遠賀川式土器の出土は、伊勢では鈴鹿市・津市・嬉野町・三雲町などの平野部が中心であり、山間部には１時期遅れて伝わるという状況が推察されていたわけですが、今回の発見によって、そのような考え方には再考の余地があることが明らかとなりました。このようなことは、まさに発掘調査の醍醐味であります。また、誇り高い山間部の文化というものを改めて考えさせてくれるよい契機になったものと考えます。

ただ、このような貴重な遺跡が、記録保存というかたちでしか残せないのは残念というほかありません。また、調査が終わればそれでおしまいというものでもありません。調査の成果を三重県の財産としてどのように活用していくかが、今後の我々に課せられた重要な問題と考えております。

調査にあたっては、地元の方々、下之川三谷地区自治会をはじめ、美杉村農林課、美杉村教育委員会、県農林水産部・津農林水産事務所から多大な御協力とともに暖かい御配慮を頂くことができました。文末とはなりましたが、各位の誠意ある御対応に、心からの御礼を申し上げます。

１９９８年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　奥村敏夫

# 例　　言

1　本書は、三重県一志郡美杉村下之川字富田地内に所在する下之川富田遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、平成９年度県営畜産経営環境整備事業（一志地区）に伴い、緊急発掘調査を実施したものである。

3　調査は平成９年度に行った。調査の体制は以下の通りである。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）

主幹兼調査第一課長　吉水康夫

主査兼調査第一課第一係長　清水正明

技　師　伊藤裕偉

技　師　新名　強

研修員　杉本寿範

4　調査にかかる費用は、三重県農林水産部と三重県一志郡美杉村、および国庫補助金を得て三重県教育委員会が、それぞれ負担した。

5　当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び管理指導課が行った。遺構・遺物の写真は、伊藤・新名が撮影した。執筆及び全体の編集は、伊藤裕偉が行った。

6　調査にあたっては、美杉村下之川在住の各位、下之川三谷地区、美杉村農林課、美杉村教育委員会、および県農林水産部畜産環境課・津農林水産事務所から多大な協力を受けたことを明記する。

7　当地は国土座標第Ⅵ系に属する。挿図の方位は、全て座標北で示している。なお、磁針方位は西偏６°20′（昭和62年）、真北方位は西偏０°18′である。

8　挿図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

9　当報告書での用語は、以下の通り統一した。

つき……「坏」があるが、「杯」を用いた。

わん……「椀」「碗」「埦」があるが、「椀」を用いた。

10　当報告書での遺構は、通番となっている。また、番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けた。

ＳＢ……掘立柱建物　　ＳＤ……溝　　ＳＦ……焼土坑　　ＳＨ……竪穴住居

ＳＫ……土坑　　ＳＲ……流路　　ＳＸ……墓

ＳＺ……流路・落ち込みなど　　pit……ピット、柱穴

11　本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

12　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

# 本　文　目　次


Ⅰ　前　言……（1）
　1　調査の契機……（1）
　2　調査の経過……（1）
　3　調査の方法……（2）
　4　遺跡の名称について……（2）
Ⅱ　位置と環境……（3）
　1　調査区の位置と地形的環境……（3）
　2　下之川地区を中心とした歴史的環境……（3）
Ⅲ　調査の成果～層位と遺構～……（11）
　1　調査区の地形と基本層位……（11）
　2　検出した遺構……（11）
　　a　弥生時代の遺構……（11）
　　b　飛鳥～奈良時代の遺構……（15）
　　c　平安時代の遺構……（25）
　　d　中世の遺構……（25）
　　e　近世以降の遺構……（26）
　　f　時期不明の遺構……（26）
Ⅳ　調査の成果～出土遺物～……（30）
　1　縄文時代の遺物……（30）
　2　弥生時代前期の遺物……（30）
　3　弥生時代後期～古墳時代前期の遺物……（32）
　4　飛鳥～奈良時代の遺物……（32）
　5　平安時代の遺物……（34）
　6　中世の遺物……（34）
　7　その他……（34）
Ⅴ　調査のまとめと課題……（46）
　1　弥生時代前期の土器群について……（46）
　2　弥生時代前期の文化伝播に関して……（47）
　3　古墳時代前期の土器について……（47）
　4　飛鳥・奈良時代の遺構・遺物について……（48）
　5　平安時代の遺構・遺物について……（49）
　6　中世の遺構・遺物について……（49）
　7　総括～下之川の位置づけ～……（50）

## 図　版　目　次


ＰＬＡＴＥ表紙　遺跡を南方上空から望む
ＰＬ．１　調査前風景
ＰＬ．２　調査風景(1)
ＰＬ．３　調査風景(2)
ＰＬ．４　Ａ地区遺構(1)全景
ＰＬ．５　Ａ地区遺構(2)全景・土層
ＰＬ．６　Ａ地区遺構(3)小流路ＳＤ39
ＰＬ．７　Ａ地区遺構(4)土壙墓ＳＸ11
ＰＬ．８　Ａ地区遺構(5)竪穴住居ＳＨ４
ＰＬ．９　Ａ地区遺構(6)竪穴住居ＳＨ10
ＰＬ．10　Ａ地区遺構(7)竪穴住居ＳＨ10
ＰＬ．11　Ａ地区遺構(8)竪穴住居ＳＨ16ほか
ＰＬ．12　Ａ地区遺構(9)竪穴住居ＳＨ16
ＰＬ．13　Ａ地区遺構(10)竪穴住居ＳＨ15・16
ＰＬ．14　Ａ地区遺構(11)竪穴住居ＳＨ15
ＰＬ．15　Ａ地区遺構(12)竪穴住居ＳＨ15
ＰＬ．16　Ａ地区遺構(13)竪穴住居ＳＨ17
ＰＬ．17　Ａ地区遺構(14)竪穴住居ＳＨ23
ＰＬ．18　Ａ地区遺構(15)竪穴住居ＳＨ23
ＰＬ．19　Ａ地区遺構(16)南東端部
ＰＬ．20　Ａ地区遺構(17)竪穴住居ＳＨ25・28
ＰＬ．21　Ａ地区遺構(18)竪穴住居ＳＨ29
ＰＬ．22　Ａ地区遺構(19)竪穴住居ＳＨ31ほか
ＰＬ．23　Ａ地区遺構(20)竪穴住居ＳＨ31
ＰＬ．24　Ａ地区遺構(21)土坑ＳＺ32・33
ＰＬ．25　Ａ地区遺構(22)掘立柱建物ＳＢ12ほか
ＰＬ．26　Ａ地区遺構(23)土坑ＳＫ９ほか
ＰＬ．27　Ａ地区遺構(24)小土坑ＳＫ18ほか
ＰＬ．28　Ｂ地区遺構(1)
ＰＬ．29　Ｂ地区遺構(2)
ＰＬ．30　出土遺物(1)
ＰＬ．31　出土遺物(2)


## 挿　図　目　次


fig.１　遺跡位置図
fig.２　遺跡周辺地形図
fig.３　事業地内調査区位置図
fig.４　調査区平面図（Ａ地区）
fig.５　調査区平面図（Ｂ地区）
fig.６　調査区土層図（Ａ地区－１）
fig.７　調査区土層図（Ａ地区－２）
fig.８　調査区土層図（Ｂ地区）
fig.９　小流路ＳＤ39遺物出土状況
fig.10　竪穴住居ＳＨ４・10平面・断面図
fig.11　竪穴住居ＳＨ15平面・断面図
fig.12　竪穴住居ＳＨ16平面・断面図
fig.13　竪穴住居ＳＨ17平面・断面図
fig.14　竪穴住居ＳＨ23平面・断面図
fig.15　竪穴住居ＳＨ31平面・断面図
fig.16　土坑ＳＫ９平面・断面図
fig.17　小土坑ＳＫ18・ｏ20－pit２平面・断面図
fig.18　土壙墓ＳＸ11平面・立面図
fig.19　掘立柱建物ＳＢ12平面・断面図
fig.20　石組土坑ＳＫ61平面・立面図
fig.21　掘立柱建物ＳＢ63および溝ＳＤ35・37平面・断面図
fig.22　出土遺物実測図(1)縄文土器
fig.23　出土遺物実測図(2)弥生前期
fig.24　出土遺物実測図(3)弥生土器・古式土師器
fig.25　出土遺物実測図(4)竪穴住居ＳＨ15
fig.26　出土遺物実測図(5)土壙墓ＳＸ11ほか
fig.27　出土遺物実測図(6)竪穴住居ＳＨ31ほか
fig.28　出土遺物実測図(7)包含層その他
fig.29　出土遺物実測図(8)Ｂ地区


## 表　目　次


tab.１　遺構一覧表(1)
tab.２　遺構一覧表(2)
tab.３　出土土器観察表(1)
tab.４　出土土器観察表(2)
tab.５　出土土器観察表(3)
tab.６　出土土器観察表(4)
tab.７　出土土器観察表(5)
tab.８　出土石製品観察表
tab.９　出土金属製品観察表
tab.10　出土土錘観察表

# Ⅰ　前　言

## 1　調査の契機

三重県下の圃場整備事業は、平野部の事業がほぼ終了し、ここ数年ほどは漸次山間部の水田地が対象の中心となりつつある。一志郡美杉村内でも、団体営の圃場整備事業が、下之川・多気などの数ヶ所においてすでに行われている。また、県営の農業基盤整備事業として、平成５年度には八知地区で行われ、東川遺跡の調査も行われたところである。

今年度施行されることとなった県営畜産経営環境整備事業（一志地区）については、三重県埋蔵文化財センターおよび三重県教育委員会文化芸術課が行っている、埋蔵文化財の事前の保護協議を行う各種公共事業照会（平成８年度実施分）において、平成９年度事業として照会があったものである。美杉村教育委員会では、平成６・７年度に国庫および県費補助事業として、美杉村遺跡詳細分布調査を実施しており、その報告書において山本遺跡（村遺跡番号10）・富田遺跡（村遺跡番号11）として埋蔵文化財包蔵地の登録を行っている遺跡が今回の事業地内に該当していた。

三重県埋蔵文化財センターでは、事業地内の埋蔵文化財の実態を確認するため、平成９年２月25日に当センター技師高田恵理子・技術補助員石淵誠人を担当者として試掘調査を実施した。その結果、山本遺跡については事業地内部分に遺構が確認されなかったが、富田遺跡については全面から遺構・遺物が確認された。

この結果を基に当センターおよび文化芸術課では、県農林水産部と埋蔵文化財保護協議を重ねてきたが、盛土などによって保存が不可能な部分と、水路となる部分の併せて2,800㎡を記録保存するということで合意した。

## 2　調査の経過

### a　調査経過概要

発掘調査は、平成９年５月６日から重機による掘削を開始し、同年７月16日に現地作業を全て完了した。

春の調査とはいえ大変暑い日もあった。特に期間内には降雨日が多く、せっかく調査した場所に大量の土砂が流入したりし、一気に疲労倍増ということもあった。それでも、作業員各位の暖かい御配慮と熱心な意欲に後押しされ、無事終了することができた。ここに御芳名を記し、心からの御礼を申し上げたい。

井上くに、井上　進、太田　信、奥田孝雄、木下幸子、倉田みさ、坂本幸弘、下出愛子、下出チズ、谷田千代、谷田久夫、田中二男、長井文男、中川欣子、西井かず、西井貞一、萩野勝枝、萩原房子、廣田英子、廣田娣子、廣田徳太郎、松浦和子、松浦桂介、水谷里美、水谷しず、森川千加、横山和子、横山勝代、横山基喜、脇谷かず、脇谷義夫、脇谷米子、渡辺実蔵、渡辺時一、渡辺フジ、渡辺二三、

### b　調査日誌（抄）

４月17日　津農林水産事務所・美杉村農林課との現地協議（清水・伊藤）

５月６日　重機による表土掘削開始。

５月８日　Ａ地区重機掘削時に竪穴住居の存在を確認。

５月12日　掘削作業開始。

５月21日　Ａ地区竪穴住居ＳＨ４を確認。

５月26日　Ａ地区ＳＨ10・15付近、竪穴住居跡が切り合っているのを確認。

５月27日　Ａ地区ＳＢ12の存在を確認。ＳＨ15のカマドは石材利用。ＳＸ10の実測、遺物採り上げ。

５月29日　Ａ地区の水路部の調査区を南東に延長。ＳＨ17から宝珠摘みのある須恵器が出土。

６月２日　Ａ地区ＳＨ16のカマドに煙道を確認。トンネル状に残存。

６月３日　Ａ地区ＳＨ23・27の掘削。ＳＨ15の遺物採り上げ。

６月10日　Ａ地区ＳＨ31の存在を確認。ＳＨ23のカマドの調査。

６月13日　Ａ地区30～39ラインの調査。縄文土器と

思われるものが含まれる。B地区の調査を開始。

6月17日　午後集中豪雨、調査区水没！

6月24日　先週末の台風7号の影響で調査区水没、一部埋没！！

6月25日　B地区から縄文晩期の突帯文土器出土。A地区SH31から墨書土器出土。

6月26日　A地区SD39から、弥生前期の土器群を確認。

6月27日　下之川小学校児童の見学。

7月1日　美杉南小学校児童の見学。B2地区で石組土坑SK61を確認。

7月3日　美杉村社会教育主事一行の見学。

7月4日　航空測量の現地説明会。

7月9日　実測図の作成。航空測量入札。（株）イビソクが落札。

7月10日　遺跡現地説明会の資料提供。久居市政記者クラブで説明。

7月12日　遺跡現地説明会の開催。雨天にもかかわらず、約100名の参加があった。

7月14日　実測など（清水・伊藤・新名・杉本）。

7月15日　実測、調査区の清掃。

7月16日　調査区の清掃。後かたづけ。航空写真測量。

7月22日　道具の撤収。県農林水産部への引き渡し。

### c　文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官等あてに行っている。

・法第57条の3第1項（文化庁長官あて）
平成9年4月28日付け農芸畜第1474号（県知事通知）

・法第98条の2第1項（文化庁長官あて）
平成9年5月9日付け教文第989号（県教育長報告）

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（久居警察署長あて）
平成9年9月17日付け教文第6-72号（県教育長通知）

## 3　調査の方法

### a　掘削について

調査は、遺構検出面の直上まで存在していた耕作土・旧耕作土の類については大部分をバックフォーで除去した。包含層および遺構については、全て人力掘削を行った。

### b　小地区設定について

今回の調査では、南方の変形T字形調査区をA区、北方の2カ所に分かれたところをB区（B1・B2区）として調査した。そして、その地区ごとに調査区内を4m四方の升目で切ることによって小地区を設定した。西から数字、北からアルファベットを付け、升目の北西隅の交点をその小地区の符号とした。つまり、A地区とB地区とでは、小地区は異なっている。なお、この小地区設定は、国土座標軸とは無関係である。

### c　遺構図面について

調査区の平面図は、航空写真測量により、1/50・1/100で、端点図およびコンタ図を作成した。なお、竪穴住居・土坑などの出土遺物を伴うような遺構は、個別に1/10の実測図を作成したものもある。

航空写真測量図については、入札により、（株）イビソクと委託契約を締結して作成した。

## 4　遺跡の名称について

当遺跡については、『三重県一志郡美杉村遺跡分布地図』（美杉村教育委員会　1996）により、「富田遺跡」（村遺跡番号11）として示されているものである。「富田」の字については、通有のものであるため他の市町村で同一遺跡名が現れる可能性が大いにある。そのため、今回の発掘調査を契機として、大字の「下之川」を冒頭に掲げ、「下之川富田遺跡」と呼称することとした。遺跡範囲については、調査の結果も踏まえ、fig.3に示した範囲として認識することとする。

# II　位置と環境

## 1　調査区の位置と地形的環境

下之川富田遺跡は、一志郡美杉村下之川字富田に所在する遺跡である。下之川は、雲出川上流部の1支流である八手俣川によって形成された盆地状の谷で、標高約220mほどである。下之川富田遺跡は、八手俣川左岸の段丘上に位置する。当地の上流には、中世における北畠氏の拠点である多気が位置する。

下之川は、八手俣川を経由することによって下流の君ヶ野、上流の多気へと至る。この他の道として、清水峠を経由すると雲出川支流の中村川流域（嬉野町）の小原へ、また、下之川富田遺跡から北方へ抜ける隘路を通れば漆地区へと至ることができる。さらに矢頭峠を経由すると、雲出川支流の波瀬川流域（一志町）の波瀬へと至ることができる。いくつかの交通路を有する地ではあるものの、それぞれの道は、現在では狭隘といえる。

## 2　下之川地区を中心とした歴史的環境

下之川地区における遺跡については、これまであまりよく分かっていなかったが、平成6・7年度に美杉村教育委員会によって実施された詳細分布調査によって多くの遺跡が確認された。下之川富田遺跡についても、これを契機として発見された遺跡である。

縄文時代では、当遺跡においてネガティヴな押型文土器が採集されており[1]、縄文時代早期前半頃には確実に、当地において人間の活動が開始されたと考えられる。後期では、上流の多気地区に所在する土井沖遺跡において竪穴住居跡が[2]、さらにヨヘイ遺跡において当該時期の土器が[3]確認されている。

弥生時代の動向は今一つよく分からない。下流部の君ヶ野地区にある君ヶ野遺跡[4]からは、中期の土器が確認されている。また、下之川の上流にあたる多気地区の土井沖遺跡からも、中期中葉を中心とした時期の遺物が見られる[5]。下之川をはさんで上下流で中期の遺跡が確認されていることから、この下之川においても弥生時代中期の遺跡が存在していることは間違いなかろう。

古墳時代には、当地には横穴式石室を有する古墳の造営が確認できる。下之川富田遺跡の南方約600mの地点には、下之川古墳がある。昭和56(1981)年に農作業用の道路を改良している際に発見された古墳であり、平面形は今一つよく分からないものの、立石が方形に組まれている状況から横穴式石室であるものと考えられる[6]。副葬品として、須恵器・土師器などが確認されている。須恵器の形態は、田辺昭三氏による陶邑編年のＴＫ209型式に並行する頃のものと考えられ、7世紀前葉頃の古墳と考えられる。なお、下之川地区は雲出川流域のうちで古墳の確認されている最上流部と評価できる地でもある。

奈良・平安時代についても、遺跡の確認例は少ない。八手俣川流域では、平安時代後期頃の土器が上流の多気地区で確認されているに止まる[7]。雲出川本流の八知地区では東川遺跡が発掘調査され、奈良時代の竪穴住居跡が確認されている[8]。

平安時代末～～戦国時代（以下、この時期を「中世」とする）の遺跡は、かなり濃密に確認されている。上流の多気地区では、中世初頭に位置づけられる漆経塚がある[9]。金銅製や瓦質土器・陶器の経筒、あるいは銅鏡・貿易陶磁器などの優良な遺物が確認されており、当該時期の当地近隣が境界的な場として認識されていたことを物語る。また、中世前期における集落遺跡として、多気遺跡群上村地区[10]などを挙げることができる。

また、下之川地区には飯泉寺という寺院がある。ここの仏像台座には建久9(1198)年の銘がある。仲山神社の前身である金生大明神の釈迦如来の台座と伝えられる。現在仲山神社に保管されている金生大明神にかかる棟札[11]には「福成寺」の名が見え、この寺と金生大明神との密接な関連も窺える。地元では仲山神社の北には仲山寺があったと伝えられており、その寺との関連も考える必要がある。仏像は可動性のあるもので、当時からこの地に存在していたと断定することこそできないものの、当地に鎌倉期まで遡る寺院があった可能性は高い。

金生大明神に関わる棟札には、正慶2(1333)年、

正平17(1362)年、応永4(1397)年、長禄4(1457)年、天文18(1549)年、永禄9(1566)年、天正18(1590)年の日付が見られる。古くなった棟札を書き写したものも含まれているが、中世後期を中心に継続的に建立ないしは修復がなされたものと考えられ、当地における明神信仰の深さを窺うことができる。

南北朝期以降の中世後期になると、下之川上流の多気に北畠氏が入部する。これに関連して、多くの遺跡が確認できるようになる。下之川地区にも、城館として椿原城、富田・宇城などがある。多気からみて最も近い下流部であることから、とくに室町・戦国期の当地にはかなり濃密に集落が形成されていた可能性があろう。

近世では当地は下ノ川村として存在し、慶長13(1608)年以降は津藩領となっていた。明治22(1889)年の町村制施行により下之川村に、昭和30(1955)年には近隣村の合併により美杉村が成立して、現在に至っている。下之川富田遺跡の所在する地は、下之川村の時代には大字三谷といい、三谷の名称は今も地元の公民館に残っている[12]。

この他に、当地における文化を考えるうえで注意を要するものとして仲山神社が挙げられる。ここで旧暦1月15日に行われる（現在では2月11日となっている）牛蒡祭は、頭屋によって取り仕切られる祭りで、巨大な男根と女陰の模造品を用いるものである[13]。類似した祭りは近隣には残っておらず、このような文化を生み出した、あるいはこれを今日まで滞りなく伝えてきた当地の背景には、極めて興味深いものがある。

以上、下之川地区を中心とした歴史的背景を中心に概観してきた。八手俣川流域の考古学的調査は、多気ではいくつかの成果があるものの、それ以外の地域では極めて少ない。今回調査した下之川富田遺跡の資料によって、より具体的な考察が可能となろう。

【註】
(1)皇學館大学考古学研究会編『美杉村の遺跡』（1995）
(2)伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1993）
(3)伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』Ⅲ（三重県埋蔵文化財センター　1996）
(4)稲生進一「考古編　弥生式文化」（『美杉村史』上巻　1981）
(5)註(2)文献
(6)稲生進一『下之川古墳（石室跡）』（美杉村教育委員会　1985）
(7)伊藤裕偉『松月院跡・伝本願寺跡』多気遺跡群発掘調査報告Ⅳ（三重県埋蔵文化財センター　1997）
(8)竹田憲治ほか「東川遺跡」（『六地蔵Ａ遺跡・六地蔵Ｂ遺跡・高塚宅跡・東川遺跡』（三重県埋蔵文化財センター　1994）
(9)小玉道明「漆経塚群とその埋納品」（『美杉村史』上巻　1981）
(10)越賀弘幸・伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』Ⅱ（三重県埋蔵文化財センター　1996）
(11)仲山神社宮司篠田洪氏の御配慮により、実見した。
(12)向田育郎『下之川の今昔』（1982）
(13)山中吉明「牛蒡祭り」（『三重県の祭り行事』三重県教育委員会　1997）

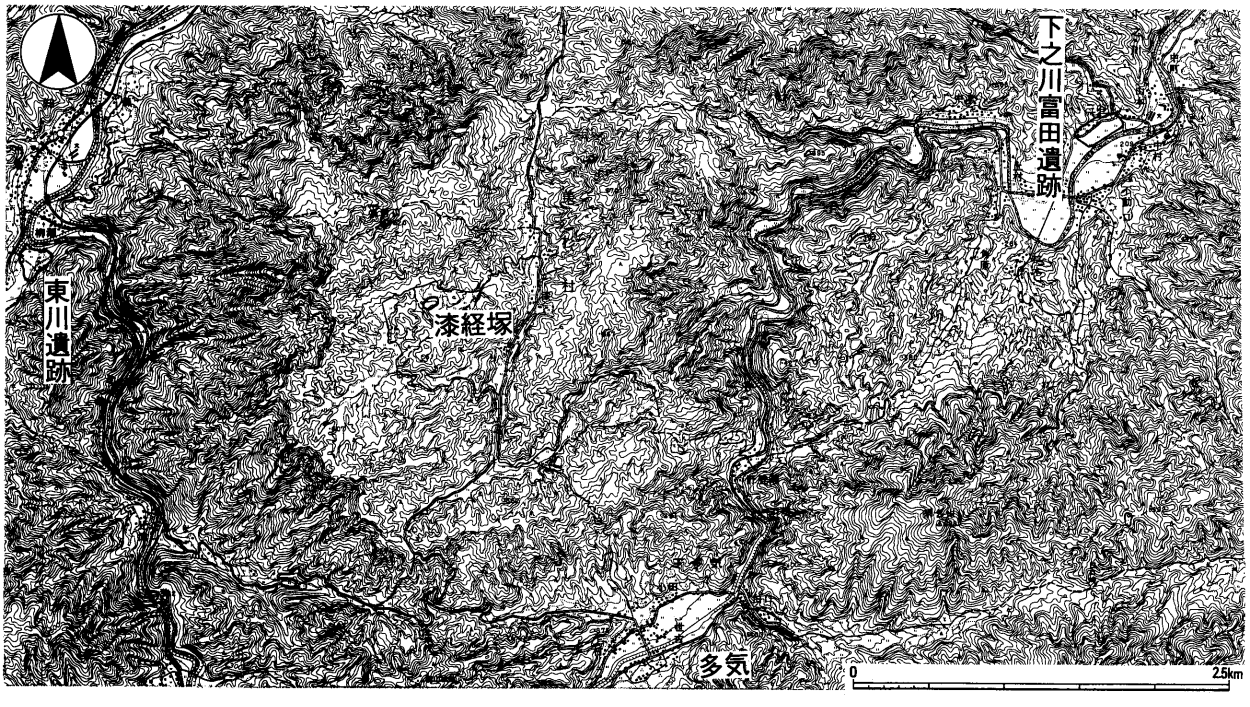



fig. 1　遺跡位置図（1：50,000）　国土地理院発行 1/25,000「伊勢奥津」より

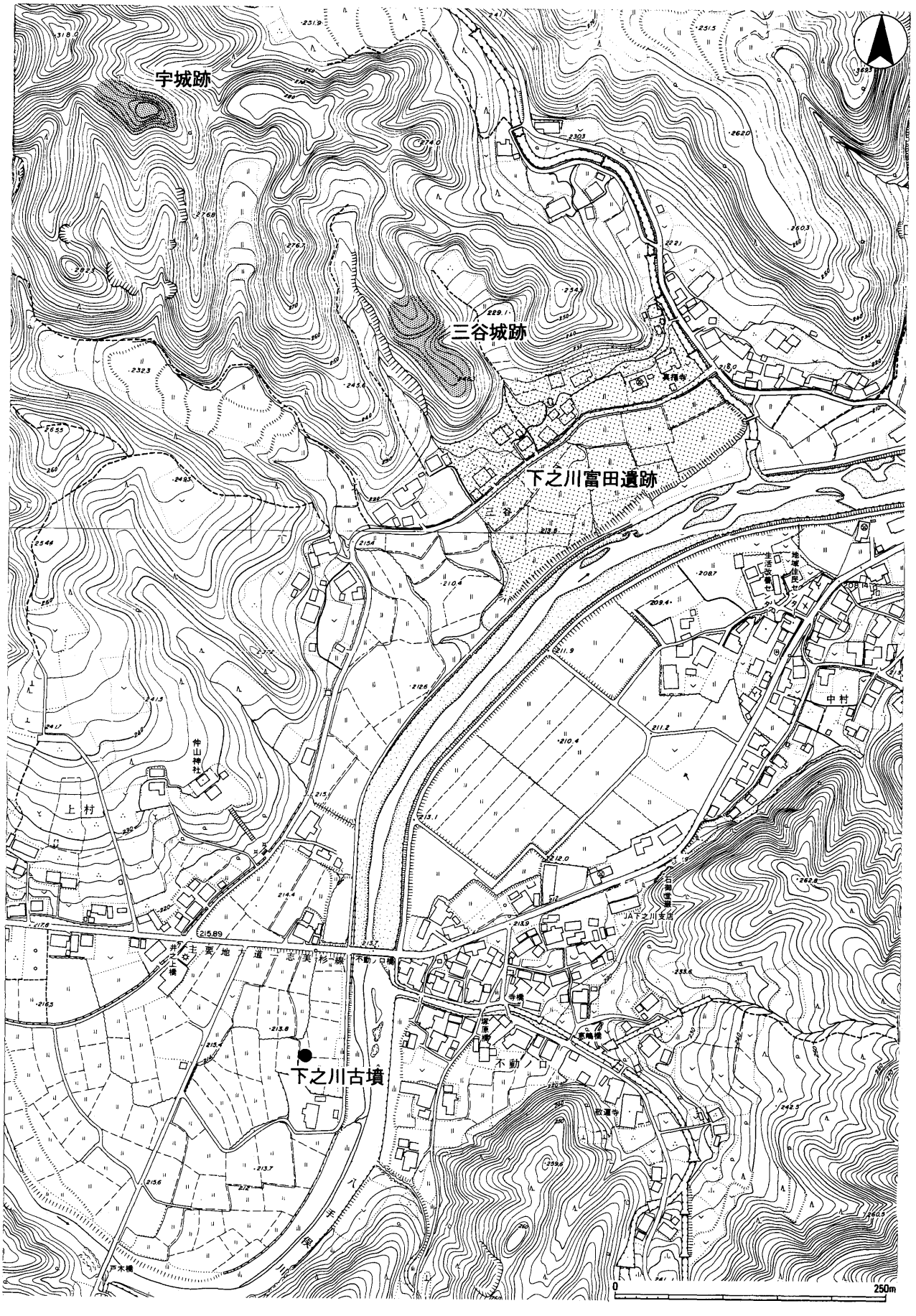



fig. 2　遺跡周辺地形図（1：5,000）

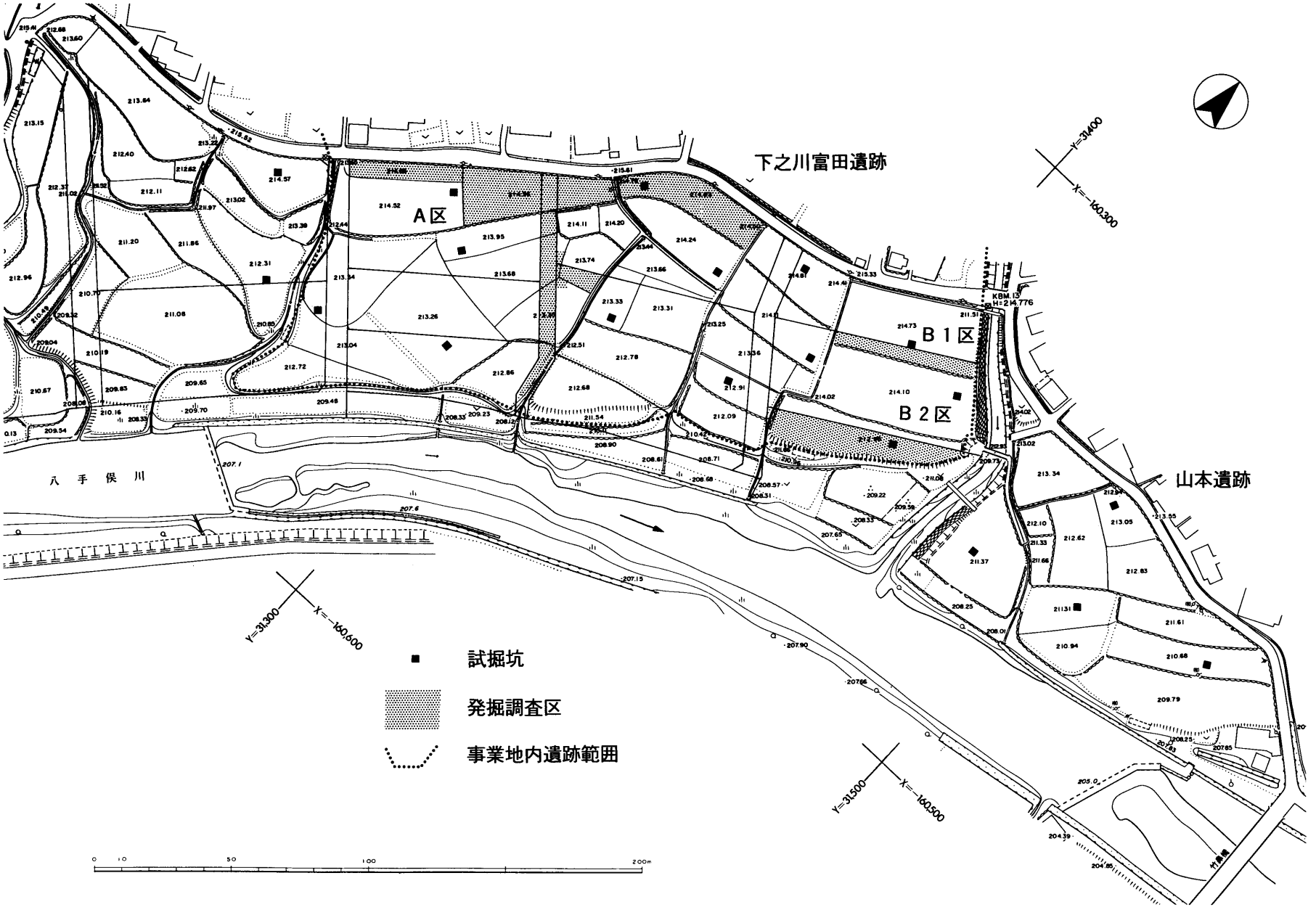



fig. 3　事業地内調査区位置図（1：2,000）

fig. 4　調査区平面図（A地区）（1：400）

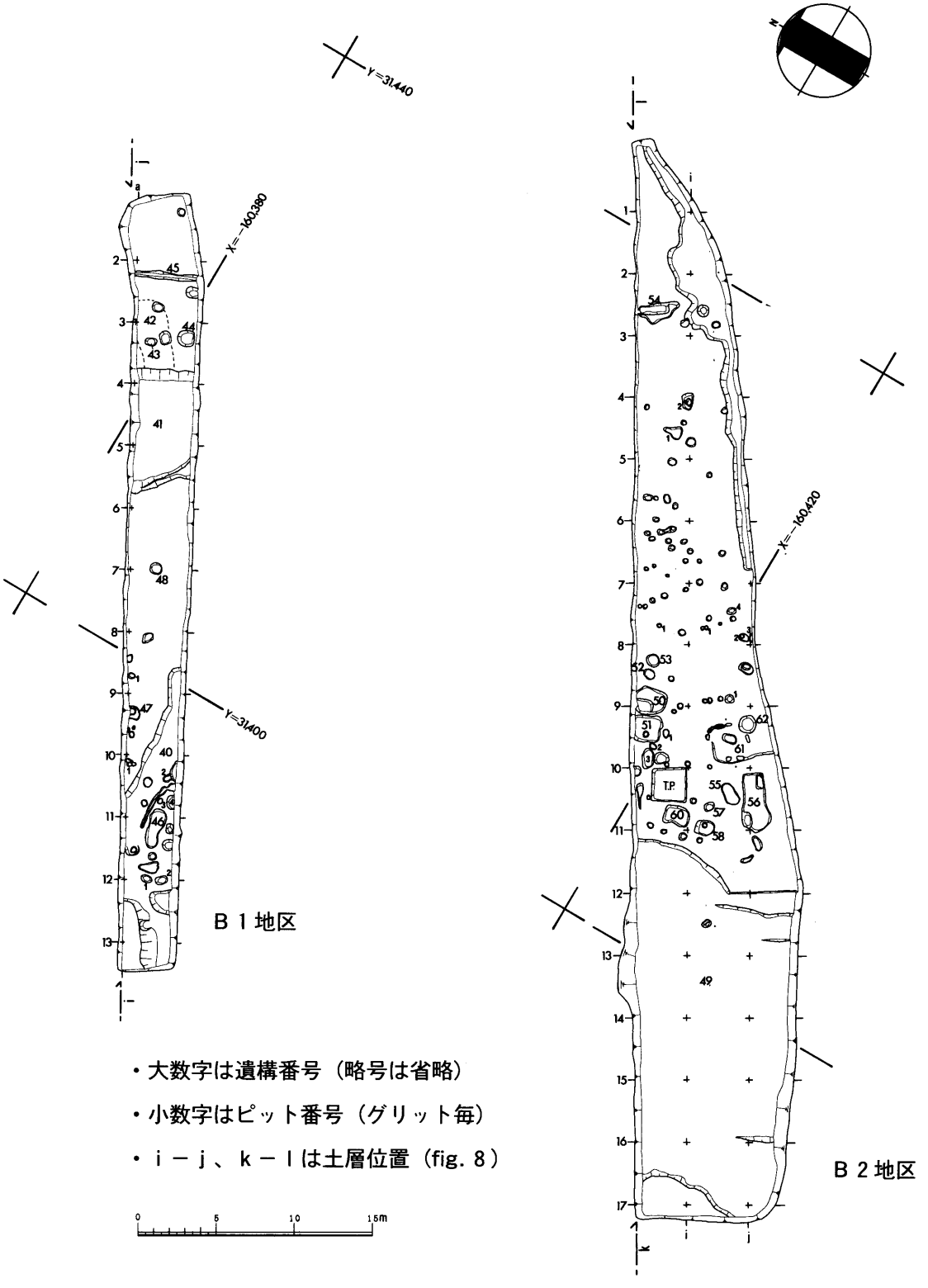



fig. 5　調査区平面図（B地区）（1：400）

# Ⅲ　調査の成果～層位と遺構～

## 1　調査区の層位

調査区は、八手俣川左岸の段丘上に位置し、標高は調査区の上部で214m、下部で212mである。層位的な状況はA地区とB地区とでは大きく異なる。

**A地区**（fig. 6・7）

遺構検出の基盤となる層は、黄色系砂質土である。ただし、31ライン以南はやや緑灰色系となり、7ライン以北はやや礫の混入が目立つようになっている。基本的には八手俣川が形成した段丘層に相当するものと考えられる。

遺物包含層は、jライン以東では暗褐色系砂質土が存在するもののその埋積量は薄い。竪穴住居SH17付近の約15cmを最大とし、その大部分は数cm程度のものであり、調査区の大部分では耕作土関連層の直下で遺構基盤層に達した。遺物包含層が薄い要因としては、後世の開墾に伴う影響が大きいものと考えられる。

遺物包含層の上部には、開墾に伴う耕作土が堆積する。調査前の現況耕作土の下には旧耕作土の堆積がほぼ全域で認められた。旧耕作土は、床土の存在からその多くが田面に相当するものと考えられ、最も多く確認されたq～tライン付近では6面の旧田面が確認できる。

この旧耕作土の形成時期については、該当土層中からの出土遺物が少ないため明確にはし難いが、中世前期の土器類が若干確認されているため、中世以降に何度かの土地改良を伴いながら現在に至ったものと考えられる。

**B地区**（fig. 8）

遺構検出の基盤としたのは、黄灰色系細～粗砂層である。この層は、調査前の現況耕作土および床土の直下において基本的には検出できた。この層は、検出面に近い部分では細～粗砂の状態を示していたが、その下部には人頭大程度の大礫を含んでいる。A地区とは明らかに異なった層位的環境であり、恐らく遺跡北部を流れる大谷川の氾濫によって形成された層と考えられる。

このことを示すものとして、B1地区のSZ40・41、B2地区のSZ49が挙げられる。いずれも小規模な谷と考えられるものである。

なお遺構基盤層は、中世以降のものに相当する。この層における遺物の包含状況は、B2地区のテスト・ピットで確認した。その結果、縄文後期～奈良時代頃にかけての遺物が少量含まれていることが確認されたが、含有量はさほど多くなく、遺構も認められなかった。層位的状況からみても当該時期の遺構は存在しないものと判断した。

## 2　検出した遺構

検出した遺構には、弥生時代前期・飛鳥時代（古墳時代後期）・奈良時代・平安時代後期・中世後期（室町時代）のものがある。内訳として、竪穴住居・掘立柱建物・溝・土坑・ピットなどがある。以下、主な遺構について記述する。ここで採り上げていない遺構については、遺構一覧表（tab. 1～2）を参照されたい。

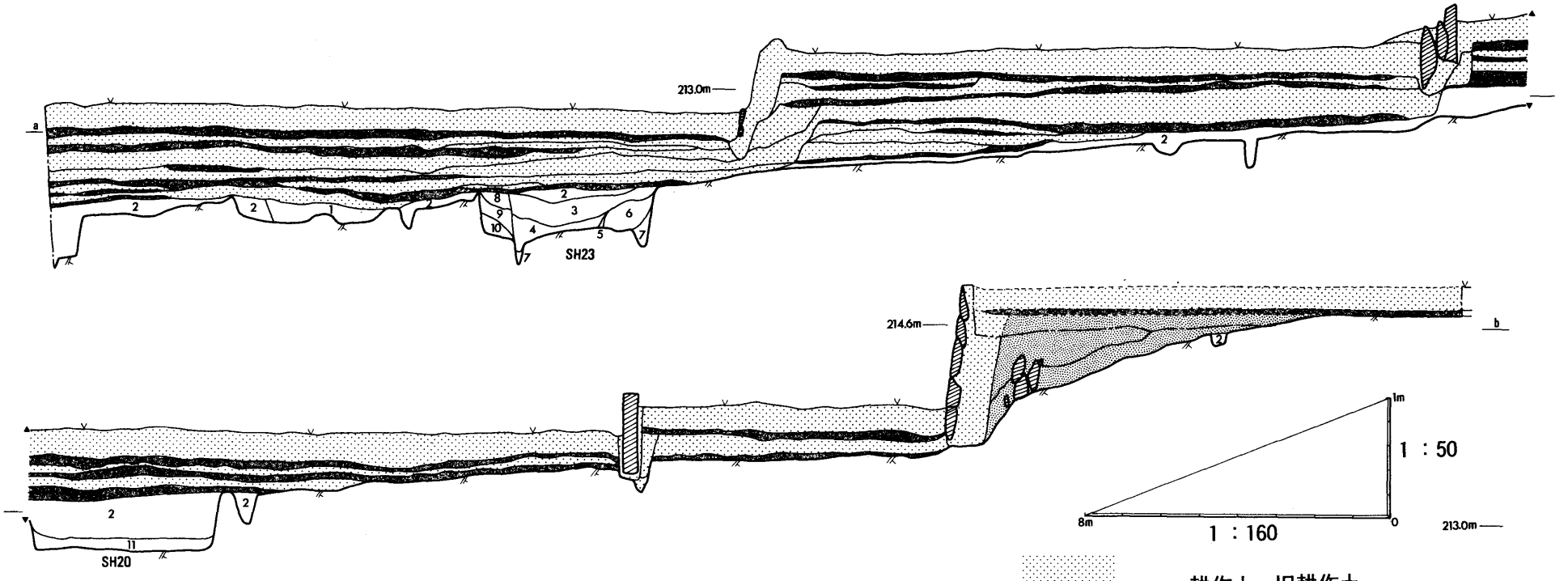
### a　弥生時代の遺構

弥生時代の遺構には、前期に相当する流路が1条検出された。

**小流路SD39**（fig. 9）　A地区南部のb・c37～39グリットで検出した遺構である。最大幅約7m、深さ約0.2mである。埋土は、淡緑灰色系砂質土を基本とし、北側肩部を中心に同系色の細砂層が認められた。実測図にすると比較的良好な溝のように見えるが、実際には肩部のあり方もそれほど明瞭ではない。位置的に見て、調査区東部に存在する丘陵谷部から流れ出た水流によって形成されたものと考えられる。

この小流路内の北肩部、砂層を中心に弥生時代前期の土器が比較的まとまって出土している。この層中には炭も若干含まれており、流路といっても小規模なものであることから、当該時期に落ち込み状に存在していた当地点に一括的に廃棄されたものと考えられる。

出土土器には弥生時代前期前半に位置づけられる




1．黄灰色粗砂
2．暗褐色砂質土（包含層）
3．褐色土
4．炭まじり褐色土
5．焼土
6．黄褐色砂質土
7．暗黄褐色土
8．暗褐色土
9．黄色ブロック含む暗褐色土
10．暗黄褐色土
11．暗褐色ブロックまじり黄褐色土

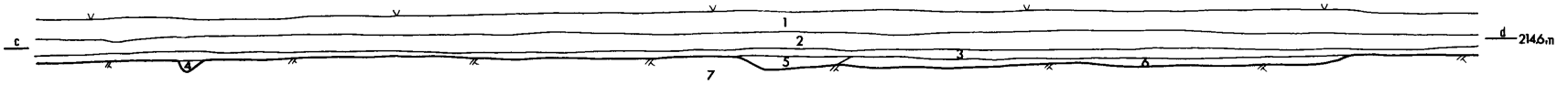
＝ 耕作土・旧耕作土

＝ 床土・旧床土

＝ 近世盛土

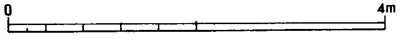
＝ 石垣、石、セメント（地境）

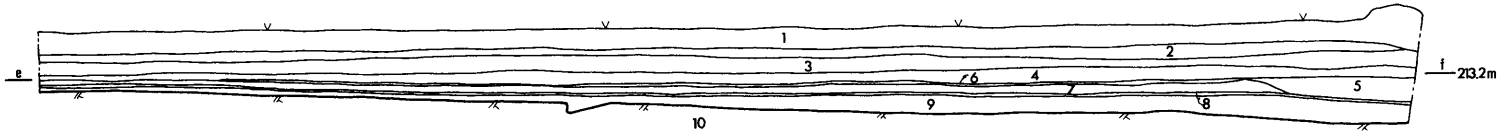
fig. 6　調査区土層図（A地区－1）　※土層位置はfig. 4




A地区ｃ－ｄ土層

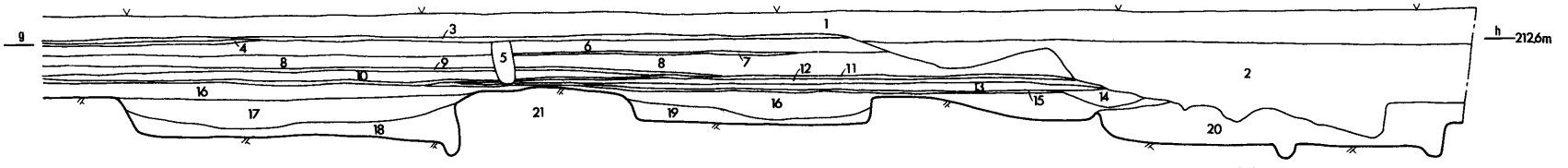
1．耕土
2．褐色砂質土（旧耕土）
3．橙色砂質土（床土）
4．暗褐色砂質土
5．淡黄灰色砂
6．淡黄灰色砂質土
7．淡黄褐色砂質土（基盤層）




A地区ｅ－ｆ土層

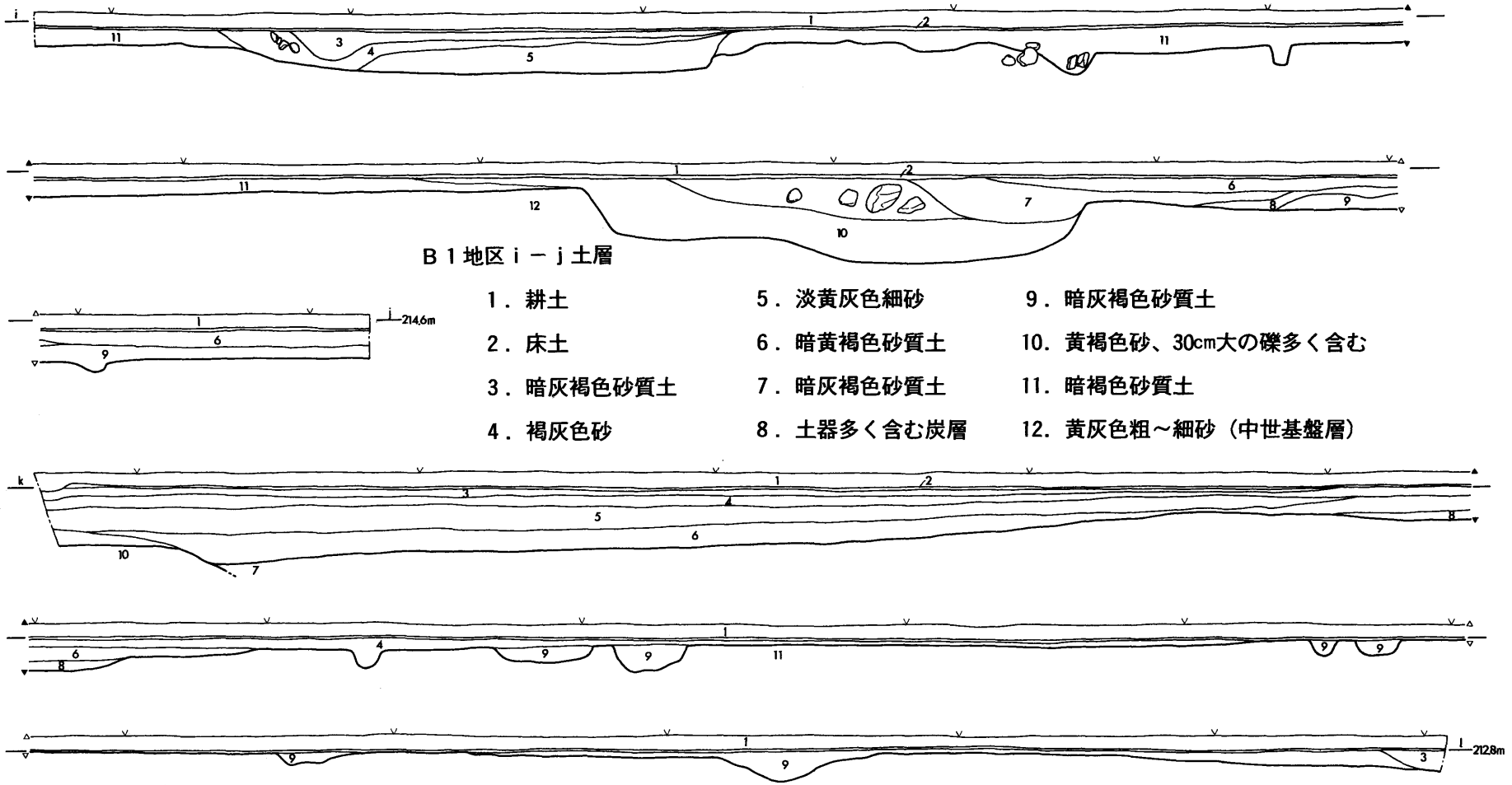
1．耕土
2．床土
3．褐灰色土（旧耕土）
4．灰褐色土（旧耕土）
5．淡赤褐色土
6．床土（旧床土）
7．暗灰褐色土（旧耕土）
8．床土（旧床土）
9．暗褐色土（包含層）
10．黄褐色砂質土（基盤層）




A地区ｇ－ｈ土層

1．耕土
2．砂まじり灰色土（石垣裏込）
3．床土
4．旧耕土
5．灰色土
6．褐灰色土（旧耕土）
7．床土（旧床土）
8．淡褐灰色土（旧耕土）
9．床土（旧床土）
10．灰色土（旧耕土）
11．床土（旧床土）
12．灰色土（旧耕土）
13．淡灰色土（旧耕土）
14．淡褐色砂
15．床土（旧床土）
16．暗褐色土
17．黄色ブロック・炭まじり灰褐色土
18．炭まじり淡灰褐色土
19．淡灰褐色土
20．炭まじり淡褐色粘質土
21．黄褐色粘質土（基盤層）

fig. 7　調査区土層図（Ａ地区－２）（1：80）




B１地区ｉ－ｊ土層

1．耕土
2．床土
3．暗灰褐色砂質土
4．褐灰色砂
5．淡黄灰色細砂
6．暗黄褐色砂質土
7．暗灰褐色砂質土
8．土器多く含む炭層
9．暗灰褐色砂質土
10．黄褐色砂、30cm大の礫多く含む
11．暗褐色砂質土
12．黄灰色粗～細砂（中世基盤層）

B２地区ｋ－ｌ土層

1．耕土
2．床土
3．褐灰色土
4．暗褐色砂質土
5．褐灰色砂質シルト
6．暗灰褐色土、20cm以下の礫含む
7．黄灰色粗砂、30cm程度の礫含む
8．黄灰色細砂
9．礫多い褐色砂質土
10．黄褐色細砂
11．黄灰色粗～細砂（中世基盤層）

fig. 8　調査区土層図（Ｂ地区）（1：100）

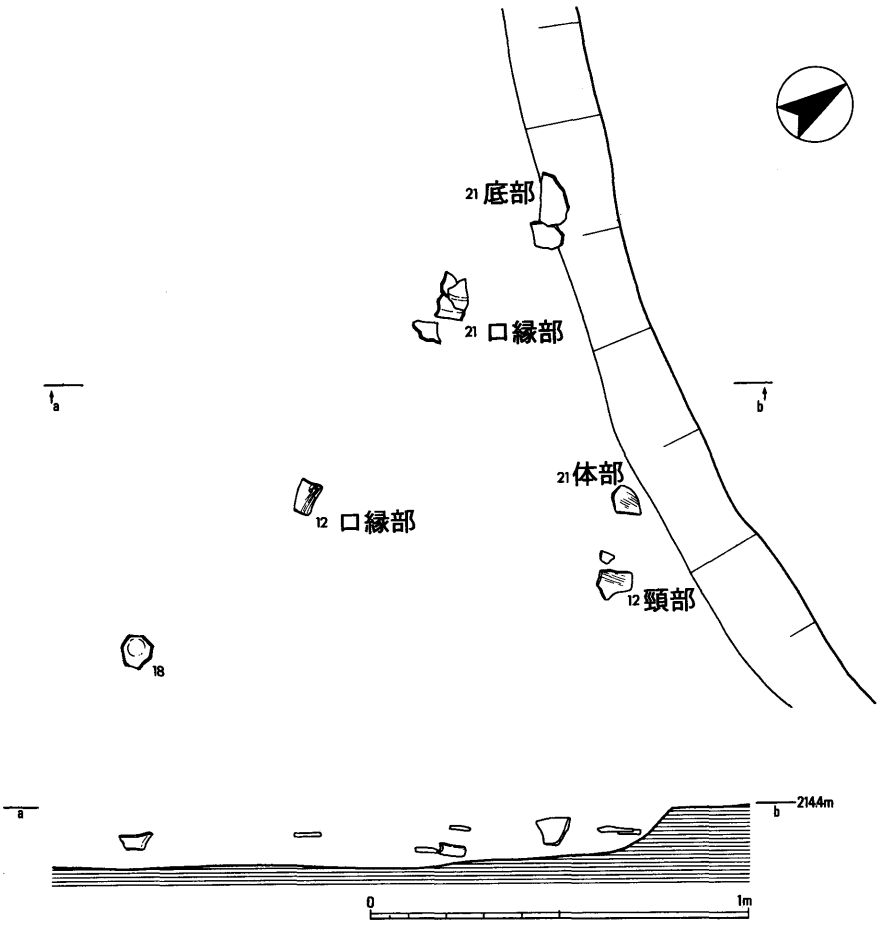



fig. 9　小流路ＳＤ39遺物出土状況（1：20）

遠賀川式土器の壷のほか、二枚貝条痕文を施す深鉢（甕）なども見られ、類例の少ない当該時期資料の一括性の高い資料として貴重なものと考える。

### b　飛鳥～奈良時代の遺構

飛鳥～奈良時代の遺構は数多く、竪穴住居跡・土壙墓・溝・土坑・焼土坑・掘立柱建物・ピットなどがある。当遺跡の中心的時期といえる。

**竪穴住居ＳＨ４**(fig.10)　Ａ地区区南部のｅ・ｆ28グリットで検出した遺構である。東西約3.0m、南北約3.2mのやや長方形の小形竪穴住居である。検出面からの深さは、標高の高い西側でも0.1mほどである。そのため、東側の１辺が削平のために削り取られた結果、このような小形のものとして確認された可能性も残されている。

西壁中央にはカマドがある。カマドに向かって右側の北西隅には貯蔵穴が見られる。貯蔵穴から北壁寄りの部分は他の床面よりも１段高くなっており、カマドの前庭部で再度下降する。貯蔵穴では、下部がある程度埋没した段階で土師器の皿が伏せられたような状態で出土した。

床面には灰色系・黄灰色系の砂質土によって貼床がなされている。貼床は、ほぼ全面に認められた。

主柱穴は確認できなかった。また、壁周溝も認められなかった。

所属時期は、貯蔵穴の埋土上部にあった土師器皿から、奈良時代後半頃を前後する時期と考えられる。

**竪穴住居ＳＨ10**(fig.10)　Ａ地区中央部のｉ20グリット付近で検出した遺構である。東西約3.8m、南北約4.6mの、長方形の竪穴住居である。検出面からの深さは、およそ0.3mであった。

西壁中央部にカマドを持つ。カマドは、調査区内の土層中には見られなかった淡緑灰色系シルトを用いて構築されている。カマドの中央部には花崗岩と考えられる長さ約20cm、幅約15cmの河原石が見られたが、カマドの支柱石にしてはやや大きすぎ、目的は不明と言わざるを得ない。カマドの底面は炭混じり層を含み、若干の被熱痕跡が認められた。

床面には灰色系砂質土による貼床が認められ、それは中央部においてより厚いものであった。貼床下

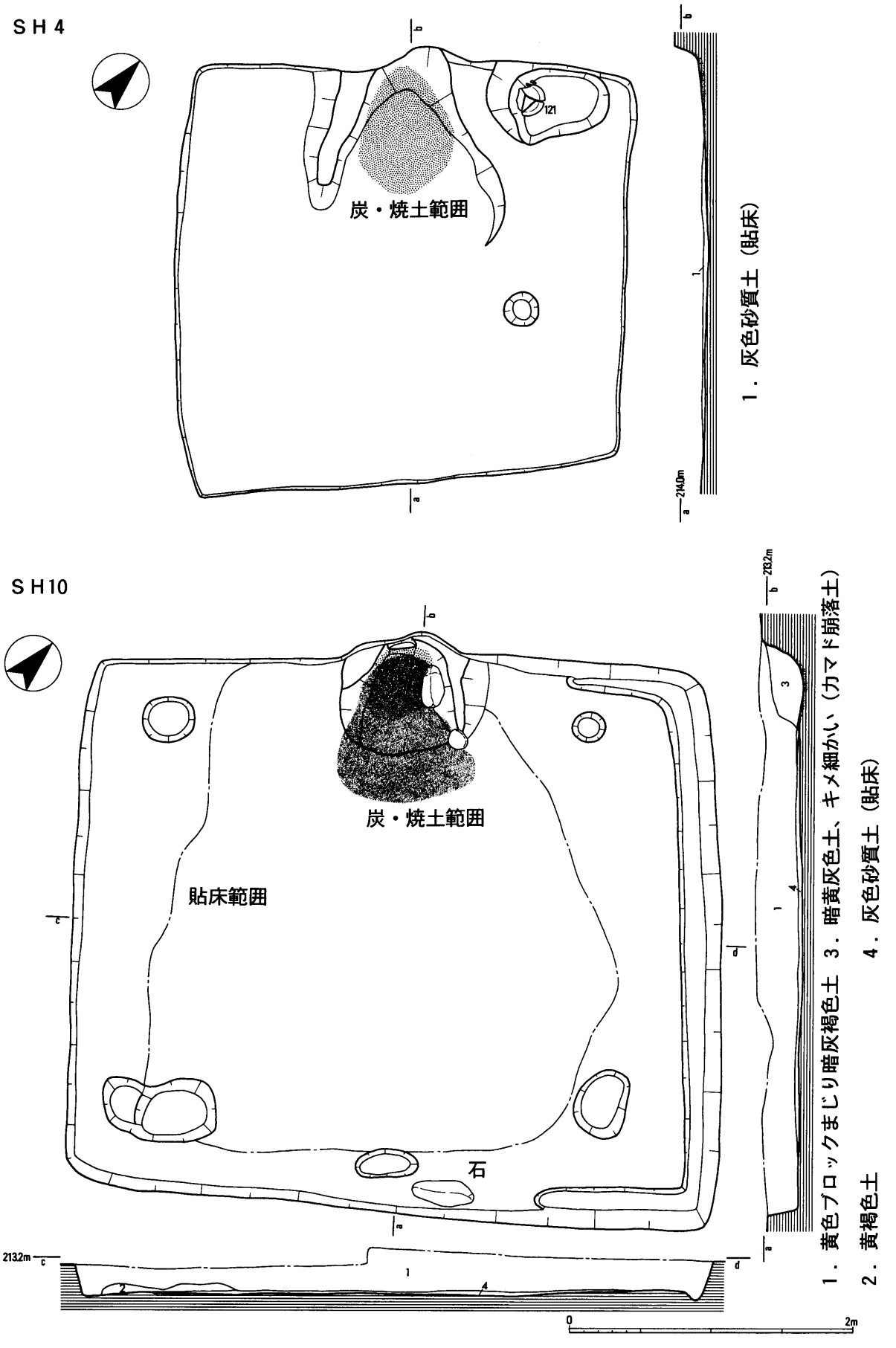
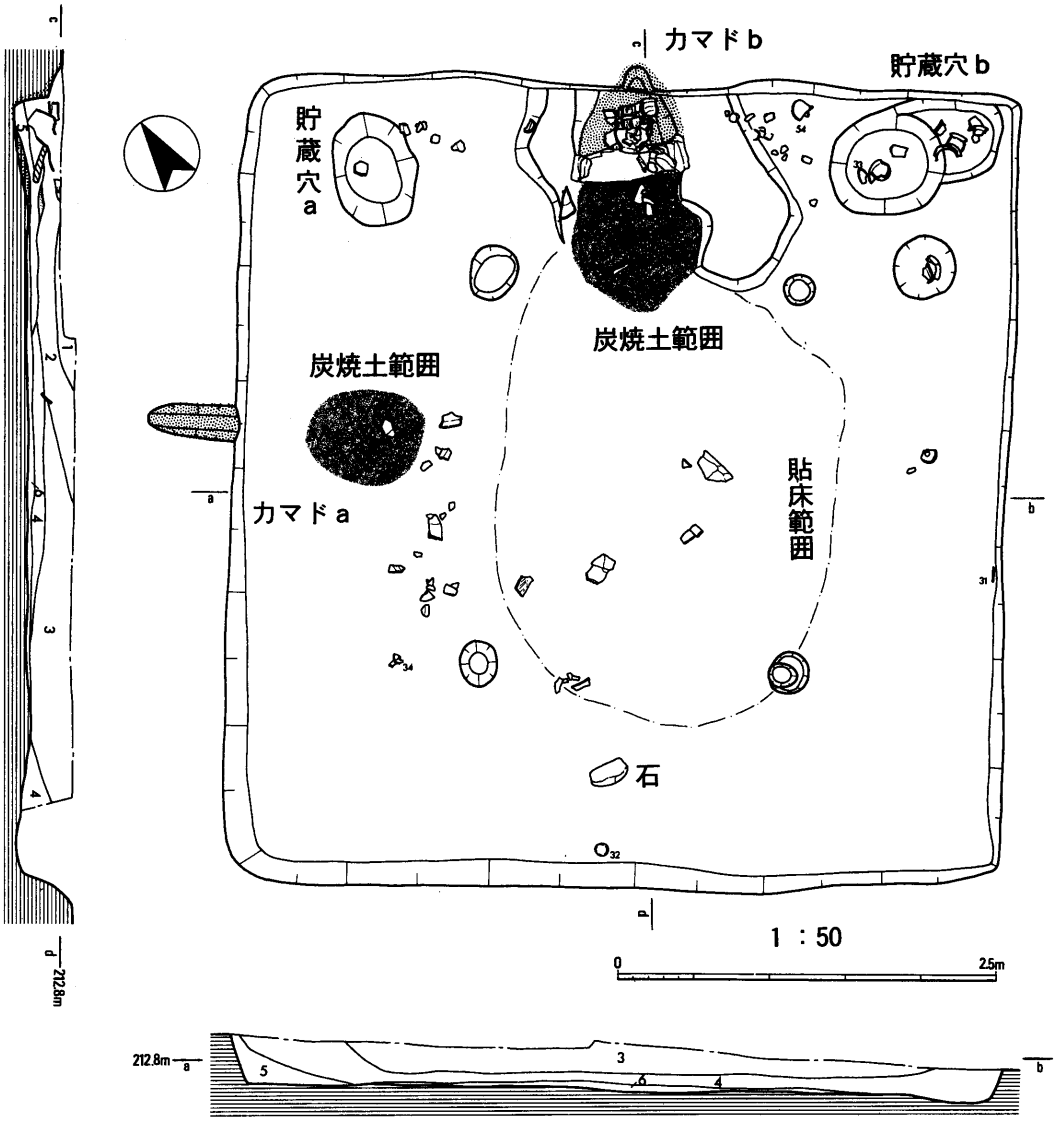



fig.10　竪穴住居ＳＨ４・10　平面・断面図（1：40）




1．黄色ブロックまじり暗灰褐色土
2．暗灰褐色土
3．炭まじり暗褐色土
4．暗褐色土
5．焼土・炭まじり黄灰色土
6．灰色砂質土（貼床）

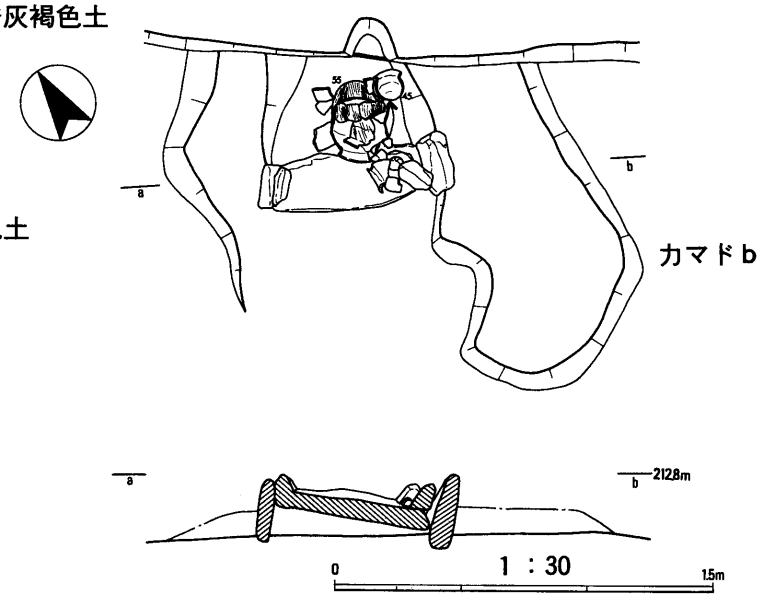



fig.11　竪穴住居ＳＨ15　平面・断面図

には何らの施設も見られなかった。

東壁面を中心に、壁周溝が見られる。竪穴住居全体を囲繞するものではなかった。

なお、東壁の中央に接するようにして、河原石が認められた。断定はできないが、カマドのちょうど反対側にあたる位置であることから、出入り口の施設である可能性が考えられる。

主柱穴は、建物隅付近に柱穴と考えられるピットが存在しているため、それが相当するものと考えられる。

所属時期は、出土遺物が少ないため明確にはできないが、後述するＳＨ15の土器群に近く、飛鳥時代の後半頃を前後する時期と考えてよかろう。

**竪穴住居ＳＨ15**（fig.11）　Ａ地区中央部のｋ・ｌ19・20グリットで検出した遺構である。東西約5.1m、南北約4.9mの、ほぼ正方形を呈した竪穴住居である。検出面からの深さは、残りの良い西側で約0.4mであった。

カマドは、２ヶ所で確認された。カマドａは、西壁中央に存在する。煙道の一部と、カマド底面の被熱痕跡および炭などが確認されたものである。遺構内を調査していた段階で、カマド袖土などの構築物は一切確認されていない。そのため、後述するカマドｂの構築に際して撤去されたものと考えられる。

カマドａに向かって右手の建物内北西隅には、カマドａに伴うと考えられる貯蔵穴が認められる（貯蔵穴ａ）。貯蔵穴ａ内には遺物が全く認められず、カマドａの撤去に伴って貯蔵穴ａも廃棄・埋立されたものと考えられる。

カマドｂは、北壁中央に存在する。北壁から約20～30cmの位置に高さ約30cm、厚さ10cm弱、幅約20cmの立石を設けて袖の芯材とし、その上に横幅約55cm、縦幅約25cm、厚さ10cm程度の横石を据えて焚口の天井としている。横石は、立石間に小石を充填したり、淡黄灰色系砂質土を用いたりして固定している。横石は、その直上に接して出土した土器片が奥に置かれた土師器長胴甕と接合したため、カマド機能時から露出していたものと考えられる。

カマド内の土器を据える位置には、土師器長胴甕１個体と小形甕１個体とが置かれていた。当初、使用時の状態がそのまま残されているものと考えたが、長胴甕の底が抜けていること、そして同一個体の破片がカマド右袖の外側に散乱していたことから、廃棄に伴って何らかの目的で据えられたものと考えるに至った。

カマドｂの底面は良く被熱していた。また、カマド前庭部にはそれに伴う炭層も薄く認められた。

カマドｂの右側には貯蔵穴ｂが存在する。貯蔵穴ｂは内部に段を有している。内部には、土師器小形甕を中心に、良好な破片が含まれていた。カマドｂに伴う貯蔵穴と考えてよかろう。

主柱穴は、小形ながら建物内に４ヶ所認められた。また、この主柱穴間には、灰色系砂質土を主体とした貼床が良好に認められた。

竪穴住居ＳＨ15の埋土内には、須恵器類・土師器類などの多くの土器類が見られた。とくに、南壁に沿うようにして出土した鎌が注目される。これは、刃先を上にして、まさに壁に沿うようにして出土している。付着していた木質痕から、刃を上にして壁面にもたれかけさせていたものと考えられる。住居を廃棄する時点での「忘れ物」なのであろう。

所属時期は、建物内から出土した多くの遺物から、飛鳥時代前半を中心とした時期と考えられる。

**竪穴住居ＳＨ16**（fig.12）　Ａ地区中央部のｊ・ｋ20・21グリットで検出した遺構である。東西約4.6m、南北約4.1mの、長方形を呈した竪穴住居である。検出面からの深さは、残りの良い西側で約0.3mであった。建物北東隅は、竪穴住居ＳＨ15によって切られている。

カマドは、北壁中央部に認められる。袖部および上部は、周囲に認められた黄色系粘土によって構築されていたものと考えられる。煙道は非常に残りが良く、トンネル状で確認された。カマドの燃焼部には小穴があり、支脚石が置かれていた痕跡と考えられる。

主柱穴は、竪穴住居ＳＨ15によって削り取られている北東隅を除き、３ヶ所が確認できた。しかし、比較的浅いものであるため、主柱穴と断定するにはやや不安が残る。主柱穴と考えられるピットの間には、灰色系砂質土を主体とする貼床が認められたが、あまり踏み固められてはいないようである。

西壁沿いを中心に、壁周溝も一部確認できた。

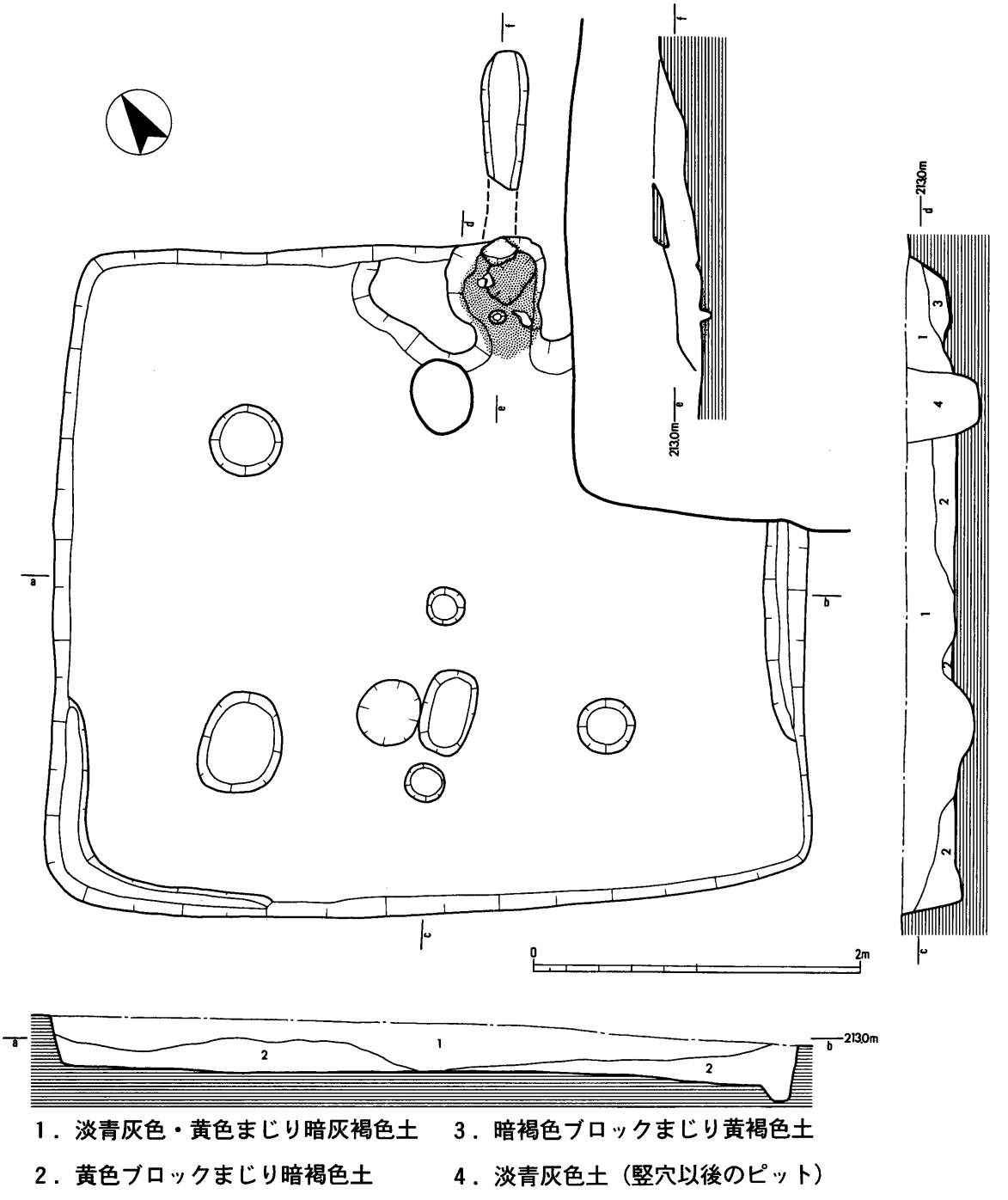



fig.12　竪穴住居ＳＨ16　平面・断面図（1：40）

所属時期は、出土遺物が少ないため明確にはし難いが、竪穴住居ＳＨ15よりは古いものであるため、飛鳥時代前半を中心とした時期と考えられる。

**竪穴住居ＳＨ17**（fig.13）　Ａ地区中央部のｍ・ｎ20・21グリットで検出した遺構である。北壁の全部と東西壁の一部が調査区外であるため、全体のおよそ２／３ほどを検出しているものと考えられる。南北約4.6mで、大きさとしては竪穴住居ＳＨ15に近い。遺構検出面からの深さは、およそ0.3mである。

北壁にカマドが認められる。右袖部は一部が調査区外であるため、全体の形状も明確でない。竪穴住居ＳＨ10のカマドに見られたような、黄灰色系砂質シルトがあり、ＳＨ10と同じ様な構築方法でカマドが造られていた可能性がある。カマドの中央部には花崗岩と思われる石が見られることも、竪穴住居ＳＨ10と共通する事項である。

北壁の西側を中心に、一部壁周溝が見られた。壁周溝の最もカマド寄りからは、土師器の台付椀の完

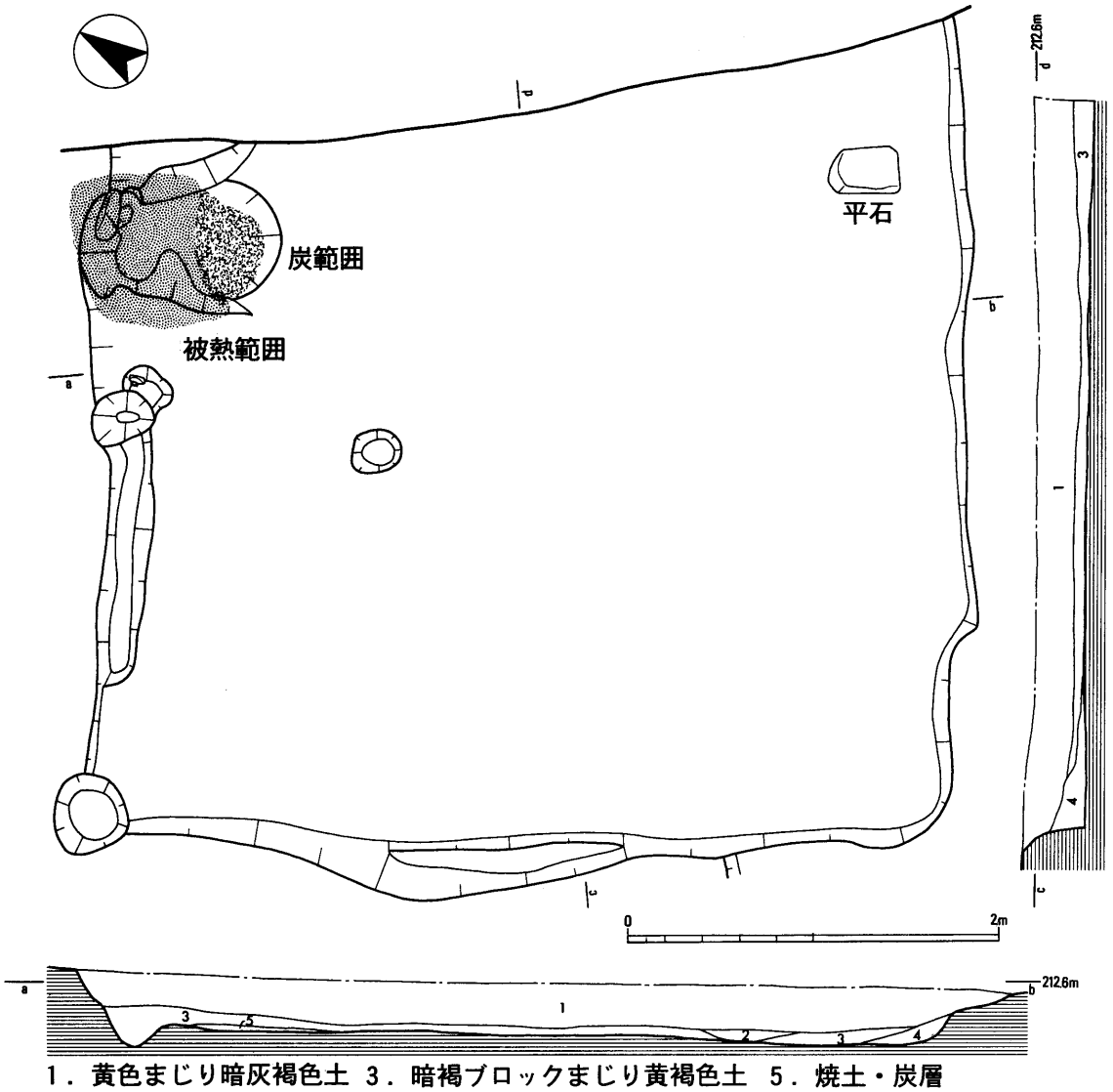



fig.13　竪穴住居ＳＨ17　平面・断面図（1：40）

形品が出土している。

主柱穴は確認できなかった。ただし、建物内中央部を中心に、灰黄色系砂質土を主体とする貼床は良好に認められた。

なお、建物内北東部には、花崗岩の平石が床面に据えられた状態で出土している。何らかの意味を有していると思われる。

所属時期は、出土した須恵器中に宝珠摘みを有した蓋があることから、竪穴住居ＳＨ15よりは新しい、飛鳥時代後半を前後した時期のものと考えられる。

**竪穴住居ＳＨ20**　Ａ地区中央部のｊ・ｋ21グリットで検出した遺構である。北壁を除き、その大部分が調査区外である。また、北壁の一部も竪穴住居ＳＨ16によって切られている。東西辺約4.8mの竪穴住居である。遺構検出面からの深さは、およそ0.5mである。

検出した範囲内では、何らの施設も確認することができなかった。

所属時期は、出土遺物が少ないため決めかねるが、竪穴住居ＳＨ16よりは古いものであることから、飛鳥時代前半かあるいは古墳時代後期にまで遡るものかと考えられる。

**竪穴住居ＳＨ22**　Ａ地区中央東部のｑ20グリットで検出した遺構である。大部分が調査区外である。遺構検出面からの深さは約0.1mであり、そのほかの竪穴住居と比較しても浅い。したがって、竪穴住居

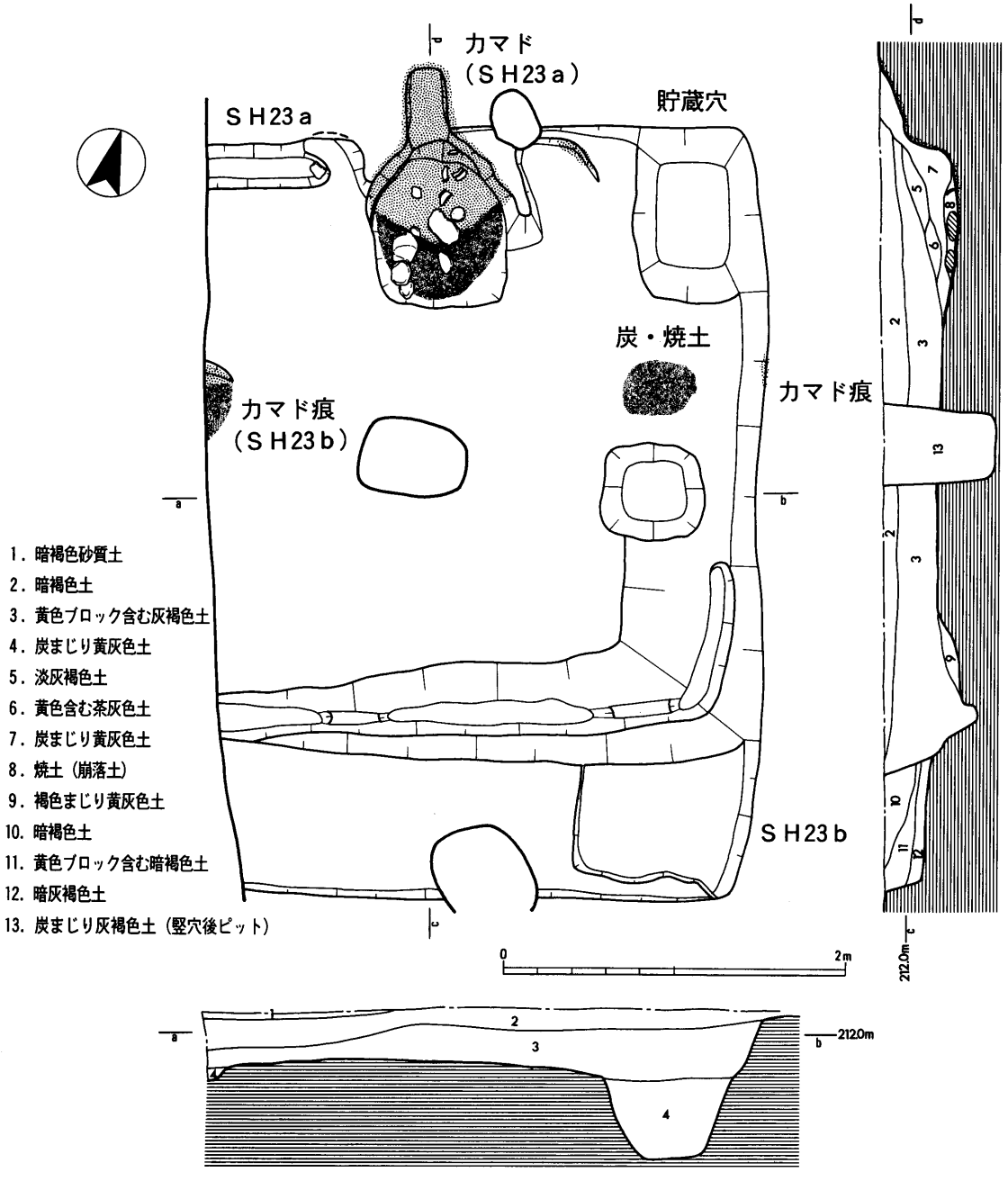



fig.14　竪穴住居ＳＨ23　平面・断面図（1：40）

ではない可能性も高い遺構である。

検出した範囲内では、何らの施設も確認することができなかった。

所属時期は、出土遺物が少ないが、飛鳥時代ないしは奈良時代のものと考えておく。

**竪穴住居ＳＨ23**（fig.14）　Ａ地区中央東部のｑ・ｒ20・21グリットで検出した遺構である。西壁を中心に、全体の約１／４が調査区外に及んでいるものと考えられる。遺構検出面からの深さは、良好な北側で0.4mである。

南北には同じ方向で２棟が重なっているものと考えられる。北側（ＳＨ23ａ）が古く、南側（ＳＨ23ｂ）が新しいものと考えられる。

**ＳＨ23ａ**　南北約3.8mの竪穴住居である。北側にカマドを持つ。カマドは、幅約0.8mをドーム状に掘り窪めたところに袖と天井を設けているものと考えられる。前庭部から燃焼部にかけて、砂岩質の礫を敷き詰めている。袖部は、両側に抉り込み状の室を伴っているが、この室の意味するところは不明である。煙道は、天井こそ残っていないものの比較的良好である。煙道の底面は暗紫褐色状に被熱し、カマド燃焼部が鮮やかな赤色に被熱しているのとは対照的である。

カマドの右側、建物北西隅には貯蔵穴を有する。

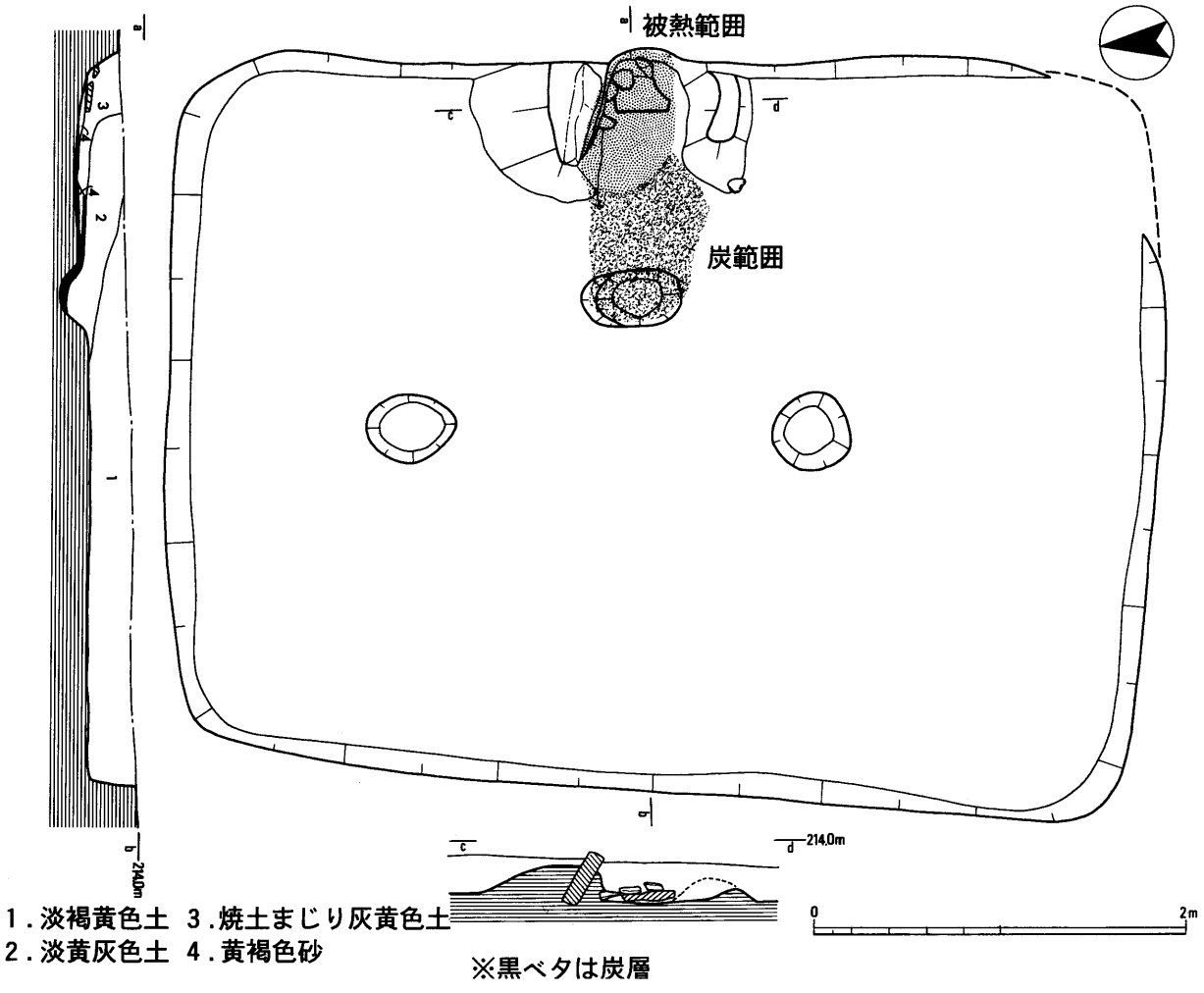



fig.15　竪穴住居ＳＨ31　平面・断面図（1：40）

また、カマドの左手と建物東・南壁寄りには壁周溝が確認できた。

なお、東壁沿いに焼土と、床面に焼土・炭を確認した。おそらく、竪穴住居ＳＨ15と同様に、カマドの作り替えがあったものと考えられる。位置的に見て、ＳＨ23ａに伴うものと考えられる。

**ＳＨ23ｂ**　南北約3.2mの竪穴住居である。北側にカマドを持つ。カマドは、検出時に２棟分の切り合いであることを認識せずに調査したため、その大半を除去してしまった。ＳＨ23ｂに伴う貯蔵穴・壁周溝などの施設は確認できなかった。

所属時期は、ＳＨ23ｂの埋土内から出土した須恵器類から、奈良時代前半頃を前後する時期と考えられる。ＳＨ23ａは、それにやや先行する時期と推測される。

**竪穴住居ＳＨ25**　Ａ地区中央東部のｓ21グリットで検出した遺構である。北西隅を検出したに止まり、その大部分が調査区外であるが、遺構の平面形状および壁面の立ち上がり状況から見て、竪穴住居であることは間違いない。遺構検出面からの深さは約0.3mである。

出土遺物は少なく、所属時期の判断は難しいが、飛鳥時代前後のものであろう。

**竪穴住居ＳＨ27**　Ａ地区東端部のｔ・ｕ22グリットで検出した遺構である。南北約3.2mの竪穴住居で、遺構の大部分は調査区外である。遺構検出面からの深さは、約0.3mである。

検出範囲では、南壁の両隅と中央にピットが見られた。これは、主柱穴の一種ではないかと考えられる。

所属時期は、出土遺物が少ないため断定できないが、奈良時代を前後する時期のものと考えられる。

**竪穴住居ＳＨ28**　Ａ地区東端のｕ22グリットで検出した遺構である。北壁の一部のみを検出したも

のであるため、規模は全く不明である。遺構の平面形状および壁面の状況から、竪穴住居と判断した。遺構検出面からの深さは、約0.4mである。

遺構埋土内には、焼土・炭などが確認できたが、カマドの有無については判らなかった。

所属時期は、出土遺物が少ないため断定できないが、奈良時代を前後する時期のものと考えられる。

**竪穴住居ＳＨ29**　Ａ地区東部のｒ20グリット付近で検出した遺構である。南北約3.8mで、竪穴住居の西壁付近のみが検出されたものと考えられる。遺構検出面からの深さは、約0.3mである。

遺構内の施設としては、南壁の一部に壁周溝と思われるものを検出した。

所属時期は、出土遺物が少ないため、明確にはし難いが、飛鳥時代を前後する時期のものと考えられる。

**竪穴住居ＳＨ31**（fig.15）　Ａ地区北部のｂ・ｃ７・８グリットで検出した遺構である。東西約3.8m、南北約5.4mの長方形を呈した竪穴住居である。遺構検出面からの深さは、約0.3mである。

東壁中央にカマドを持つ。カマドは、左袖にのみ砂岩系の平石を用いている。また、カマド中央部には、数個の円礫および平石が置かれていたが、何を意味するものかは不明である。

カマドの底面はよく被熱しており、前庭部には炭層が見られた。この炭層は、カマド前面にある小ピット内に２層ほど流れ込んでいる。また、このピットは一部被熱している。このピットが何を意味するのかは、今のところ不明とせざるを得ないが、カマドに伴う施設の一種であることは明らかである。

床面には灰色系砂質土により貼床が施されている。主柱穴と考えられるピットは、中央に２ヶ所あり、この竪穴住居が２本の主柱穴で構築されていたことを物語る。

出土土器には、底部に墨書のある土師器皿もある。時期的には、奈良時代後半を中心としたものである。

**土坑ＳＫ８**　Ａ地区中央部のｅ25グリットで検出した遺構である。長辺約2.0m、短辺約1.7mの長方形を呈する。検出面からの深さは、深いところで約0.2mである。

後述するＳＫ９ほどは明確ではないが、かなり方形を意識して掘削された遺構である。埋土内からは奈良時代頃の須恵器・土師器が出土しており、遺構の時期と示すものと考えられる。

**土坑ＳＫ９**（fig.16）　Ａ地区中央部のｄ24グリットで検出した遺構である。検出時には不定形の土坑であったが、最終的には長辺約1.3m、短辺約1.2mの、ほぼ正方形の土坑となった。検出面からの深さは、約0.5mである。

壁面も、垂直に近い状態で掘削されており、底面

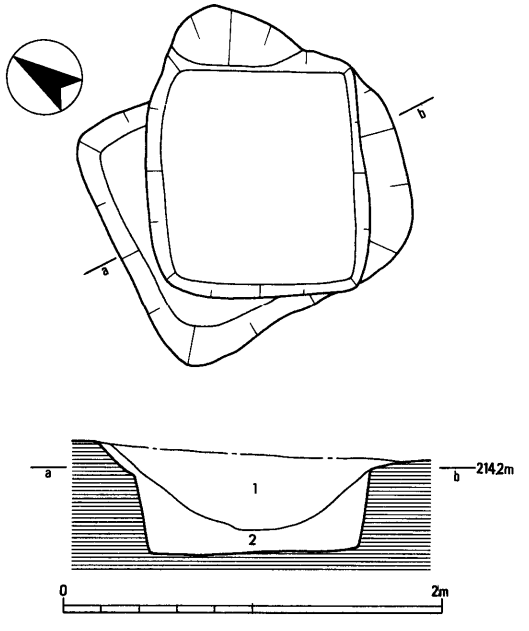



fig.16　土坑ＳＫ９　平面・断面図（1：40）

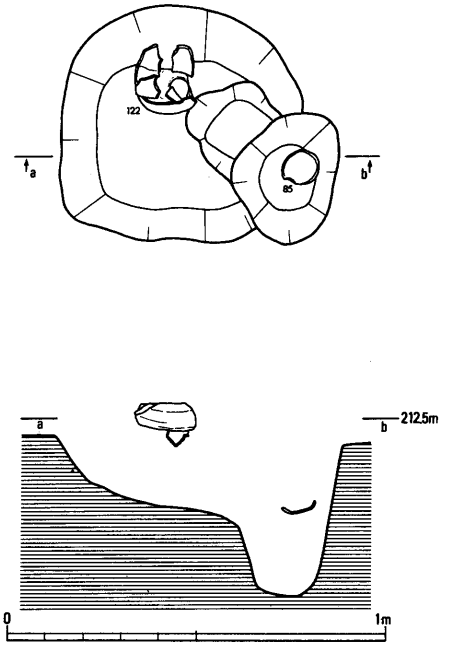



fig.17　小土坑ＳＫ18・o20－pit２　平面・断面図（1：20）

は平らである。かなり意識的に方形を意図したものと考えられるが、柱穴や井戸ではなさそうである。

埋土内からは少量の土師器片が出土したのみであるが、前述のＳＫ８と同様、奈良時代頃の遺構と思われる。

**小土坑ＳＫ18**（fig.17）　Ａ地区中央東部のｏ20グリットで検出した遺構である。直径約0.6m、検出面からの深さ約0.2mの小規模な土坑である。ｏ20－pit２と切り合い、ＳＫ18の方が新しい。

土坑がほぼ埋没した段階で、その上に口縁部を意図的に打ち欠いた平瓶を、口縁部を下にして設置している。このような形状から、何らかの祭祀的なもの、あるいは墓の一種とも考えられる。

出土した平瓶の形態から、奈良時代の遺構と考えられる。

**焼土坑ＳＫ21**　Ａ地区中央東部のｏ20グリットで検出した遺構である。短辺約0.5m、長辺約1.1mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは約0.3mで、遺構壁はほぼ垂直に掘削されている。

土坑埋土内に、多量の炭と焼土を含んでいた。遺構壁面には、明瞭な被熱痕は見られなかった。

埋土中から土師器甕を中心とした土器が出土し、炉に近い施設ではないかと考えられる。時期的には、奈良時代前後のものと考えられる。

**土壙墓ＳＸ11**（fig.18）　Ａ地区中央部のｋ18グリットで検出した遺構である。幅約0.65m、長さ約1.55mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは、深いところで約0.15mである。遺構の主軸は、N70°Ｅである。

墓壙内東側から須恵器の蓋杯が、西側から鉄鏃が出土した。鉄鏃は、同一個体と考えられるものが２片になって別々の場所から出土した。位置的に見て、茎部分の出土位置が当初の原位置を保っていると考えられる。

木棺の痕跡については、検出を試みたが、明確に把握できなかった。

時期的には、出土した須恵器から、飛鳥時代前半頃のものと考えられる。

**溝ＳＤ５**　Ａ地区中央南部のｆ27～28グリットで検出した遺構である。幅約0.3m、深さ約0.1mで、遺構の掘形はあまりしっかりしていない。

埋土中から、飛鳥時代前半を中心とした土師器・須恵器類が出土している。

**溝ＳＤ13**　Ａ地区中央部のｊ18グリットで検出した遺構である。幅約0.1m、検出面からの深さ約0.1mの溝で、Ｌ字状に屈曲している。遺構の南西側肩は垂直に近い状態で落ち、北東側は緩やかに傾斜している。この形状から、竪穴住居の壁周溝のみが残存したものである可能性もある。

出土遺物には土師器甕の小片があるのみで、明確な時期は判らない。

**掘立柱建物ＳＢ12**（fig.19）　Ａ地区中央南部のｄ・ｅ26～27グリットで検出した遺構である。東西２間（約3.6m）、南北２間（約3.6m）を基本とする。建物主軸は、N47°Ｗである。

四隅のピットは一辺約0.8mほどの方形を意識し

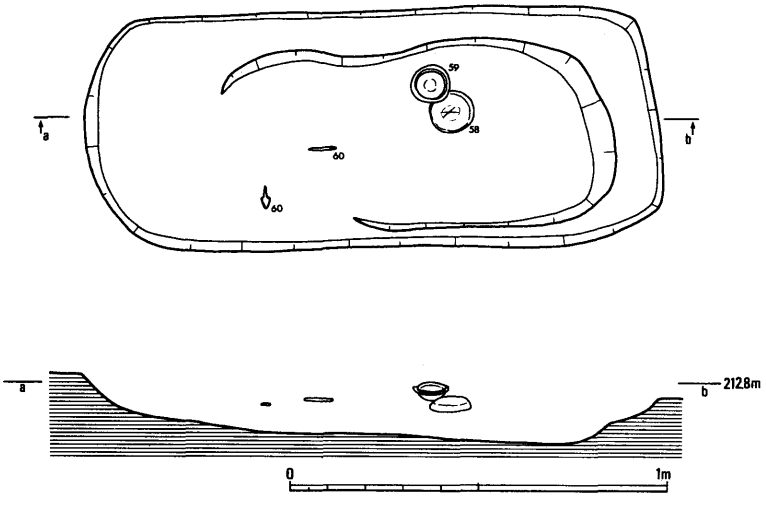



fig.18　土壙墓ＳＸ11　平面・立面図（1：20）

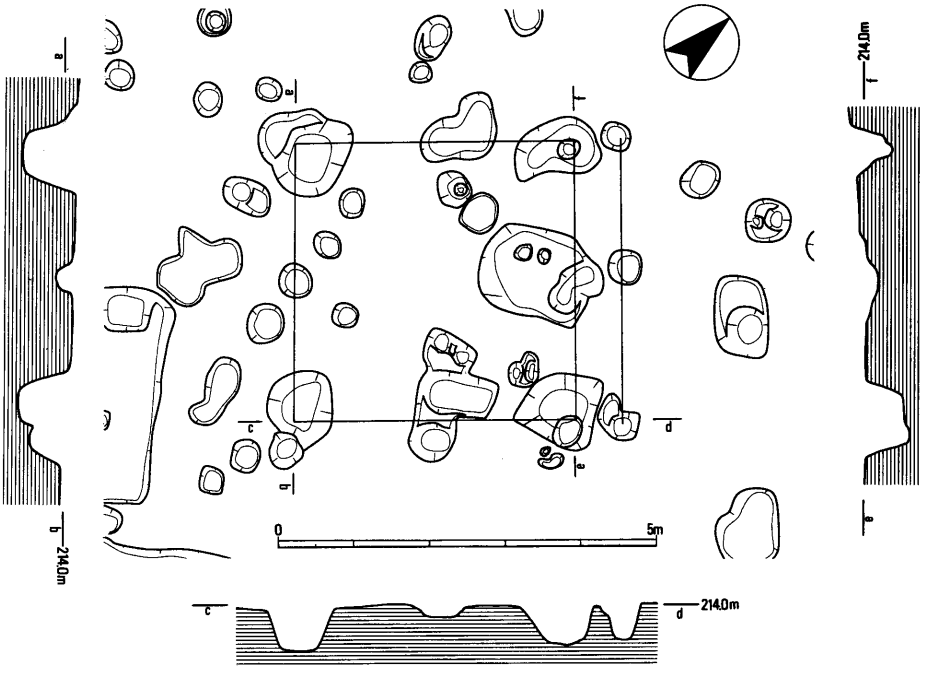



fig.19　掘立柱建物ＳＢ12　平面・断面図（1：100）

た大きめのもので、その間のピットは直径約0.4m程度の円形のもので小さい。建物北辺の外部にはそれに方向をほぼ揃える柱列がある。それ以外の外縁部にもピットが見られるので、あるいは束柱状のものが存在していた可能性もある。

出土遺物は小片のみで、明確でないが、飛鳥時代前半以降の須恵器・土師器類が含まれているため、飛鳥時代後半から奈良時代にかけての時期の遺構と考えられる。

**土坑ＳＺ32・33**　Ａ地区北部のｂ～ｄ７～９グリットで検出した遺構である。南北約10m、東西約８ｍ（一部調査区外）という不定形の大きな土坑状の遺構である。竪穴住居ＳＨ31に切られ、それ以前の遺構であることがわかる。中央には、最大のもので幅50cm近くにもなる大礫が投棄されていた。

この土坑は、埋土中に焼土・炭なども含まれており、竪穴住居が数棟切り合ったものである可能性もある。しかし、調査中にそれを見分けることはできなかった。

出土遺物中には、須恵器杯や土師器杯の良好なものを含む。また、円形に炭化した木製品も存在していた（ＰＬ.24参照）。時期的には、奈良時代前半頃と考えられる。

**小流路ＳＲ７**　Ａ地区中央部のｂ～ｅ22～23グリットで検出した遺構である。埋土は褐色系砂で、流路と考えられる。規模が小さいため恒常的なものではないものと考えられる。埋土中には、飛鳥時代を中心とした時期の遺物を含んでいる。

### ｃ　平安時代の遺構

明確にはピットが確認されているに止まる。Ａ地区ｅ６グリットpit１からは志摩式製塩土器が出土している。

### ｄ　中世の遺構

**掘立柱建物**　中世の遺構は、主にＢ地区で多く検出している。とくに、Ｂ２地区にはピットも数多く検出されており、掘立柱建物が数棟存在していたことは明らかである。しかし、これらのピットを建物としてまとめることはできなかった。

ピットには、南伊勢系の鍋第３段階のものを含み、15世紀前半頃以降の掘立柱建物が存在していたものと考えられる。

**石組土坑ＳＫ61**（fig.20）　Ｂ２地区中央部のｉ９グリットで検出した遺構である。石材は大部分がすでに抜き取られているが、一部残存していた石材から、内法で一辺約2.0m四方の石組が存在していたものと考えられる。石組は、１段分のみが確認で

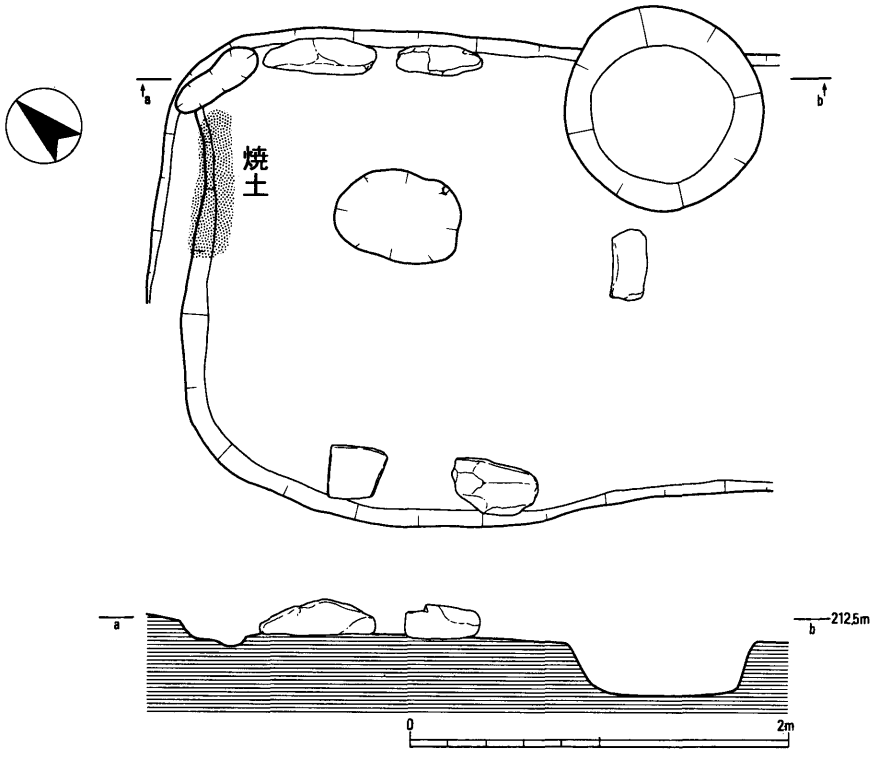



fig.20　石組土坑ＳＫ61　平面・立面図（1：40）

きたが、もう数段存在していた可能性もあろう。

埋土中には遺構西部を中心に焼土・炭などが認められた。とくに西壁付近では、遺構底面に被熱痕が認められたため、この遺構内で火を用いた何らかの行為がなされていたものと考えられる。

出土遺物には南伊勢系の鍋第３段階ｂ型式のものが存在するため、15世紀前半を中心とした時期の遺構と考えられる。

**落ち込みＳＺ42**　Ｂ１地区北部のａ２～３グリットで検出した遺構である。明確な掘形を伴わない遺構で、検出時には炭層の堆積として確認したものである。

多量の炭を含んでおり、内部には南伊勢系および中北勢系の土師器鍋・羽釜が認められた。時期的には、南伊勢系の鍋第４段階ｄ型式以降のものを含むため、16世紀前半頃のものと考えられる。

**落ち込みＳＺ40・41**　Ｂ１地区で検出した遺構である。ともに、幅７ｍ以上の大きな落ち込みであり、谷状地形と考えられるものである。ＳＺ40の遺構下部からは、溝状あるいは土坑状の遺構が見られたが、明確な掘形を伴うものは認められない。

出土遺物には南伊勢系の鍋第４段階のものを含み、16世紀前半以降かと考えられる。

**落ち込みＳＺ49**　Ｂ２地区南部に認められる大規模な落ち込みである。位置的に見て、Ｂ１地区のＳＺ40と一連である可能性がある。埋土中の遺物から、16世紀前半以降に埋没しているものと考えられる。

### ｅ　近世以降の遺構

**石垣ＳＺ30**　Ａ地区北部のａ～ｃ10～14グリットで検出した遺構である。幅約２ｍ程度の溝を掘り、その中に東面する石垣が組まれている。石垣は大部分が崩れているが、一部３段以上残っている部分もあった。造られている位置から考えて、田圃の石垣にあたるものであろう。

掘形埋土内からは鎌倉時代以降の土器が出土しているが、時期的には近世以降と考えられる。

### ｆ　時期不明の遺構

**掘立柱建物ＳＢ63**（fig.21）　Ａ地区南部のｂ31～33グリットで検出した遺構である。東西２間以上、南北３間（約12.5ｍ）の掘立柱建物である。建物方向はＮ30°Ｅである。

出土遺物が極めて少なく、所属時期は明らかでないが、周辺から出土している少量の土器片からは、

鎌倉時代以前の遺構と考えられる。

**溝ＳＤ35・37**　Ａ地区南部のｂ33～35グリットで検出した遺構である。それぞれ幅約0.2m、深さ約0.1m程度のもので、両者は並行に並んでいるため、同時期のものである可能性が高い。ＳＤ35・37間は、およそ4.4mほどであり、この間が道の機能を果たしていたことも想定できる。

なお、この２つの溝は、先述の掘立柱建物ＳＢ63とも方向が揃っているようであり、これらが全体として一連の遺構である可能性があろう。

**溝ＳＤ38**　Ａ地区南部のｂ31～35グリットにかけて検出した遺構である。幅約0.4m、深さ約0.3mの溝である。埋土は基盤層に近い色調で、やや褐色味を帯びた黄灰色土であり、飛鳥時代前後の遺構埋土とは異なっている。おそらく、それ以前の遺構なのであろう。

出土遺物は少なく、明確ではないが、比較的しっかりした掘形の遺構である。

**焼土坑ＳＦ64**　Ａ地区中央東部のｒ21グリット、竪穴住居ＳＨ23の埋土上で検出した遺構である。幅約0.5m、長さ約0.7mの隅丸長方形で、遺構検出面からの深さは約0.1cmであった。埋土中に多量の炭を含み、遺構壁面も一部被熱により焼けている。遺構内からは骨などの遺物は出土しなかったため、おそらくは炉か何かの遺構であろう。

出土遺物はないが、周辺に奈良時代から平安時代（前半？）にかけてのピットが見られるので、おそらくその時期前後の遺構であろう。

**焼土坑ＳＦ65**　Ａ地区北部のｄ７グリットで検出した遺構である。幅約0.6m、長さ約1.0mの隅丸長方形で、遺構検出面からの深さは約0.1mであった。焼土坑ＳＦ64と同様、埋土中に多量の炭を含み、遺構壁面も一部被熱により焼けている。やはり、炉か何かの遺構と考えられる。

出土遺物はないが、周辺に平安時代を中心としたピットが見られるので、おそらくその時期前後の遺構であろう。

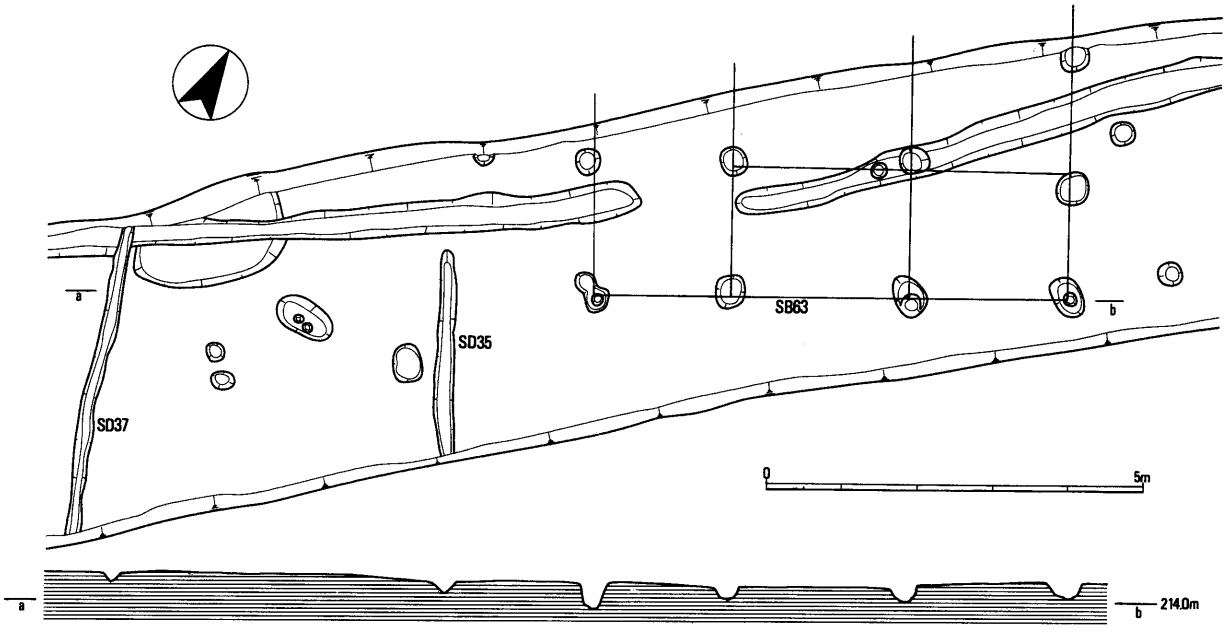



fig.21　掘立柱建物ＳＢ63および溝ＳＤ35・37　平面・断面図（1：100）

| 遺構番号 | 性　格 | 時　期 | 地　区 | グリット | 特　徴　・　形　状　・　計　測　数　値　な　ど |
|---|---|---|---|---|---|
| ＳＫ１ | 落ち込み | 奈良？ | A | f 26 | |
| ＳＫ２ | ピット | 奈良 | A | e 26 | 堀立柱建物ＳＢ12のうちの１ピット |
| ＳＫ３ | ピット | 奈良 | A | e 26 | 堀立柱建物ＳＢ12のうちの１ピット |
| ＳＨ４ | 竪穴住居 | 奈良 | A | ～f 28～ | 北カマド |
| ＳＤ５ | 溝 | 飛鳥～奈良 | A | f 28 | 落ち込み状 |
| ＳＤ６ | 溝 | 飛鳥前半 | A | ～d 29 | |
| ＳＲ７ | 流路 | ～中世前期 | A | d 23～ | 瓦器片・山茶碗片 |
| ＳＫ８ | 土杭 | 奈良後半 | A | e 25～ | |
| ＳＫ９ | 土杭 | ～奈良 | A | d 24～ | |
| ＳＨ10 | 竪穴住居 | 奈良 | A | i・j 20・21 | 北カマド |
| ＳＸ11 | 土壙墓 | 飛鳥前半 | A | k 18 | 須恵器（蓋・身各１個）・鉄鏃（１本）を副葬 |
| ＳＢ12 | 掘立柱建物 | 奈良 | A | e 26・27 | ２間×２間、北部に柱列？ |
| ＳＤ13 | 溝 | 飛鳥？ | A | j 18 | 竪穴住居の壁周溝か？ |
| ＳＫ14 | 土杭 | 飛鳥？ | A | l 17 | |
| ＳＨ15 | 竪穴住居 | 飛鳥前半 | A | ～k 20～ | 土器多い　北→東カマド　最終のはカマドは石組 |
| ＳＨ16 | 竪穴住居 | 飛鳥前半？ | A | j・k 20・21 | 北カマド　ＳＨ15より古　煙道良好 |
| ＳＨ17 | 竪穴住居 | 飛鳥後半 | A | m・n 20・21 | 北カマド |
| ＳＫ18 | 小土杭 | 奈良 | A | o 20 | 口縁部を打ち欠いた平瓶を倒立して設置 |
| ＳＫ19 | 土杭 | ～奈良 | A | o 20 | 土師器甕類のみ出土 |
| ＳＨ20 | 竪穴住居 | 飛鳥前半？ | A | k 20・21 | ＳＨ16より古 |
| ＳＫ21 | 焼土杭 | ～奈良 | A | o 20・21 | 土杭壁面焼ける。炭多い。 |
| ＳＨ22 | 竪穴住居 | 奈良 | A | q 20 | |
| ＳＨ23 | 竪穴住居 | 奈良後半 | A | q・r 20・21 | 建て替え有　東→北カマド　軽石出土 |
| ＳＤ24 | 溝 | 不明 | A | q 20 | |
| ＳＨ25 | 竪穴住居 | 奈良 | A | s 21 | |
| ＳＫ26 | 土杭 | 奈良 | A | t 21 | |
| ＳＨ27 | 竪穴住居 | 奈良？ | A | t・u 22 | 壁際に柱穴 |
| ＳＨ28 | 竪穴住居 | 奈良後半 | A | u 22 | |
| ＳＨ29 | 竪穴住居 | 飛鳥後半 | A | r 20 | 壁周溝 |
| ＳＺ30 | 石垣 | 近代？ | A | a 11～c 13 | |
| ＳＨ31 | 竪穴住居 | 奈良後半 | A | b 7～c 8 | 東カマド　石組？　墨書土器出土 |
| ＳＺ32 | 竪穴住居群？ | 奈良前半 | A | b～d 9 | ＳＨ31以前 |
| ＳＺ33 | 竪穴住居群？ | 奈良前半 | A | c・d 7 | ＳＨ31以前 |
| ＳＺ34 | 落ち込み | 不明 | A | b 11～c 12 | |
| ＳＤ35 | 溝 | 不明 | A | b・c 33 | ＳＤ37と並行 |
| ＳＫ36 | 土杭 | 不明 | A | b 34 | 弥生時代か？ |
| ＳＤ37 | 溝 | 不明 | A | b 34～c 35 | ＳＤ35と並行 |
| ＳＤ38 | 溝 | 不明 | A | b 31～35 | ＳＫ36より古 |
| ＳＤ39 | 小流路 | 弥生前期 | A | b 37～c 39 | 遠賀川式土器と縄文晩期条痕文系土器とが共伴 |
| ＳＺ40 | 溝状落ち込み | 中世後期 | B | a 10～12 | |

**tab. 1　遺構一覧表**(1)

| 遺溝番号 | 性　格 | 時　期 | 地　区 | グリット | 特　徴　・　形　状　・　計　測　数　値　な　ど |
|---|---|---|---|---|---|
| ＳＺ41 | 溝状落ち込み | 中世後期 | B | a 3～5 | |
| ＳＺ42 | 炭溜まり | 中世後期 | B | a 2・3 | 広範囲な炭層 |
| ＳＺ43 | 落ち込み | 中世後期 | B | a 3 | |
| ＳＫ44 | 土杭 | 中世後期 | B | a 3 | 土器片多く含む |
| ＳＤ45 | 溝 | 中世後期 | B | a 2 | |
| ＳＫ46 | 土杭 | 中世後期 | B | a 10・11 | |
| ＳＺ47 | 土杭 | 中世後期 | B | a 9 | |
| ＳＫ48 | 土杭 | 中世 | B | a 6～7 | |
| ＳＺ49 | 谷地形 | ～中世前期 | B | h 11～j 15 | |
| ＳＫ50 | 土杭 | 中世後期 | B | h 9 | |
| ＳＫ51 | 土杭 | 中世後期 | B | h 9 | |
| ＳＫ52 | 土杭 | 不明 | B | h 8 | |
| ＳＫ53 | 土杭 | 奈良～ | B | h 8 | |
| ＳＫ54 | 落ち込み | 中世後期 | B | h 2 | 瀬戸大窯期の遺物含む |
| ＳＫ55 | 土杭 | 不明 | B | h 10 | |
| ＳＫ56 | 土杭 | 中世 | B | i・j 10 | |
| ＳＫ57 | 土杭 | 不明 | B | i 10 | |
| ＳＫ58 | 土杭 | 不明 | B | i 10 | 縄文土器片、サヌカイト含む |
| ＳＫ59 | 土杭 | 不明 | B | j 11 | |
| ＳＫ60 | 土杭 | 奈良～ | B | h 10 | 縄文後期の遺物含む |
| ＳＫ61 | 石組土杭 | 中世後期 | B | i・j 9 | 方形石組　焼土 |
| ＳＫ62 | 土杭 | 中世後期 | B | i・j 9 | ＳＫ61より新 |
| ＳＢ63 | 掘立柱建物 | 不明 | A | b・c 31～33 | 3間×2間以上　ＳＤ35・37にほぼ並行 |
| ＳＦ64 | 焼土杭 | 不明 | A | r 21 | ＳＨ23より新　炭充満 |
| ＳＦ65 | 焼土杭 | 不明 | A | d 7 | 炭充満 |

**tab. 2　遺構一覧表(2)**

# Ⅳ　調査の成果～出土した遺物～

今回の調査で出土した遺物は、整理箱に換算して約28箱である。内訳は、その大部分が飛鳥～奈良時代の土師器類で、中世の土師器類、飛鳥～奈良時代の須恵器類がそれに次ぐ。

ここでは、調査によって出土した遺物を中心に概略を記す。個々の遺物の詳細については、出土遺物観察表（tab. 3～10）も参照されたい。

## 1　縄文時代の遺物

縄文時代の遺物は、B地区を中心とした淡黄灰色系砂層からの出土が見られる。

1は浅鉢と考えられる。口縁端部が上下にやや拡張されて面をなし、そこにヘラ状工具による沈線によって区画がなされ、その後縄文施文されている。北白川上層式2期に相当する。

2も浅鉢と考えられる。ヘラ状工具による横方向の沈線が見られる。1と同じ時期のものであろう。

3は浅鉢の体部と思われる。最終調整がヨコナデによる凹線文が施されている。

5は浅鉢か、あるいは壷状の形態をなすものと思われる。残存部中央にヘラ状工具による沈線が見られる。そこを境に、上半はヘラミガキ、下半はケズリ状のナデである。

6は浅鉢の口縁部で、壷のような形状をなすものと考えられる。口縁部は、5のような形態をなすものであろう。頸部にヘラ状工具による沈線を持つ。内外面ともにヘラミガキされている。

7は深鉢の口縁部である。口縁端部直下に突帯を持ち、刻目が押し引きされる。刻目の原体は、明確な条線が見えないため、板状工具ではないかと考えられる。

8は深鉢の類の破片と考えられる。内外面に条痕文が見られる。また、破断面には焼成後の穿孔が認められる。

これらは、4が中期後半ないしは後期、1～3が後期、5～7が晩期のものと考えられる[1]。8は、後述の弥生前期まで下る可能性がある。

## 2　弥生時代の遺物

弥生時代の遺物は、A地区小流路SD39出土土器を中心に出土している。条痕を施す一群（以下、A群）と、いわゆる遠賀川式土器の一群（以下、B群）とがある。この2者は、B群の壷（21）のみ精良な素地粘土で、A群の全て、およびB群の甕（22）は

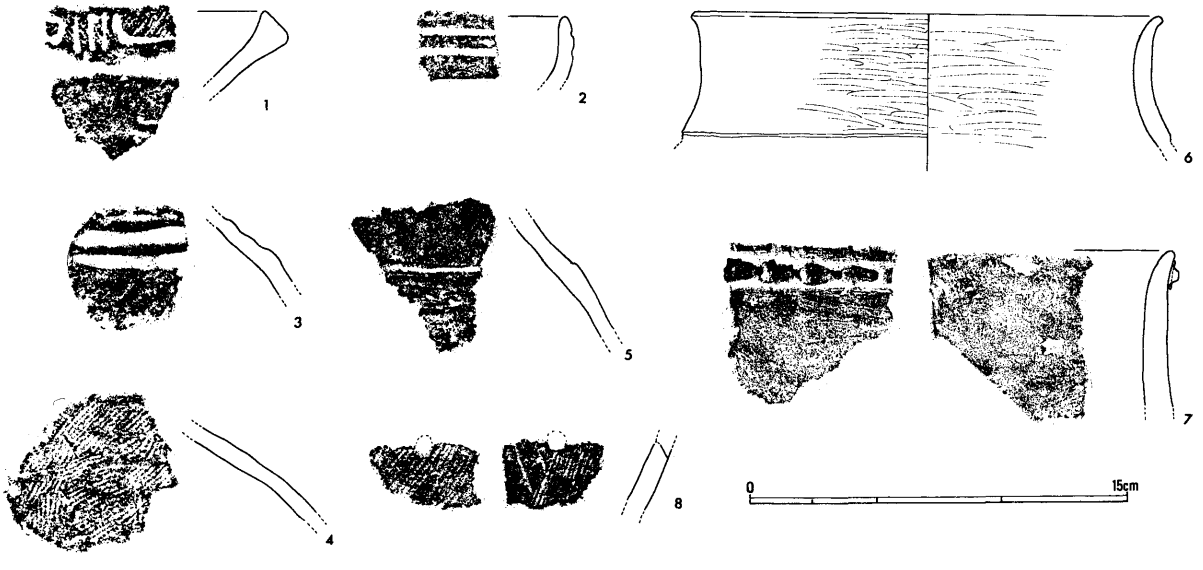



fig. 22　出土遺物実測図(1)　縄文土器（1：3）

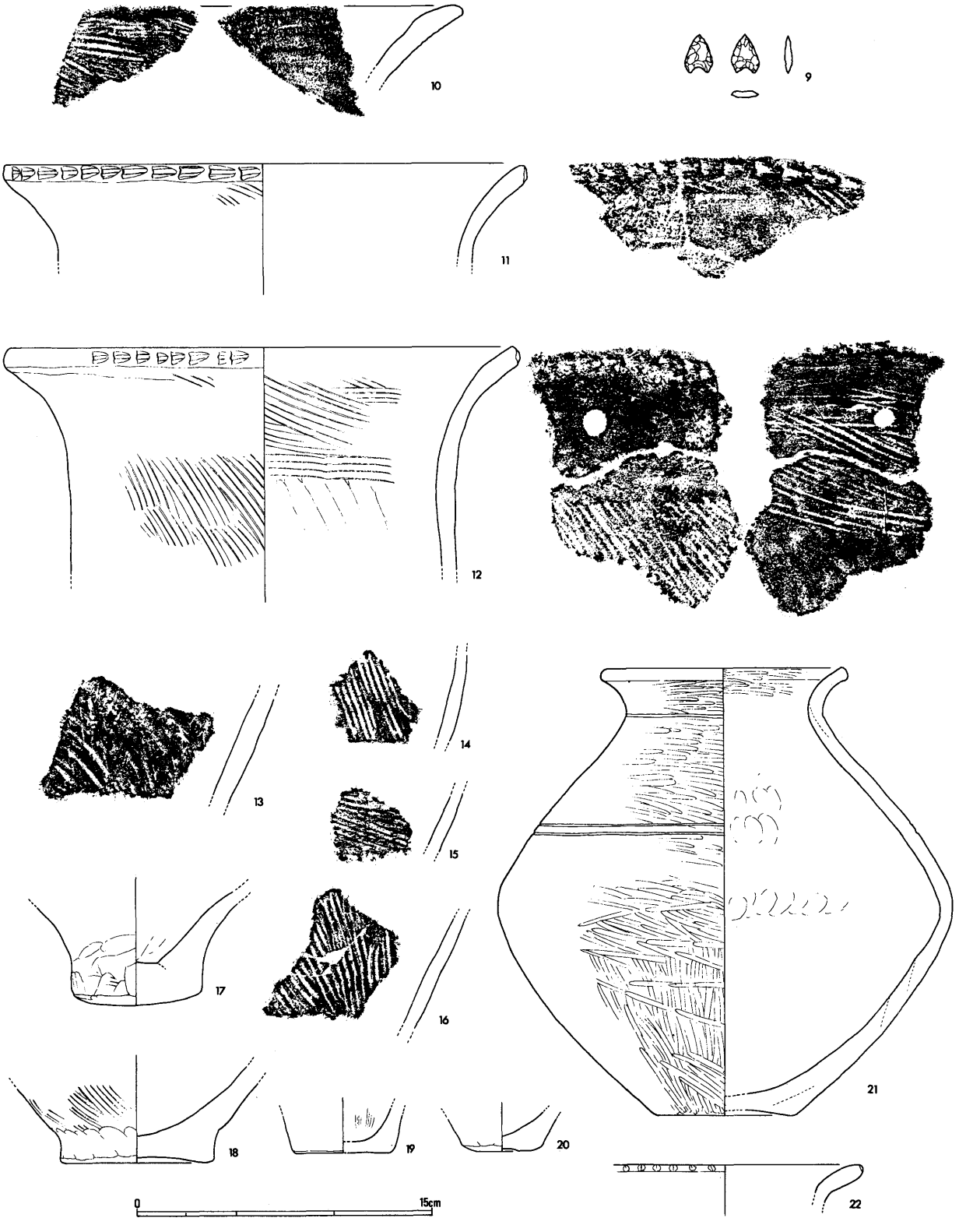



fig.23　出土遺物実測図(2)　弥生前期（1：3）

小石粒の多い、キメの粗い素地粘土を用いているという特徴がある。

**A群の土器**　口縁部では2個体分、底部では4個体分が認められる。いずれも二枚貝条痕文を施すものである。条痕文は、口縁部付近では内外面に見られ、体部片、あるいは底部片の内面には見られないものであることから、全面を条痕文調整したものではない。

口縁部には、大きく外反し、口縁端部に施文しないもの（10）と、ゆるやかに外反する口縁部で、口縁端部外面に刻目文を施すもの（11・12）とがある。12は、やや膨らむ体部を有しているものと考えられる。11・12の刻目は、体部と同様の二枚貝を用いたもので、「D」字形に押し引きしている。

12では、口縁部外面の条痕は、口縁部に施されたヨコナデによるためか、あまり明瞭ではない。体部下半の条痕は右下がりに施されている。内面は、口縁屈曲部を中心に条痕が認められ、体部はナデ調整が見られるのみである。

底部は全て平底である。突出するような底部のもの（17）と、平たいもの（18）、および小形のもの（19・20）がある。底面の調整はナデが認められる程度である。いずれの破片にも、煮沸時に付着した炭化物が内面に認められる。

**B群の土器**　壷（21）と甕（22）の2個体が確認できた。21は、外面の頸部に1条、体部肩の付近に2条のヘラ描沈線文を施し、その後に外面全体に丁寧な横方向のランダムなヘラミガキを施して仕上げている。口縁端部はやや面をなし、丸く収めている。

22は、甕の口縁部である。口縁端部外面にヘラ状工具によって刻目文が施される。素地粘土は、21よりはやや粗い。

### 3　弥生時代後期～古墳時代前期の遺物

この時期の遺構は検出できなかったが、土器類は少量出土している。高杯（23・24）、壷(25・26)・甕(27～29)、手焙形土器(30)などがある。

26は、壷の頸部付近の破片である。上から、櫛描横線文・櫛描刺突文・櫛描横線文・ヘラ刻目文と、施文がなされている。櫛描横線文・櫛描刺突文の施文原体は、細い円管を横に束ねたようなものを用いている。

27は受口状口縁を呈する甕である。口縁端部外面下方には、ヘラ状工具による刻目文がある。28・29は台付甕の台部で、29はS字状口縁を持つものであろう。28は、29よりもやや古い時期のものと考えられる。

30は手焙り形土器で、接合しない2ヶ所の破片からなる。鉢形の口縁部と、体部最大頸部に貼り付けられた突帯の2ヶ所に刺突による刻目文が見られる。

### 4　飛鳥～奈良時代の遺物

飛鳥～奈良時代[2]の遺物は、竪穴住居を中心に、比較的多く出土している。そのため、ここでは主な遺構出土土器を見ておこう。

**竪穴住居ＳＨ15出土の遺物**（31～57）

ＳＨ15からは、遺構埋土内を中心に、比較的多くの遺物が認められた。土器類を中心に、鉄鎌・磨石などがある。

31は鉄鎌である。柄に挟み込んで使用するもので、根元には柄の木質痕が残っている。

32は磨石である。埋土内から出土しているため、縄文時代頃の遺物というわけではなく、竪穴住居に

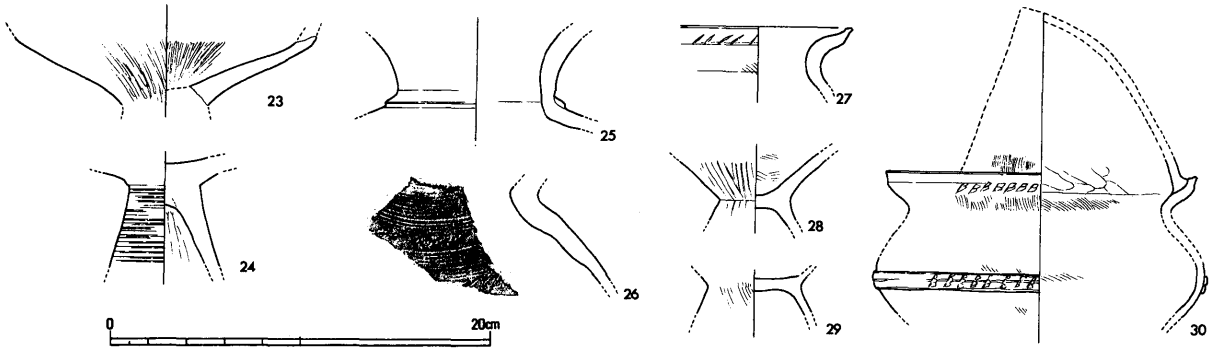



fig.24　出土遺物実測図(3)　弥生土器・古式土師器（1：4）

伴うものと考えるのが妥当であろう。花崗岩系の岩質で、全体に研磨が及んでいる。

須恵器には、高杯・蓋杯がある。杯蓋には、外面に段を持ち、弱い稜線をなすもの（36～38）と、明確な段がないもの（39）とがある。杯身は、返りのあるものである。残存状況が良好な杯身は、口径が10cm弱である。概ね、田辺昭三氏による陶邑編年（以下、田辺編年）[3]のＴＫ217型式に並行するものであろう。

なお、34・39・44にはヘラ記号が見られる。

土師器には、椀・甕・長胴甕・把手付鍋がある。また、図示していないが、甑の破片もある。

椀（33）は、古墳時代に見られるものの系統で、口縁部は丸く収められる。

甕は、口径12cm前後の（45・46）と、15cm前後のもの（47～51）、20cmほどのもの（52）がある。総じて、外反する口縁部で口縁部外面に面をなし、口縁端部が上方に若干突出するものである。頸部から体部にかけては、なめらかな曲線で移行する。体部外面は、縦方向ないしはやや右斜め方向へのハケメが施される。内面は、45・47にはヘラケズリが見られるが、多くはハケメないしは板ナデである。

長胴甕は、２個体分がある（54・55）。ともにカマドから出土したもので、底部は認められなかった。おそらくは意図的に打ち抜かれたものであろう。器面調整の手法は、甕と大差ない。

把手付鍋（56・57）は、２個体分ある。器面調整は、甕と同様である。

**土壙墓ＳＸ11出土の遺物**（58～60）

須恵器蓋杯と鉄鏃がある。58・59は、時期的には田辺編年のＴＫ217型式であるが、口径がＳＨ15のものと比べてやや大きく、また、外面のヘラケズリ手法や口縁部形態も若干異なっていることから、ＳＨ15よりは古い時期のものであろう。

60は長茎鏃で、茎部は一部欠損している。刃部は短い柳葉状をなす。

**竪穴住居ＳＨ17出土の遺物**（74～80）

須恵器蓋杯（74～76）、土師器台付椀（77）、土師器椀（78～79）、および土師器甕（80）がある。74・75は建物内南西部のほぼ同一地点から出土したもので、これで一組のものと考えられる。74は宝珠摘みを持つ。田辺編年のＴＫ217型式からＴＫ46型式にかけての時期、都城編年[4]では「飛鳥II」に並行する時期であろうと考えられる。

77は、内面に縦方向のヘラミガキを施す。台付の椀はあまり出土例がない。

**土坑ＳＺ32・33出土の遺物**（88～92）

土師器杯（88）、土師器甕（91・92）、須恵器杯（89）、須恵器壷（90）がある。

88は、外面には下半にヘラケズリを施した後に横方向のランダムなヘラミガキを施し、内面にはナデの後に螺旋状暗文、２段放射状暗文、および連弧状暗文を施す。非常に精緻な土器である。都城編年の「飛鳥Ⅳ」に並行するものと考える。

**竪穴住居ＳＨ31出土の遺物**（93～101）

土師器杯（93・94）、土師器皿（97・98）、須恵器杯（95・96）、土師器甕（99～101）がある。

93・94は非常によく似た胎土・形態のものである。内外面ともにナデ・ヨコナデ調整のみで、暗文は見られない。94の底部外面には墨書がある。２文字分で、少々読みづらい。１文字目は「奥」か「興」、２文字目は「宇」かと思われる。都城編年の「平城Ⅲ～Ⅳ」の時期であろうか。

**竪穴住居ＳＨ23出土の遺物**（102～114）

土師器椀（102～104）、土師器杯（105・106）、須恵器蓋杯（107・108）、土師器甕（109～112）、土師器甑（113）、砥石（114）のほか、土錘も多く見られる。

土師器椀は、口縁端部に若干の窪みを持つもので、底部外面には成型時に付いたと考えられる木葉痕を持つもの（102・103）もある。

105は杯で、内面には放射状暗文がある。精緻な土器である。都城編年の「平城Ｉ」に並行するものであろうか。

砥石は、自然の砂岩を用いたもので、平坦な面を全て利用している。

**その他の土器類**

その他の遺構出土遺物や、遺構検出中出土の遺物は、概ねこれまで述べてきた遺構出土の土器と同様のものである。ただ、少し異質なものに200の土師器甕がある。口縁端部が下方に大きく拡張されており、外側に２条ほどの凹線文が入る。弥生時代中期頃の甕である可能性もあろうか。

## 5　平安時代の遺物

平安時代の遺物は、ピットから出土したものを除き、遺構からまとまって出土したものは無く、その大部分が遺構検出中に出土したものである。遺物には、緑釉陶器・灰釉陶器・土師器類・黒色土器のほか、志摩式製塩土器がある。

灰釉陶器には、小片で図示していないが、黒笹90号窯式期[5]のものと思われるものがある。

土師器では、197の杯が平安時代前期頃に相当するものと考えられる。

黒色土器には椀がある。141～143がそれに相当する。確認したものは全て田中琢氏のいうＡ類[6]のものである。

製塩土器は、図示できたものは２点に止まる（144・198）。志摩式製塩土器である。Ｂ２地区南部のｊ10グリットを中心に数点の破片が出土しており、遺構には伴わないものの、今回の調査区内では、この部分に最も集中していると言える。

## 6　中世（鎌倉～室町時代）の遺物

中世の遺物は、その後半期のものはＢ地区を中心に遺構出土のまとまったものが見られるが、前半期のものは、Ａ地区の旧耕作土中から出土したものがある程度である。

中世前期の遺物には、陶器椀（山茶椀）・甕のほか、瓦器椀がある。陶器椀は、藤澤良祐氏の編年[7]による第４型式から第８型式にかけてのものが少量ながら認められる。瓦器椀は１点確認したに止まる。

中世後期では、土坑ＳＫ44やＳＺ42などに比較的まとまった遺物が見られる。ＳＫ61出土の207は、南伊勢系第３段階ｂ型式[8]に相当し、15世紀前半頃のものと考えられる。

ＳＺ42からは、煮沸用土器では南伊勢系のものが大部分ではあるが、数点の中北勢系羽釜（209～212）が出土したことは注目できる。これらの土師器類は、古瀬戸後期から大窯期[9]のものとの共伴が見られるため、15世紀後葉から16世紀前半にかけてのものと考えられる。

この他に、火打ち鎌（220・221）、銭貨（222・223）もある。火打ち鎌の確認例は、近年次第に増加しており、近隣では多気遺跡群（美杉村上多気・下多気）で出土している[10]。銭貨は、元祐通寶と嘉祐通寶である。ともに北宋銭であるが、中世後期にも継続して用いられたものと考えられる。

## 7　その他

### a　土錘

土錘は、遺構としては竪穴住居ＳＨ23から比較的多く出土している。形態的には全体が類似していること、および、遺構検出中の出土であること（中世以降の遺物包含層および遺構が皆無に近い）から、115を除いた大部分は奈良時代を前後した時期のものと考えられる。

土錘は、小さいもので長さ3.5㎝、大きいものでも長さ6.7㎝である。全て円棒状具に素地粘土を巻き付けることによって整形しているものと考えられる。

### b　その他の時期の遺物

その他の時期のものとしては、近世かと思われる陶器鉢（153）と、砥石（219）がある。218の砥石は砂岩で、赤く被熱している。磨面が平坦でないため、古墳時代以前のものである可能性もある。

【註】

(1)縄文土器については、全般的に田村陽一氏（斎宮歴史博物館）の御教示を得た。

(2)７世紀代を示す適切な用語がないため、ここでは当該期を「飛鳥時代」としておく。

(3)田辺昭三『須恵器大成』（1981　角川書店）

(4)古代の土器研究会編『古代の土器１　都城の土器集成』（1992）を参照した。

(5)斎藤孝正「東海地方の施釉陶器生産～猿投窯を中心に～」（『古代の土器研究～律令的土器様式の西東３～』古代の土器研究会　1994）

(6)田中琢「古代・中世窯業の地域的特質－畿内－」（『日本の考古学』第６巻　河出書房新社　1967）

(7)藤澤良祐「瀬戸地方の北部系山茶碗窯」（『尾呂』瀬戸市教育委員会　1990）ほか

(8)伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Miehistory』vol.1　1990）

(9)藤澤良祐「中世瀬戸窯の動態」（『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～』資料集　（財）瀬戸市埋蔵文化財センター　1996）および同氏「瀬戸大窯発掘調査報告」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ　1986）

(10)伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1993）

SH15（31～57）

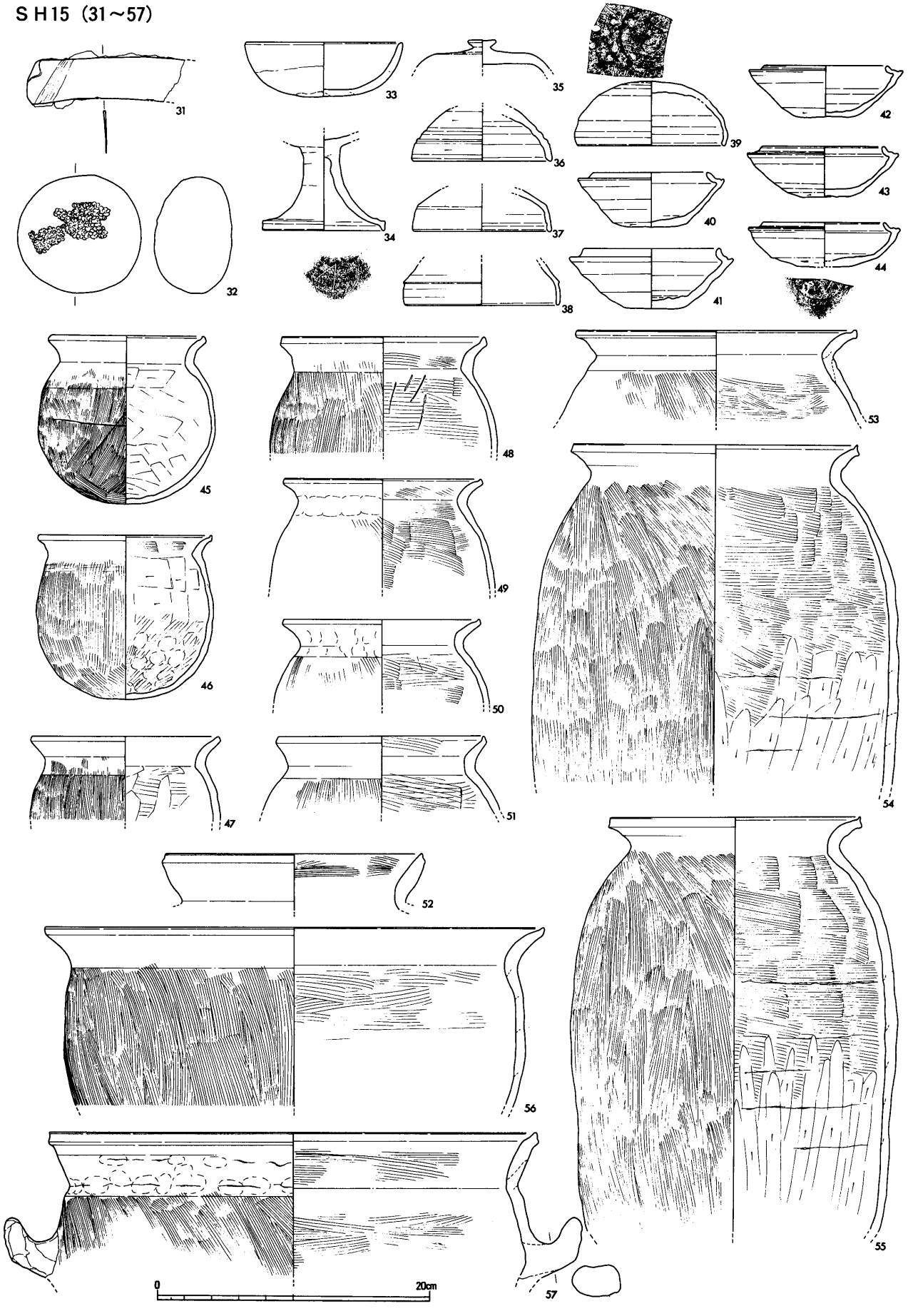



fig.25　出土遺物実測図(4)　竪穴住居ＳＨ15（１：４）

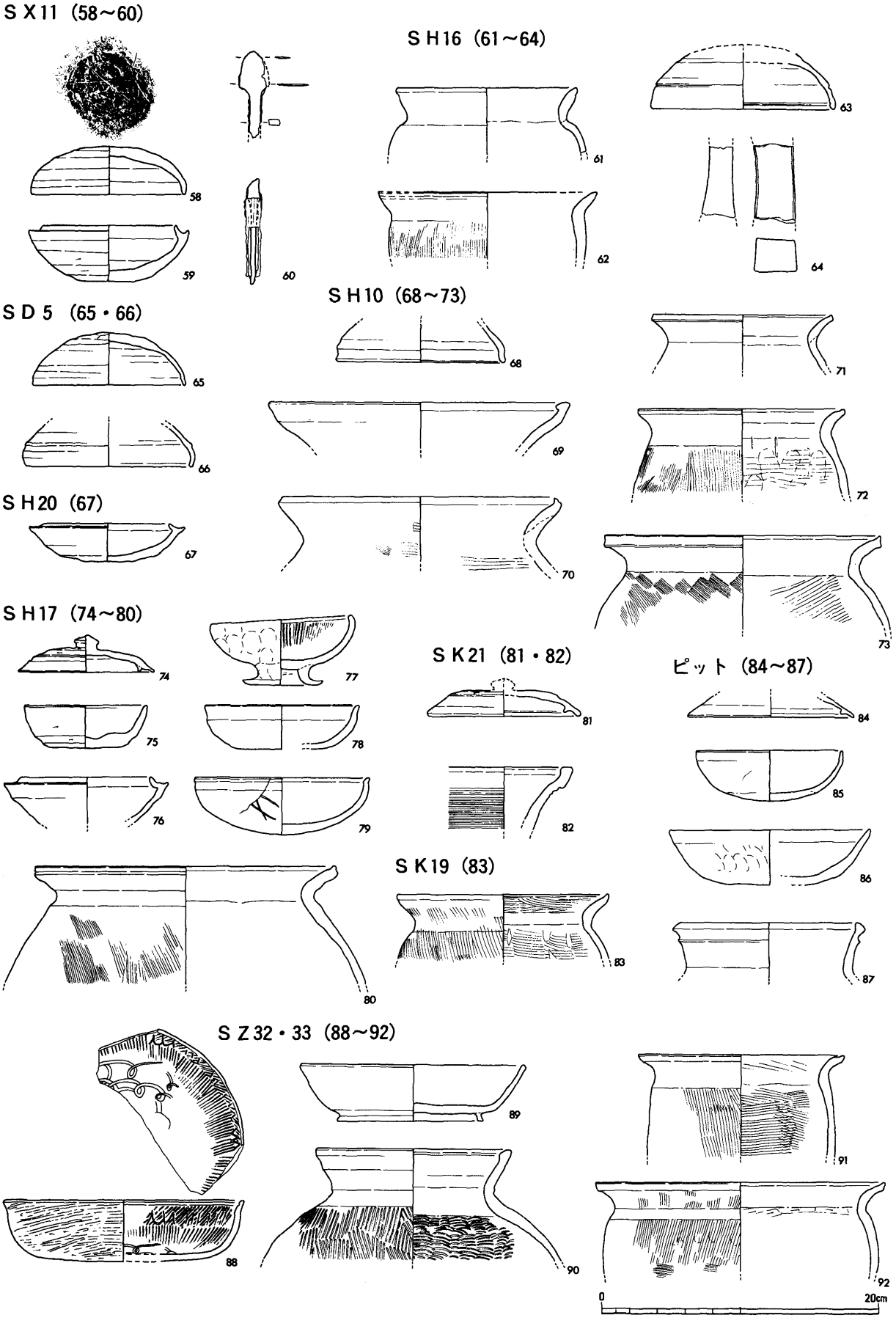



fig.26　出土遺物実測図(5)　土壙墓ＳＸ11ほか（１：４）

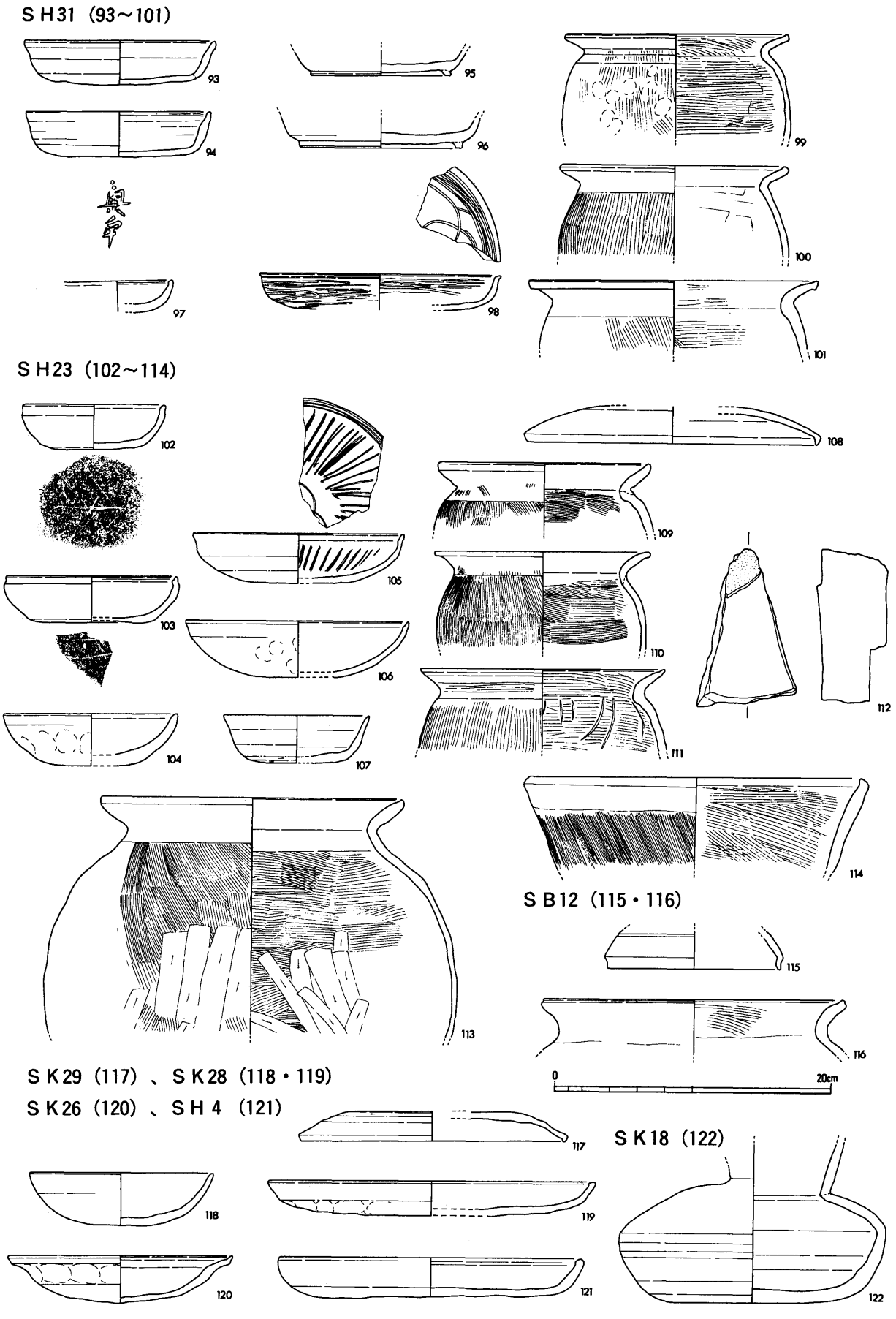



fig.27　出土遺物実測図(6)　竪穴住居ＳＨ31ほか（１：４）

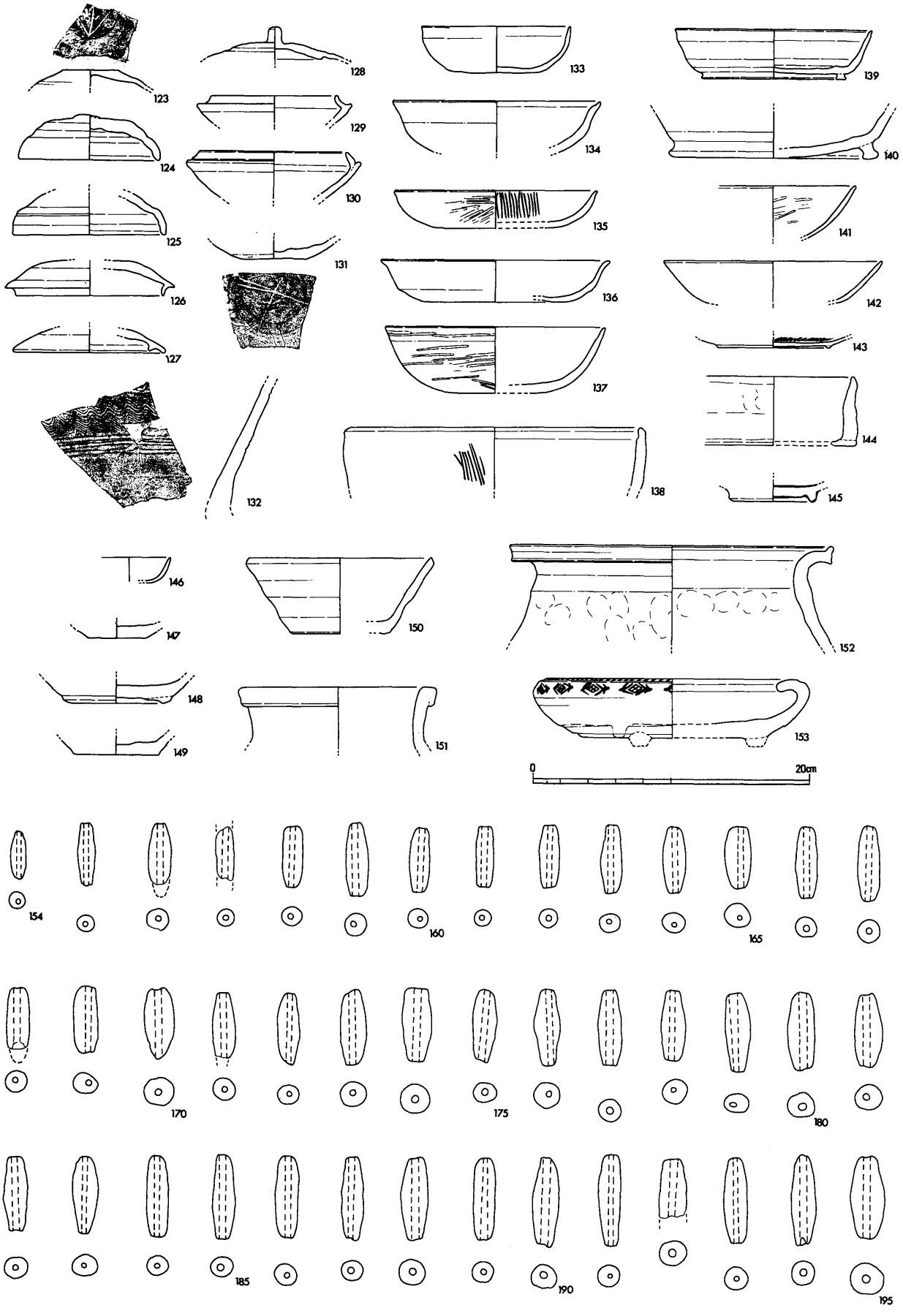



fig.28　出土遺物実測図(7)　包含層その他（1：4）

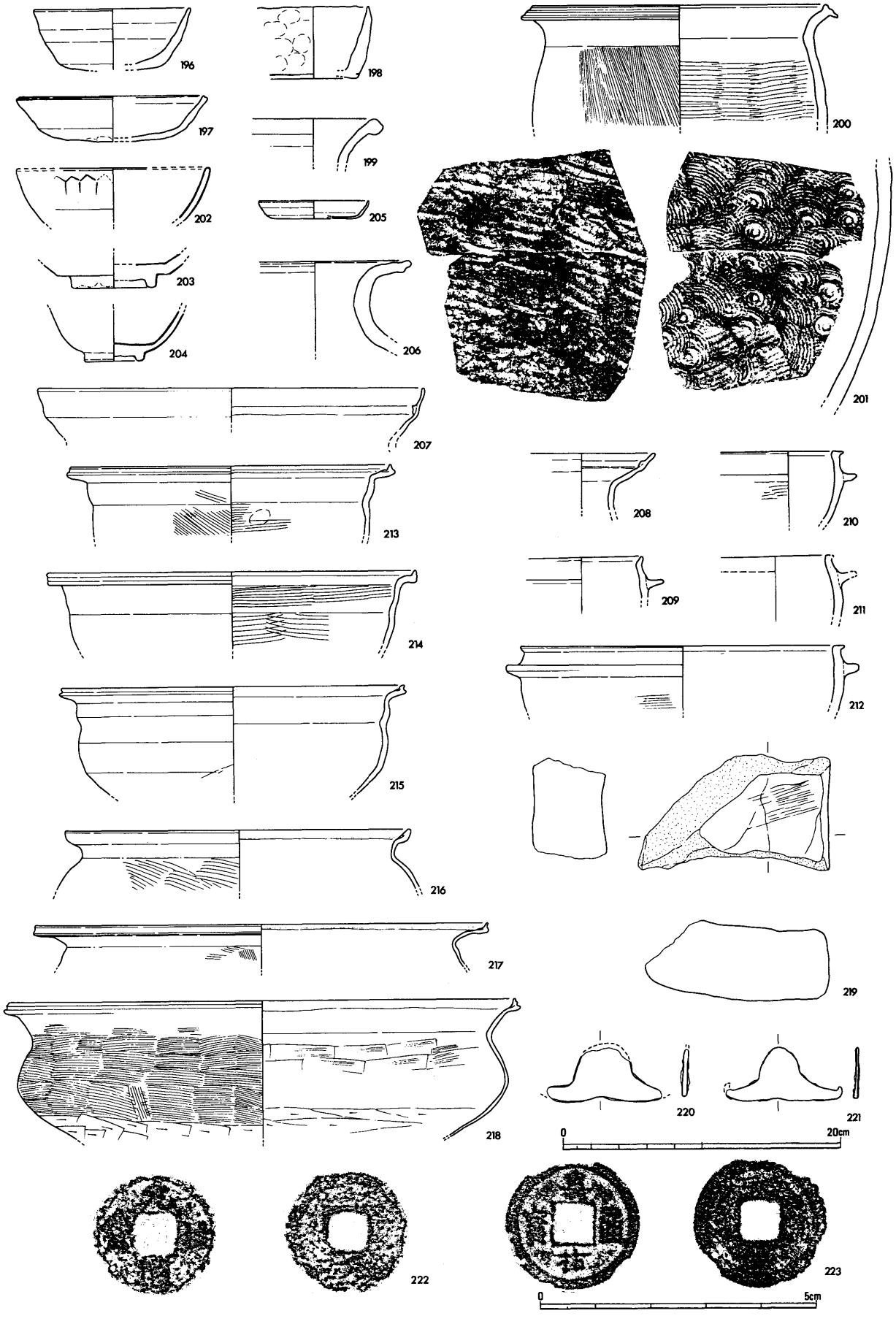



fig.29　出土遺物実測図(8)　B地区（222・223は1：1、他は1：4）

| 番号 | 実測番号 | 器種等 | 大地区 | 小地区 | 遺構・層名等 | 法量(cm) | 調整・技法の特徴 | 胎土 | 色調 | 残存 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 2103 | 縄文土器 鉢 | B地区 | h10 | SK60（混入） | 口縁ー | 口縁端部は沈線の後縄文、内面ミガキ | 粗 | 暗黄橙 | 口縁部片 | |
| 2 | 2001 | 縄文土器 鉢 | B地区 | h10 | 黄色砂層 | 口縁ー | 外面に凹線文 | 粗 | 暗黄橙 | 口縁部片 | |
| 3 | 2002 | 縄文土器 壺？ | B地区 | h10 | 黄色砂層 | 体部ー | 外面縄文、内面ナデ | 粗 | 淡黄橙 | 体部片 | |
| 4 | 2004 | 縄文土器 壺？ | B地区 | h10 | 黄色砂層 | 体部ー | 外面に凹縄文 | 粗 | 暗黄橙 | 体部片 | |
| 5 | 2005 | 縄文土器 壺？ | B地区 | a10 | SD40（混入） | 体部ー | 外面に沈線 | 粗 | 淡黄橙 | 体部片 | |
| 6 | 1902 | 縄文土器 壺 | B地区 | h10 | 黄色砂層T．P | 口縁18.8 | 横方向のヘラミガキ | 粗 | 淡黄橙 | 口縁1/5 | 外面に煤 |
| 7 | 3704 | 縄文土器 深鉢 | B地区 | a10 | SZ40底 | 口縁ー | 外；二枚貝条痕→突帯→二枚貝押し引きによる刻み | 粗 | 暗褐 | 口縁部片 | |
| 8 | 2003 | 縄文土器 深鉢 | B地区 | a4 | 砂礫層 | 体部ー | 内外面縄痕 | 粗 | 暗黄橙 | 体部片 | |
| 10 | 3703 | 条痕文系 深鉢 | A地区 | c37 | SD39 | 口縁ー | 外面にのみ条痕 | 粗 | 淡橙 | 口縁部片 | |
| 11 | 3701 | 条痕文系 深鉢 | A地区 | b37 | 検出中（SD39） | 口縁ー | 二枚貝条痕・二枚貝押し引きによる刻み | 粗 | 淡橙 | 口縁部片 | 12と同一個体 |
| 12 | 1905 | 条痕文系 深鉢 | A地区 | c37 | SD39 p2･3 | 口縁26.8 | 条痕・口縁端部に二枚貝押し引き | 粗 | 黄橙 | 口縁1/6 | 11と同一個体 |
| 13 | 2105 | 条痕文系 深鉢 | A地区 | b34 | 検出中 | 体部ー | 外面条痕 | 粗 | 暗橙 | 体部片 | |
| 14 | 2102 | 条痕文系 深鉢 | A地区 | c37 | SD39 | 体部ー | 外面条痕 | 粗 | 橙 | 体部片 | |
| 15 | 2101 | 条痕文系 深鉢 | A地区 | c38 | 黄灰土 | 体部ー | 外面条痕 | 粗 | 橙 | 体部片 | |
| 16 | 2104 | 条痕文系 深鉢 | A地区 | b37 | 検出中 | 体部ー | 外面条痕 | 粗 | 淡黄橙 | 体部片 | 内面に炭化物付着 |
| 17 | 3702 | 条痕文系 深鉢 | A地区 | b37 | 検出中（SD39） | 底6.6 | ナデ、一部条痕 | 粗 | 淡橙 | 底4/5 | |
| 18 | 1901 | 条痕文系 深鉢 | A地区 | c37 | SD39 p1 | 底7.8 | 外；オサエ→条痕 | 粗 | 淡黄 | 底ほぼ完存 | 内面に炭化物付着 |
| 19 | 601 | 条痕文系 深鉢 | A地区 | b35 | 床土 | 底5.2 | ナデ | 粗 | 暗灰黄 | 底1/2 | |
| 20 | 1904 | 条痕文系 深鉢 | A地区 | c37 | SD39 | 底4.0 | ナデ | 粗 | 暗黄橙 | 底1/3 | |
| 21 | 3601 | 弥生土器 壺 | A地区 | b37 | SD39 p5～7 | 口縁12.6 | オサエ・ナデ→横ヘラミガキ→沈線 | 密 | 淡黄灰 | 口縁1/4 | 遠賀川 |
| 22 | 1903 | 弥生土器 甕 | A地区 | c37 | SD39 | 口縁ー | 口縁端部に刻目 | 粗 | 橙 | 口縁部片 | |
| 23 | 106 | 弥生土器 高杯 | A地区 | s21 | pit2 | 杯下部16.0 | 内外面ヘラミガキ | 密 | 橙 | 杯下部1/6 | |
| 24 | 303 | 弥生土器 高杯 | A地区 | e24 | 検出中 | 脚柱3.8 | 外面櫛描横線文 | 密 | 淡赤橙 | 脚柱完存 | |
| 25 | 2702 | 土師器 壺 | A地区 | e23 | 検出中 | 頸8.4 | ナデ・ヨコナデ、頸部に突帯 | 粗 | 淡黄橙 | 頸1/3 | |
| 26 | 1404 | 弥生土器 壺 | A地区 | r20 | SH23（混入） | 頸ー | 櫛描横線文・櫛刺突文・ヘラ刻目文 | 粗 | 暗橙 | 頸部片 | 櫛刺突は、円管を束ねたようなもの |
| 27 | 204 | 弥生土器 甕 | A地区 | d23 | SR7 | 口縁ー | 外；ハケメ→ヨコナデ→刻目 | 密 | 灰白 | 口縁部片 | |
| 28 | 304 | 弥生土器 台付甕 | A地区 | e24 | 検出中 | 脚柱3.8 | ハケメ→ナデ | 粗 | 暗黄橙 | 脚柱完存 | |
| 29 | 305 | 土師器 台付甕 | A地区 | j19 | 暗褐色土 | 脚柱5.0 | ハケメ、ナデ | 粗 | 暗橙 | 脚柱完存 | |
| 30 | 3801 | 土師器 手焙形 | A地区 | n21 | 検出中 | 受部16.6 | ハケメ・ナデ体部に突帯→刻目文 | 密 | 淡橙灰 | 受部1/8 | 2片 |
| 33 | 2403 | 土師器 椀 | A地区 | k19 | SH15貯蔵穴b | 口縁11.6 | ナデ→ヨコナデ | 密 | 淡黄橙 | 口縁1/2 | |
| 34 | 2405 | 須恵器 高杯 | A地区 | k19 | SH15 p2 | 脚裾9.0 | 回転ナデ | 密 | 灰白 | 脚裾1/3 | 脚内面にヘラ記号 |
| 35 | 805 | 須恵器 高杯蓋 | A地区 | k19 | SH15 p5 | 摘径2.1 | 回転ケズリ→回転ナデ→摘部貼付ナデ | 密 | 灰緑 | 上部1/5 | |
| 36 | 4104 | 須恵器 杯蓋 | A地区 | k20 | SH15 p1 | 口縁10.4 | 回転ナデ→回転ケズリ | 密 | 暗灰 | 口縁1/2 | |
| 37 | 2406 | 須恵器 杯蓋 | A地区 | k19 | SH15貯蔵穴b | 口縁10.2 | 回転ナデ | 密 | 灰白 | 口縁1/6 | |
| 38 | 707 | 須恵器 杯蓋 | A地区 | k19 | SH15 p8 | 口縁11.5 | 回転ナデ | 密 | 灰 | 口縁1/6 | |
| 39 | 1002 | 須恵器 杯蓋 | A地区 | k20 | SH15 | 口縁10.8 | 回転ナデ→回転ケズリ | 密 | 灰 | 口縁2/5 | 上部にヘラ記号「ー」 |
| 40 | 1402 | 須恵器 杯身 | A地区 | k20 | SH15 | 口縁8.6 | 回転ナデ→回転ケズリ | 密 | 灰 | 口縁1/4 | |
| 41 | 4101 | 須恵器 杯身 | A地区 | k20 | SH15 p1 | 口縁10.1 | 回転ナデ→回転ケズリ | 密 | 淡青灰 | 口縁1/2 | |
| 42 | 4402 | 須恵器 杯身 | A地区 | k19 | SH15 p10 | 口縁9.4 | 回転ナデ→回転ケズリ | 密 | 灰 | 口縁2/3 | |

**tab. 3　出土土器観察表(1)**

| 番号 | 実測番号 | 器種等 | 大地区 | 小地区 | 遺構・層名等 | 法量(cm) | 調整・技法の特徴 | 胎土 | 色調 | 残存 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 43 | 2407 | 須恵器 杯身 | A地区 | k19 | SH15カマドb外 | 口縁9.2 | 回転ナデ→回転ケズリ | 密 | 灰白 | 口縁1/4 | |
| 44 | 2404 | 須恵器 杯身 | A地区 | k19 | SH15カマドb外 | 口縁9.1 | 回転ナデ→回転ケズリ | 密 | 灰 | 口縁1/2 | 底にヘラ記号、口縁部に重ね焼き痕 |
| 45 | 3302 | 土師器 小形甕 | A地区 | k19 | SH15カマドb | 口縁11.6 | ナデ→ハケメ→ケズリ・ヨコナデ | 密 | 褐灰 | 口縁1/3 | 外面にヘラ記号 |
| 46 | 4303 | 土師器 小形甕 | A地区 | k19 | SH15貯蔵穴b | 口縁12.8 | オサエ・ハケメ→ヨコナデ | 密 | 淡黄橙 | 口縁2/5 | |
| 47 | 2401 | 土師器 小形甕 | A地区 | k19 | SH15貯蔵穴b | 口縁14.0 | ハケメ・板ナデ・ナデ→ヨコナデ | 密 | 灰褐 | 口縁1/4 | |
| 48 | 3102 | 土師器 甕 | A地区 | k19 | SH15 p9 | 口縁15.2 | ハケメ→ヨコナデ | 密 | 淡黄橙 | 口縁1/3 | |
| 49 | 2402 | 土師器 甕 | A地区 | k19 | SH15貯蔵穴b | 口縁14.6 | オサエ・ハケメ→ヨコナデ | 密 | 淡黄橙 | 口縁2/3 | |
| 50 | 802 | 土師器 甕 | A地区 | k19 | SH15 p8 | 口縁14.7 | ハケメ→ヨコナデ | 密 | 淡黄橙 | 口縁1/3 | |
| 51 | 803 | 土師器 甕 | A地区 | k19 | SH15 p6 | 口縁15.5 | ハケメ→ヨコナデ | 密 | 暗橙 | 口縁1/10 | |
| 52 | 702 | 土師器 甕 | A地区 | k19 | SH15 | 口縁19.3 | ハケメ→ヨコナデ | 粗 | 灰白 | 口縁1/5 | |
| 53 | 902 | 土師器 長胴甕 | A地区 | k20 | SH15 p4 | 口縁20.8 | ハケメ→ヨコナデ | 密 | 淡黄橙 | 口縁1/8 | |
| 54 | 3501 | 土師器 長胴甕 | A地区 | k19 | SH15カマドb | 口縁21.0 | ナデ→ハケメ→ケズリ・ヨコナデ | 密 | 淡黄橙 | 口縁1/2 | 外面に煤 |
| 55 | 3401 | 土師器 長胴甕 | A地区 | k19 | SH15カマドb | 口縁18.4 | ナデ→ハケメ→ケズリ・ヨコナデ | 密 | 淡黄橙 | 口縁4/5 | 外面に煤 |
| 56 | 901 | 土師器 把手付鍋 | A地区 | k19 | SH15 p11 | 口縁36.8 | ハケメ→ヨコナデ | 密 | 淡黄橙 | 口縁1/8 | 把手は欠損 |
| 57 | 1101 | 土師器 把手付鍋 | A地区 | k19 | SH15 p5 | 口縁36.0 | ハケメ→ヨコナデ | 密 | 淡黄橙 | 口縁1/3 | 把手は体部に挿入付加 |
| 58 | 4204 | 須恵器 杯蓋 | A地区 | k18 | SX11 p2 | 口縁11.1 | 回転ナデ→回転ケズリ | 密 | 灰 | 完存 | 外面上端にヘラ記号 |
| 59 | 4203 | 須恵器 杯身 | A地区 | k18 | SX11 p1 | 口縁9.6 | 回転ナデ→回転ケズリ | 密 | 灰 | 完存 | |
| 61 | 1304 | 土師器 甕 | A地区 | j21 | SH16 | 口縁13.2 | ナデ・ヨコナデ | 粗 | 暗橙 | 口縁1/6 | |
| 62 | 1204 | 土師器 甕 | A地区 | j21 | SH16 | 口縁15.9 | ハケメ→ヨコナデ | 密 | 橙 | 口縁1/7 | |
| 63 | 1305 | 須恵器 杯蓋 | A地区 | k21 | SH16 | 口縁13.2 | 回転ナデ→回転ケズリ | 密 | 灰 | 口縁1/5 | |
| 65 | 4401 | 須恵器 杯蓋 | A地区 | f28 | SD5 | 口縁10.6 | 回転ナデ→ヘラ起こし | 密 | 青灰 | 口縁4/5 | |
| 66 | 3805 | 須恵器 杯蓋 | A地区 | f28 | SD5 | 口縁12.2 | 回転ナデ | 密 | 淡灰 | 口縁1/8 | |
| 67 | 1403 | 須恵器 杯身 | A地区 | k21 | SH20 | 口縁9.2 | 回転ナデ→ヘラ切り | 密 | 灰 | 口縁1/4 | |
| 68 | 705 | 須恵器 杯蓋 | A地区 | i20 | SH10 | 口縁12.2 | 回転ナデ | 密 | 灰白 | 口縁1/8 | |
| 69 | 703 | 須恵器 壺? | A地区 | i20 | SH10 pit1 | 口縁21.7 | 回転ナデ | 密 | 灰白 | 口縁1/6 | 内面に自然釉 |
| 70 | 804 | 土師器 甕 | A地区 | j19 | SH10 | 口縁20.2 | ハケメ→ヨコナデ | 密 | 淡黄橙 | 口縁1/10 | |
| 71 | 704 | 土師器 小形甕 | A地区 | i20 | SH10 | 口縁13.2 | 剝離 | 粗 | 淡黄橙 | 口縁1/4 | |
| 72 | 801 | 土師器 甕 | A地区 | i20 | SH10 | 口縁15.0 | ハケメ→ヨコナデ | 密 | 暗黄褐 | 口縁1/4 | |
| 73 | 3101 | 土師器 甕 | A地区 | i20 | SH10カマド | 口縁20.1 | ハケメ→ヨコナデ | 密 | 暗橙 | 口縁1/6 | |
| 74 | 4002 | 須恵器 杯蓋 | A地区 | m21 | SH17 | 口縁9.8 | 回転ナデ→回転ケズリ→摘部付加 | 密 | 灰白 | ほぼ完存 | |
| 75 | 4003 | 須恵器 杯身 | A地区 | m21 | SH17 | 口縁9.0 | 回転ナデ→回転ケズリ | 密 | 灰 | 口縁3/5 | |
| 76 | 1401 | 須恵器 杯身 | A地区 | m21 | SH17 | 口縁9.4 | 回転ナデ | 密 | 灰 | 口縁1/5 | |
| 77 | 4304 | 土師器 台付椀 | A地区 | m20 | SH17 | 口縁10.1 | オサエ・ナデ→ミガキ | 粗 | 橙 | ほぼ完存 | |
| 78 | 804 | 土師器 椀 | A地区 | m20 | SH17カマド | 口縁11.2 | オサエ・ナデ→ヨコナデ | 密 | 灰白 | 口縁1/3 | |
| 79 | 2306 | 土師器 椀 | A地区 | m•n20 | SH17 | 口縁12.7 | オサエ・ナデ→ヨコナデ | 密 | 暗橙 | 口縁1/4 | 外面にヘラ記号? |
| 80 | 1205 | 土師器 長胴甕 | A地区 | m20 | SH17 | 口縁21.8 | ハケメ→ヨコナデ | 粗 | 橙 | 口縁1/8 | |
| 81 | 105 | 須恵器 杯蓋 | A地区 | o20 | SK21 | 口縁11.1 | 回転ナデ→回転ケズリ | 密 | 灰 | 口縁1/3 | |
| 82 | 203 | 須恵器 甕 | A地区 | o20 | SK21 | 口縁ー | 回転ナデ、外面にカキメ | 密 | 灰白 | 口縁部片 | |
| 83 | 101 | 土師器 甕 | A地区 | o20 | SK19 | 口縁15.4 | ハケメ→ヨコナデ | 密 | 暗黄橙 | 口縁1/4 | |
| 84 | 201 | 須恵器 杯蓋 | A地区 | o21 | pit1 | 口縁12.0 | 回転ナデ | 密 | 黄灰 | 口縁1/5 | |

tab. 4　出土土器観察表(2)

| 番号 | 実測番号 | 器種等 | 大地区 | 小地区 | 遺構・層名等 | 法量(cm) | 調整・技法の特徴 | 胎土 | 色調 | 残存 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 85 | 4404 | 土師器 椀 | A地区 | o20 | pit2 | 口縁10.6 | オサエ→ヨコナデ | 粗 | 褐 | 口縁2/3 | |
| 86 | 4405 | 土師器 椀 | A地区 | o20 | pit1 | 口縁14.5 | オサエ・板ナデ→ヨコナデ | 粗 | 褐 | 口縁1/3 | |
| 87 | 202 | 須恵器 壺 | A地区 | t22 | pit2 | 口縁14.0 | 回転ナデ | 密 | 灰白 | 口縁1/7 | |
| 88 | 4301 | 土師器 杯 | A地区 | c7 | SZ33 | 口縁17.4 | ヨコナデ→ケズリ→ミガキ・暗文 | 密 | 橙 | 口縁1/3 | 内面の暗文は4単位 |
| 89 | 4302 | 須恵器 杯身 | A地区 | c7 | SZ33 | 口縁16.1 | 回転ナデ→回転ケズリ→高台貼付ナデ | 密 | 青灰 | ほぼ完存 | |
| 90 | 2205 | 須恵器 壺 | A地区 | c8 | SZ32中央 | 口縁13.9 | タタキ→回転ナデ | 密 | 灰白 | 口縁1/4 | |
| 91 | 302 | 土師器 甕 | A地区 | c8 | 検出中 | 口縁15.0 | ハケメ・ナデ→ヨコナデ | 密 | 暗橙 | 口縁1/5 | |
| 92 | 301 | 土師器 甕 | A地区 | d8 | 検出中 | 口縁21.0 | ハケメ・ナデ→ヨコナデ | 密 | 灰褐 | 口縁1/4 | |
| 93 | 2304 | 土師器 杯 | A地区 | b7 | SH31 | 口縁13.2 | ナデ・ケズリ→ヨコナデ | 密 | 橙 | 口縁2/5 | |
| 94 | 3901 | 土師器 杯 | A地区 | c7 | SH31 | 口縁13.4 | ナデ→ヨコナデ | 密 | 橙褐 | 口縁一部欠損 | 外面底に墨書「興字」か？ |
| 95 | 2301 | 須恵器 杯身 | A地区 | c7 | SH31カマド | 高台10.1 | 回転ナデ→高台貼付ヨコナデ | 密 | 淡黄橙 | 底2/5 | |
| 96 | 701 | 須恵器 杯身 | A地区 | c7 | SH31 | 高台11.8 | 回転ナデ→ヘラ切り→貼付高台 | 密 | 灰褐 | 高台1/2 | |
| 97 | 706 | 土師器 皿 | A地区 | c7 | SH31 | 口縁— | ナデ | 密 | 橙 | 口縁部片 | |
| 98 | 3106 | 土師器 皿 | A地区 | c7 | SH31カマド | 口縁17.4 | ヨコナデ→ヘラミガキ・暗文 | 密 | 橙 | 口縁1/8 | |
| 99 | 2305 | 土師器 甕 | A地区 | c7 | SH31カマド袖 | 口縁16.3 | ハケメ→ヨコナデ | 密 | 淡黄橙 | 口縁1/3 | |
| 100 | 2302 | 土師器 甕 | A地区 | c7 | SH31カマド | 口縁16.5 | ハケメ・板ナデ→ヨコナデ | 密 | 淡黄橙 | 口縁1/5 | |
| 101 | 3004 | 土師器 甕 | A地区 | c8 | SH31 | 口縁21.0 | ハケメ→ヨコナデ | 密 | 淡黄橙 | 口縁1/8 | |
| 102 | 2704 | 土師器 椀 | A地区 | r21 | SH23 | 口縁10.4 | オサエ・ナデ→ヨコナデ | 密 | 淡黄 | 口縁1/3 | 底部に木葉圧痕 |
| 103 | 2703 | 土師器 椀 | A地区 | q21 | SH23 | 口縁12.4 | オサエ・ナデ→ヨコナデ | 密 | 淡黄橙 | 口縁1/6 | |
| 104 | 1201 | 土師器 椀 | A地区 | r21 | SH23 | 口縁12.6 | オサエ・ナデ→ヨコナデ | 粗 | 淡黄橙 | 口縁1/4 | |
| 105 | 2603 | 土師器 杯 | A地区 | r21 | SH23 | 口縁15.4 | ナデ→ヨコナデ→暗文 | 密 | 橙 | 口縁1/4 | |
| 106 | 1202 | 土師器 杯 | A地区 | r21 | SH23 | 口縁16.2 | オサエ・ナデ→ヨコナデ | 密 | 橙 | 口縁1/8 | |
| 107 | 1203 | 須恵器 杯身 | A地区 | r21 | SH23 | 口縁10.5 | 回転ナデ→回転ケズリ | 密 | オリーブ灰 | 口縁1/4 | |
| 108 | 1206 | 須恵器 杯蓋 | A地区 | r21 | SH23 | 口縁21.4 | 回転ナデ | 密 | 灰白 | 口縁1/5 | |
| 109 | 2503 | 土師器 甕 | A地区 | r21 | SH23 | 口縁15.4 | ハケメ→ヨコナデ | 粗 | 暗橙 | 口縁1/2 | |
| 110 | 2502 | 土師器 甕 | A地区 | q21 | SH23カマド | 口縁15.6 | ハケメ→ヨコナデ | 粗 | 暗橙 | 口縁2/3 | |
| 111 | 1302 | 土師器 甕 | A地区 | r21 | SH23 | 口縁17.6 | ハケメ→ヨコナデ | 粗 | 淡黄橙 | 口縁1/6 | |
| 112 | 2501 | 土師器 甕 | A地区 | q21 | SH23上面 | 口縁22.0 | ハケメ→ケズリ・ヨコナデ | 粗 | 暗褐 | 口縁1/8 | |
| 113 | 1405 | 土師器 甑 | A地区 | r21 | SH23 | 口縁24.0 | ハケメ→ヨコナデ | 粗 | 淡橙 | 口縁部片 | 口径は不確定 |
| 115 | 4201 | 須恵器 杯蓋 | A地区 | e26 | SK3（SB12） | 口縁12.6 | 回転ナデ | 密 | 灰 | 口縁1/8 | |
| 116 | 102 | 土師器 甕 | A地区 | e26 | SK2（SB12） | 口縁22.1 | ハケメ→ヨコナデ | 密 | 淡黄橙 | 口縁1/10 | |
| 117 | 1303 | 須恵器 杯蓋 | A地区 | s20 | SH29 | 口縁19.4 | 回転ナデ→回転ケズリ | 密 | 灰白 | 口縁1/6 | |
| 118 | 4403 | 土師器 椀 | A地区 | u22 | SH28 | 口縁13.6 | オサエ→ヨコナデ | 粗 | 橙 | 口縁1/3 | |
| 119 | 2604 | 土師器 皿 | A地区 | u22 | SH28 | 口縁23.8 | オサエ・ナデ→ヨコナデ | 密 | 暗橙 | 口縁1/6 | |
| 120 | 2701 | 土師器 皿 | A地区 | t21 | SK26 | 口縁16.4 | オサエ・ナデ→ヨコナデ | 粗 | 淡黄橙 | 口縁1/4 | |
| 121 | 3301 | 土師器 皿 | A地区 | e28 | SH4 p1 | 口縁22.2 | ナデ→ケズリ→ヨコナデ | 密 | 橙 | 口縁2/3 | 内面剝離顕著 |
| 122 | 4001 | 須恵器 平瓶 | A地区 | o20 | SK18 | 体19.4 | 回転ナデ→回転ケズリ→穿孔のち口縁付加 | 密 | 灰白 | 体部9/10 | 口縁部は意図的に打ち欠いている |
| 123 | 406 | 須恵器 杯蓋 | A地区 | m20 | 暗褐土 | | 回転ナデ | 密 | 灰 | 上部1/2 | 上部にヘラ記号 |
| 124 | 4102 | 須恵器 杯蓋 | A地区 | e27 | 検出中 | 口縁10.2 | 回転ナデ→回転ケズリ | 密 | 淡青灰 | 口縁1/2 | 上端のケズリは粗い |
| 125 | 4601 | 須恵器 杯蓋 | A地区 | | 旧耕土 | 口縁11.1 | 回転ナデ | 密 | 青灰 | 口縁1/6 | |

tab. 5　出土土器観察表(3)

| 番号 | 実測番号 | 器種等 | 大地区 | 小地区 | 遺構・層名等 | 法量(cm) | 調整・技法の特徴 | 胎土 | 色調 | 残存 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 126 | 4103 | 須恵器　杯蓋 | A地区 | f 28 | 検出中 | 口縁10.6 | 回転ナデ→回転ケズリ | 密 | 青灰 | 口縁1/5 | 上端のケズリは粗い |
| 127 | 307 | 須恵器　杯蓋 | A地区 | o 21 | 検出中 | 口縁11.1 | 回転ナデ→回転ケズリ | 密 | 灰 | 口縁1/5 | |
| 128 | 2201 | 須恵器　蓋 | A地区 | e 26 | 検出中 | 摘径1.1 | 回転ナデ→摘部ナデ | 密 | 灰 | 口縁1/3 | |
| 129 | 4202 | 須恵器　杯身 | A地区 | f 27 | 検出中 | 口縁9.2 | 回転ナデ | 密 | 灰 | 口縁1/5 | |
| 130 | 603 | 須恵器　杯身 | A地区 | 南部 | 重機掘削 | 口縁10.5 | 回転ナデ | 密 | 灰 | 口縁1/5 | |
| 131 | 405 | 須恵器　杯身 | A地区 | l 21 | 灰褐～暗褐土 | 底4.6 | 回転ナデ→回転ケズリ | 密 | 灰 | 底3/4 | 底部にヘラ記号 |
| 132 | 404 | 須恵器　大甕 | A地区 | e 27 | 検出中 | 口縁－ | 外面に沈線文と波状文 | 密 | 灰 | 口縁部片 | |
| 133 | 4406 | 土師器　椀 | A地区 | f 28 | 検出中 | 口縁10.8 | ヨコナデ | 密 | 白灰 | 口縁1/3 | 剝離顕著 |
| 134 | 504 | 土師器　杯 | A地区 | f 3 | 検出中 | 口縁15.1 | ナデ→ヨコナデ | 密 | 褐灰 | 口縁1/6 | |
| 135 | 503 | 土師器　杯 | A地区 | q 20 | 検出中 | 口縁14.7 | ナデ→ミガキ・暗文（内面） | 密 | 橙 | 口縁1/6 | |
| 136 | 502 | 土師器　杯 | A地区 | d 6 | 検出中 | 口縁16.6 | オサエ・ナデ→ヨコナデ | 密 | 淡黄橙 | 口縁1/10 | |
| 137 | 3104 | 土師器　椀 | A地区 | b 32 | 検出中 | 口縁16.0 | ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ | 密 | 淡黄橙 | 口縁1/6 | |
| 138 | 4605 | 土師器　甑 | A地区 | | 旧耕土 | 口縁22.0？ | ハケメ→ヨコナデ | 密 | 淡橙褐 | 口縁1/10 | 口径不確定 |
| 139 | 2601 | 須恵器　杯身 | A地区 | r 20 | 検出中 | 口縁14.2 | 回転ナデ→高台貼付ナデ | 密 | 灰 | 口縁1/4 | |
| 140 | 104 | 須恵器　薬壺？ | A地区 | c 12 | ＳＺ30 | 高台15.2 | 回転ナデ→ケズリ→ヨコナデ | 密 | 灰白 | 高台1/6 | |
| 141 | 507 | 黒色土器　椀 | A地区 | d 6 | 検出中 | 口縁－ | ナデ・ミガキ | 密 | 灰白・黒 | 口縁部片 | A類 |
| 142 | 501 | 黒色土器　椀 | A地区 | e 5 | 検出中 | 口縁15.8 | ナデ、ミガキは剝離 | 密 | 淡黄橙・黒 | 口縁1/10 | A類 |
| 143 | 403 | 黒色土器　椀 | A地区 | d 6 | 検出中 | 高台8.2 | 内面にヘラミガキ・黒化 | 密 | 暗褐・黒 | 高台1/2 | A類 |
| 144 | 506 | 製塩土器 | A地区 | e 5 | 検出中 | 口縁－ | オサエ・ナデ | 粗 | 橙 | 口縁部片 | 「志摩式」 |
| 145 | 402 | 青磁　椀 | A地区 | f 4 | 検出中 | 高台6.2 | | 密 | 釉；オリーブ灰 | 高台1/4 | |
| 146 | 205 | 土師器　皿 | A地区 | c 13 | ＳＺ30堀形 | 口縁－ | ナデ | 密 | 灰白 | 口縁部片 | |
| 147 | 2303 | ロクロ土師器　小皿 | A地区 | c 12 | 旧耕土 | 底4.2 | ロクロナデ→糸切り | 密 | 淡黄橙 | 底1/3 | |
| 148 | 2202 | 陶器　椀 | A地区 | c 12 | 旧耕土 | 高台7.9 | ロクロナデ→糸切り→高台にナデ | 密 | 灰白 | 高台1/4 | 山茶椀（渥美） |
| 149 | 2203 | 陶器　椀 | A地区 | e 23 | 検出中 | 底6.1 | ロクロナデ→糸切り | 密 | 灰白 | 底完存 | 山茶椀（瀬戸） |
| 150 | 103 | 陶器　椀 | A地区 | c 13 | ＳＺ30堀形 | 口縁13.6 | ロクロナデ→糸切り | 密 | 灰白 | 口縁1/4 | 山茶椀（瀬戸） |
| 151 | 3103 | 陶器　壺 | A地区 | c 32 | 検出中 | 口縁14.4 | ヨコナデ | 密 | 灰白 | 口縁1/8 | |
| 152 | 2204 | 陶器　甕 | A地区 | c 12 | 旧耕土 | 口縁23.4 | オサエ→ヨコナデ | 密 | 灰白 | 口縁1/3 | 常滑 |
| 153 | 401 | 陶器　鉢 | A地区 | k 20 | 表土 | 口縁20.0 | 外面口縁部に施文 | 密 | 釉；オリーブ灰 | 口縁1/3 | |
| 196 | 3105 | 須恵器　杯身 | B地区 | j 10 | 検出中 | 口縁11.4 | 回転ナデ | 密 | 灰白 | 口縁1/6 | 焼成不良 |
| 197 | 2801 | 土師器　杯 | B地区 | h 10 | 黄色砂層Ｔ．Ｐ | 口縁13.8 | オサエ・ナデ→ヨコナデ | 密 | 橙 | 口縁1/3 | |
| 198 | 2804 | 製塩土器 | B地区 | j 9 | ＳＫ62（混入） | 口縁－ | オサエ・ナデ | 粗 | 橙 | 小片 | 「志摩式」 |
| 199 | 604 | 須恵器　壺 | B地区 | a 11 | 検出中 | 口縁－ | 回転ナデ | 密 | 灰白 | 口縁部片 | |
| 200 | 2806 | 弥生土器？　甕 | B地区 | h 10 | ＳＫ60（混入） | 口縁23.0 | ハケメ→ヨコナデ、口縁部凹線状 | 粗 | 暗赤灰 | 口縁1/2 | |
| 201 | 2902 | 須恵器　壺or甕 | B地区 | h 10 | 検出中 | 体部－ | タタキメ | 密 | 淡器 | 体部片 | |
| 202 | 607 | 青磁　椀 | B地区 | a 11 | 検出中 | 口縁14.0前 | 外面に鎬蓮弁文 | 密 | 釉；灰白 | 口縁部片 | |
| 203 | 2805 | 青磁　椀 | B地区 | i 15 | ＳＺ49 | 高台7.2 | ケズリ、施釉 | 密 | 釉；明緑灰 | 高台1/4 | |
| 204 | 3006 | 青磁　椀 | B地区 | a 8 | 灰色土 | 高台4.2 | ケズリ、施釉 | 密 | 釉；明緑灰 | 高台完存 | |
| 205 | 3005 | 土師器　小皿 | B地区 | a 3 | 炭層（ＳＺ42） | 口縁8.0 | オサエ→ヨコナデ | 密 | 暗橙 | 口縁1/4 | |
| 206 | 3203 | 陶器　甕 | B地区 | a 8 | 灰色土 | 口縁－ | ヨコナデ | 密 | 暗赤褐・暗橙 | 口縁部片 | 常滑 |
| 207 | 2901 | 土師器　鍋 | B地区 | i 10 | ＳＫ61 | 口縁27.8 | ヨコナデ | 密 | 淡黄灰 | 口縁1/10 | 外面に煤 |

tab. 6　出土土器観察表(4)

| 番号 | 実測番号 | 器種等 | 大地区 | 小地区 | 遺構・層名等 | 法量(cm) | 調整・技法の特徴 | 胎土 | 色調 | 残存 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 208 | 605 | 土師器 鍋 | B地区 | a 8 | 検出中 | 口縁ー | ヨコナデ | 密 | 灰白 | 口縁部片 | 外面に煤 |
| 209 | 2802 | 土師器 羽釜 | B地区 | a 3 | 灰色土 | 口縁ー | ナデ→ヨコナデ | 密 | 暗橙 | 口縁部片 | 中北勢系 |
| 210 | 606 | 土師器 羽釜 | B地区 | a 3 | 検出中 | 口縁ー | ナデ・ハケメ→ヨコナデ | 密 | 淡黄橙 | 口縁部片 | 中北勢系 |
| 211 | 2803 | 土師器 羽釜 | B地区 | a 2 | 炭層（SZ42） | 口縁ー | ナデ→ヨコナデ | 密 | 暗黄橙 | 口縁部片 | 中北勢系 |
| 212 | 3003 | 土師器 羽釜 | B地区 | a 3 | 炭層上灰色砂 | 口縁23.6 | ハケメ→ヨコナデ | 密 | 淡黄橙 | 口縁1/8 | 中北勢系 外面に煤 |
| 213 | 4501 | 土師器 鍋 | B地区 | | 試堀杭12 | 口縁23.8 | ハケメ→ヨコナデ | 密 | 淡黄橙 | 口縁1/10 | 外面に煤 |
| 214 | 4502 | 土師器 鍋 | B地区 | | 試堀杭12 | 口縁26.8 | ハケメ→ヨコナデ | 密 | 淡黄橙 | 口縁1/10 | 外面に煤 |
| 215 | 4503 | 土師器 鍋 | B地区 | | 試堀杭12 | 口縁25.1 | ハケメ→ヨコナデ・ケズリ | 密 | 橙灰 | 口縁1/4 | 外面に煤 |
| 216 | 602 | 土師器 鍋 | B地区 | a 9 | 検出中 | 口縁25.0 | ナデ・ハケメ→ヨコナデ | 密 | 灰黄褐 | 口縁1/8 | 外面に煤、第4段階並行小形 |
| 217 | 3002 | 土師器 鍋 | B地区 | a 3 | 炭層（SZ42） | 口縁33.0 | ハケメ→ヨコナデ | 密 | 淡黄橙 | 口縁1/8 | 外面に煤 |
| 218 | 2807 | 土師器 鍋 | B地区 | a 3 | SK44 | 高台37.4 | ナデ・ハケメ・板ナデ→ヨコナデ・ケズリ | 密 | 暗黄橙 | 口縁1/3 | 外面に煤 |

tab. 7　出土土器観察表(5)

| 番号 | 実測番号 | 名称 | 材質 | 地区 | グリット | 遺溝・層名など | 特徴 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 9 | 2106 | 石鏃 | サヌカイト | A | c37 | SD39 | | |
| 32 | 3202 | 叩石 | 花崗岩 | A | k20 | SH15 s1 | 円礫平坦部に敲打痕 | |
| 64 | 1306 | 砥石 | 泥岩 | A | j21 | SH16 | 4面の磨面 | |
| 114 | 2602 | 砥石 | 砂岩 | A | r21 | SH23 | 平坦部に磨痕 | |
| 219 | 3201 | 砥石 | 砂岩 | B | i11 | 検出中 | 平坦部に磨痕 | 被熱？ |

tab. 8　出土石製品観察表

| 番号 | 実測番号 | 地区 | グリット | 層位・遺溝 | 種類・材質 | 名称 | 法量（cm）など |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 31 | 3802 | A | l 20 | SH15 i1 | 鉄 | 鎌 | 幅3.0 木質残る |
| 60 | 3803 | A | k 18 | SX11 i1 | 鉄 | 鎌 | 長頚鏃 小形の柳葉状 |
| 220 | 3205 | B | a 4 | 砂礫層 | 鉄 | 火打ち鎌 | 厚さ0.3 |
| 221 | 3204 | B | a 4 | 砂礫層 | 鉄 | 火打ち鎌 | 幅0.2 |
| 222 | 3206 | A | c 3 | 表土 | 銭貨 | 元祐通寶 | |
| 223 | 3207 | B | a 12 | SD40 | 銭貨 | 嘉祐通寶 | |

tab. 9　出土金属製品観察表

| 番号 | 実測番号 | 大地区 | グリット | 層位・遺構 | 長さ（cm） | 直径（cm） | 重さ（g） | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 154 | 1704 | A | s 20 | SH29 | 3.5 | 1.1 | 3.7 | |
| 155 | 1701 | B | a 10 | pit 1 | 4.6 | 1.3 | 5.8 | 中世 |
| 156 | 1802 | A | d 7 | SZ33 | | 1.6 | | 欠損 |
| 157 | 1609 | A | c 7 | SH31 | | 1.4 | | 両端欠損 |
| 158 | 1707 | A | b•c34 | 床土 | 4.5 | 1.5 | 10.5 | |
| 159 | 1805 | A | | SZ34 | 5.2 | 1.6 | 14.7 | |
| 160 | 1502 | A | b 12 | 検出中 | 4.7 | 1.5 | 10.2 | |
| 161 | 1501 | A | e 3 | 検出中 | 4.5 | 1.3 | 7.5 | |
| 162 | 1808 | A | c 7 | SZ33 | 4.5 | 1.4 | 9.4 | |
| 163 | 1803 | A | c 8 | SZ32 | 5.0 | 1.5 | 8.4 | |
| 164 | 1602 | A | o 21 | 検出中 | 4.8 | 1.7 | 11.8 | |
| 165 | 1601 | A | o 21 | 検出中 | 4.5 | 1.9 | 15.0 | |
| 166 | 1504 | A | o 21 | 検出中 | 5.3 | 1.6 | 12.1 | |
| 167 | 1605 | A | b 12 | 検出中 | 5.5 | 1.7 | 14.5 | |
| 168 | 1705 | A | c 8 | SZ32 | | 1.7 | | 欠損 |
| 169 | 1708 | A | r 21 | SH23 | 4.9 | 1.8 | 13.5 | |
| 170 | 1612 | A | p 20 | 検出中 | 5.2 | 2.2 | 19.4 | |
| 171 | 1703 | A | r 21 | SH23 | | 1.6 | | 欠損 |
| 172 | 1809 | A | s 21 | pit 2 | 5.2 | 1.6 | 10.3 | |
| 173 | 1801 | A | r 21 | SH23 | 5.4 | 1.9 | 15.6 | |
| 174 | 1607 | A | q 21 | 検出中 | 5.4 | 2.2 | 24.3 | |
| 175 | 1611 | A | p 20 | 検出中 | 5.3 | 1.8 | 12.3 | |
| 176 | 1710 | A | e 27 | pit 3 | 5.5 | 1.9 | 16.0 | |
| 177 | 1512 | A | r 21 | SH23 | 5.5 | 1.7 | 12.8 | |
| 178 | 1610 | A | c 12 | 旧耕土 | 5.1 | 1.8 | 16.4 | |
| 179 | 1505 | A | d 5 | 検出中 | 5.7 | 1.8 | 15.2 | |
| 180 | 1510 | A | s 20 | SH29 | 5.8 | 2.0 | 19.3 | |
| 181 | 1509 | A | d 5 | 検出中 | 5.4 | 2.0 | 17.0 | |
| 182 | 1606 | A | n 20 | 検出中 | 5.4 | 1.7 | 11.9 | |
| 183 | 1507 | A | q 21 | pit 1 | 5.6 | 1.9 | 15.3 | |
| 184 | 1511 | A | r 21 | 検出中 | 6.0 | 1.6 | 15.4 | |
| 185 | 1706 | A | d 7 | SZ33 | 6.1 | 1.6 | 14.4 | |
| 186 | 1603 | A | r 21 | SH23上 | 6.0 | 1.6 | 15.7 | |
| 187 | 1604 | A | r 21 | SH23上 | 6.1 | 1.6 | 13.5 | |
| 188 | 1804 | A | c 7 | SZ33 | 6.1 | 2.0 | 22.1 | |
| 189 | 1702 | A | i 19 | 暗褐土 | 6.0 | 1.6 | 15.9 | |
| 190 | 1506 | A | p 20 | pit 4 | 6.6 | 1.9 | 18.6 | |
| 191 | 1807 | A | r 21 | pit 1 | 6.7 | 1.6 | 17.1 | |
| 192 | 1608 | A | r 21 | SH23上 | | 2.0 | | 欠損 |
| 193 | 1503 | A | r 21 | 検出中 | 6.2 | 1.8 | 19.1 | |
| 194 | 1806 | A | c 8 | SZ33 | 6.6 | 1.8 | 18.3 | |
| 195 | 1508 | A | r 21 | SH23 | 6.0 | 2.5 | 31.4 | |

**tab. 10　出土土錘観察表**

# V　調査のまとめと課題

今回の下之川富田遺跡の発掘調査によって、いくつかの新しい情報を手に入れることができた。それは、大きくは遺構・遺物に関する問題と、雲出川上流部あるいは伊勢の地域史的な問題の２つに大別できる。ここでは、調査の結果明らかになったいくつかの項目についてまとめ、結語に代えたいと思う。

## 1　弥生時代前期の土器群について

弥生時代前期における成果として、小流路ＳＤ39から出土した２系統の土器を挙げることができる。第Ⅳ章でも触れたように、ここからは、縄文時代晩期土器の系譜上にある一群（Ａ群）と、いわゆる遠賀川式土器（Ｂ群）との共伴が確認されたことを第一に挙げることができる。両者の土器が時期的に並行関係を有しているらしいことはこれまでにも注意されてきた問題である[1]が、遺構内での共伴関係が明確に把握されたのは、伊勢地域では極めて珍しいことといえる。

ＳＤ39出土のＢ群については、形態と、壷に見られる外面の施文がヘラ描沈線文であることから、前期中段階[2]、あるいは前期前半[3]とされる時期のものと考えてよかろう。とくに21の壷は、素地粘土が精良で伴出した土器類との違いは明瞭であるため、搬入品ではないかと考えられるものである。

これと共伴するＡ群は、二枚貝を用いた施文である。fig.23の11・12は同一個体と考えられるもので、ともに口縁部外面に条痕と同様の二枚貝によって押し引きによる刻目が施されている。この底部には、突出した平底（fig.23－18・19）が相当するものと思われる。

Ａ群のなかで注意すべき特徴として、口縁部が外反することと、体部がやや膨らむこと（砲弾状ではないこと）が挙げられる。条痕文が見られることや、口縁端部外面に「Ｄ」字形の刻目文があることなどは、明らかに縄文時代晩期の突帯文土器との類似を考えることができるのであるが、形態的には縄文晩期の一群に含めることはできない。つまり、縄文時代晩期の突帯文土器の系統を残しながら、弥生時代前期に何らかの影響下で現れた土器、という理解が妥当かと思われる。

弥生時代の条痕文土器については、東海地方では「樫王式」「水神平式」などの条痕文系土器として、何度かにわたる検討がなされている[4]。ここでいうＡ群土器についても、尾張・三河などの東海東部地方に見られる動向とある程度共通性があるものと考えられる。しかし、口縁部の外反、あるいは口縁端部の刻目という点から、東海東部地方の動向と完全な同一視はできない。

さて、弥生中期前葉に至ると、遠賀川式土器系統と直結させることのやや困難な「紀伊形」「大和形」などの甕が各地域単位で出現するようになっている。この点については、近畿地方には厚い研究史が蓄積されている。ここではこれらについて逐次検討する余裕はないが、近年の研究成果のうち、とくに重要と思われる若林邦彦氏と松本洋明氏の指摘に導かれながら検討してみよう。

若林氏は、氏のいう甕Ｂ（大和形甕）、同甕Ｃ（和泉・河内形甕）については遠賀川系甕と東海東部地方の水神平甕との製作技法の融合の結果生じたものとし、同甕Ｄ（紀伊形甕）については縄文晩期突帯文土器からの純粋な伝統上にあるとした[5]。松本氏は、若林氏の所見に一定の評価をしつつも、大和形甕の発生には若林氏以上に遠賀川系甕との断絶を重視し、「条痕文系甕から直接的な系譜関係を背景に、大和型甕が成立した」と考えている[6]。つまり両者ともに、遠賀川系甕と大和形甕とは一定の異なりを評価し、条痕文系土器との関連を評価している点では一致している。ただし、そこに遠賀川系甕との断絶をより強く見るかどうかの違いであると考えられるのである。松本氏は、大和形甕の成立が弥生時代前期に遡るものと評価し、「初期大和型甕」と呼称していることからも、弥生前期において遠賀川系甕と併存する一群の存在に注目している。

さて、ここでひとつ重視しておく必要のある事柄がある。縄文晩期の突帯文土器以降、条痕文を外面に施す、といった手法は、確かに東海地方の特徴と

いえるものである。しかし、東海といってもそこにはなにがしかの地域差を有しているものである。それは、鈴木克彦氏の論考に指摘[7]のあるごとく、2条突帯かどうかといった要素などに、東海地方として一括りにはできない伊勢の状況が存在していると考えるべきであろう。

したがって、弥生中期前葉の大和形甕の系譜に条痕文系土器の影響を考慮する場合には、縄文晩期突帯文土器の段階における伊勢の状況を確認するといった視点が必要であることを、ここで指摘しておきたい。

では、この視点から下之川富田遺跡A群の甕を見よう。外面は条痕文および口縁端部に二枚貝の刻目を持つという点では縄文晩期突帯文との関連を考慮する必要があるが、内面は口縁部から頸部にかけてのみ条痕が施されるといった要素は、明らかに縄文晩期深鉢の形態を脱している、と評価できるように思われる。そして、この土器が弥生時代前期前半に位置づけられる、という点に注意すれば、縄文晩期において生成された突帯上の刻目という手法そのものが、遠賀川系甕の口縁端部の刻目へと影響を与えていることも考慮するべきであろう。

以上のことから下之川富田遺跡A群の甕については、伊勢における縄文晩期の条痕文が施される突帯文系土器の系譜上にある土器であり、口縁部が外反し、刻目が口縁端部であるという要素には遠賀川式土器との共通性ないしはその影響が考慮される一群である、と考えておきたい。さらに、先述の若林氏・松本氏の業績を考慮すれば、大和形甕の発生にかかる問題をも内包した土器であると考えられるのである。

このように、下之川富田A群の土器は、弥生時代前期のとくに後半期における近畿地方と東海地方とのつながりを考察するうえで、極めて重要な土器群であることが理解できよう。

### 2　弥生時代前期の文化伝播に関して

弥生前期における遠賀川式土器の伝播は、稲作文化の東進と絡めて理解されてきた。それに対する異同もあるが、両者が密接に関わるものとして評価することは妥当であろう。

さて、下之川富田遺跡の遠賀川式土器は、第Ⅳ章で触れたように、弥生前期前半、あるいは前期中段階のものである。これは、これまで伊勢地域で確認されている当該時期の土器のなかでは、中ノ庄遺跡（一志郡三雲町中ノ庄）[8]・納所遺跡（津市納所町）[9]に次いで古いものである。当遺跡が、伊勢における弥生時代前期の古い時期の遺跡として重要であることは言うまでもないが、さらに重要な点は、この遺跡がかなりの山間部に位置し、そこから当該土器が確認された、ということなのである。

遠賀川式土器が伊勢へ伝播した以後の動向については、中ノ庄遺跡を起点とし、そこから北進する動きと、南進・東進する動きとが考えられている。真田幸成氏は、弥生時代の文化ルートとして雲出川流域を重視している。真田氏は「唐古→宇陀→田口→菅野→神末→磐坂→石名原→飼坂→雲出川又は中村川を沿って下る」[10]というルートを想定された。真田氏のいう「飼坂」とは下之川の上流多気の西にあたる峠であり、まさに真田氏の想定されたルート上に下之川富田遺跡は位置している。また、村山邦彦氏の整理により、伊勢への伝播としては大きく5ルートが存在することが指摘されている[11]。

下之川富田遺跡における遠賀川式土器の出土は、陸路としては真田氏が指摘されたルート、あるいは村山氏の第Ⅲルートの可能性を示唆するものである。また、海路として、村山氏の第Ⅴルートの可能性もあり得る。当遺跡からは単体としての出土であり、周辺遺跡群の動向と絡めなければ解決しない問題ではあるが、真田・村山両氏の推察が適切であることを物語る資料として評価できよう。

さらに、下之川富田遺跡の成果によって、これまで等閑視されがちであった山間部の弥生文化について、今後一層意識的な調査が必要であることを改めて認識させられるのである。

### 3　古墳時代前期の土器について

古墳時代前期における遺構は確認できなかったものの、わずかではあるが土器が確認された。これまで雲出川上流部における当該時期の遺跡は明確には知られていなかったが、今回の調査により確実に存在していることが判明したといえる。

雲出川上流部の古墳時代前期を考えるうえで、と

くに注目する必要のあるのが、水系こそ名張川にあたるが位置的には近い太郎生地区（美杉村太郎生）出土の２面の三角縁神獣鏡である[62]。前期古墳の存在が考えられない太郎生地区におけるこの種の遺物の存在は、何らかの政治性を帯びているものと想定されるとともに、当時の交通路を知るうえでの資料ともなる。

下之川富田遺跡における古墳時代前期遺物の確認は、このような古墳時代前期に“道”を探すうえで、いくばくかの情報を提供しているものと考えられる。

### 4　飛鳥・奈良時代の遺構・遺物について

今回の調査で最も遺構・遺物の確認量が多かったのがこの時期のものである。竪穴住居は、確実なもので13棟、それに土坑ＳＺ32・33が竪穴住居が重複したものと考えれば、合計15棟ほどになる。下之川富田遺跡の全体面積が約32,000㎡、発掘調査したのが2,600㎡なので、単純計算すれば、当遺跡にはこの時期の竪穴住居が200棟近く存在していることになる。

#### a　竪穴住居について

確認された竪穴住居は全て方形で、なかでも正方形を意識して造成されたと考えられるものが多い。多くは北壁ないしは西壁中央にカマドを有している。

カマドについては、小谷赤坂遺跡（一志郡嬉野町天花寺）の調査報告において、同一建物内における造り替えの可能性を指摘した[63]が、今回確認された竪穴住居ＳＨ15およびＳＨ23によって、それが明確に確認できた。とくにＳＨ15では、西カマドから北カマドへの付け替えという現象が見られ、まさに当時の“改築・改装”を確認することができた。今後、他の遺跡でもカマドの造作についてはより意識的に確認していく必要がろう。

また、今回の調査区では、遺物包含層こそ希薄であったものの、遺構の残存が良好であったため、ＳＨ15・16・23において煙道を確認することができた。この煙道は、ＳＨ15a・23が床面から約30㎝の位置に見られるのに対し、ＳＨ15b・16では床面から約15㎝とかなり低い位置にある。この差については明確にはできないが、前者が西カマド、後者が北カマドであることが、何らかの要因になっている可能性もあるかと思われる。

この他に注意すべきものとして、ＳＨ10・15で確認された壁際の石と、ＳＨ17の床面の石がある。前者は、壁際に沿うようにして存在していたもので、入口などの施設に伴うものである可能性があろう。後者は壁際から離れた床面に存在することから、何らかの台石であることも考えられる。

#### b　出土遺物について～土壙墓との関係も含めて～

当該時期の出土遺物には、須恵器・土師器のほか、鉄鏃・鉄鎌・磨石などがある。

**須恵器**

須恵器は、田辺昭三氏による陶邑編年（以下、田辺編年）[64]のＴＫ217型式に並行する時期以降のものが見られる。当遺跡のあり方としては、田辺編年のＴＫ217型式を細分したかたちでの変遷を辿ることができる。かつて出土した下之川古墳の土器も含めてみると、

下之川古墳（ＴＫ209型式期）
↓
土壙墓ＳＸ11
↓
竪穴住居ＳＨ15
↓
竪穴住居ＳＨ17
↓
土坑ＳＺ32・33
↓
竪穴住居ＳＨ23

といった変遷が窺われる。このうち、ＳＸ11からＳＨ17にかけての時期が田辺編年のＴＫ217型式並行期にあたる。

このような変遷が窺われること自体、非常に興味深く、中村浩氏が提示された[65]ような純粋な型式的変遷を辿るものとして評価できそうである。しかし、伊勢では明気窯跡群（多気郡多気町相可）[66]において、中村浩氏のいう第II型式第６段階のものと第III型式第１段階のものとが併焼されており、このような現象が当遺跡のみでのあり方である可能性もある。消費地と生産地（窯跡）での、一見逆転現象にも見えるこのような状況の適切な評価には、もう少し事例が必要なようである。

**土師器**

土師器では、土坑ＳＺ32・33から出土した暗文土師器が注目される。この土器は非常に精緻な土器で、当地における製品と考えるよりは、搬入品と考えられるものである。

雲出川流域の中でも、とくに下流部に相当する一志町・嬉野町付近では、斎宮跡などの南勢地域と比べて、近畿地方産と考えられる当該土器の搬入品が多いことがよく指摘されている[17]。下之川富田遺跡も巨視的には雲出川流域に相当するが、かなり上流部である。下流部と同様の傾向として把握できるかどうかは、中流部あるいは上流部におけるさならる資料の蓄積が必要である。

この他、当遺跡の下流約11kmにあたる川口関跡（一志郡白山町川口、大角遺跡付近か？）も気になる存在である。当遺跡と川口関跡を直接結びつけるものは無いが、八手俣川を遡れば川口関まではすぐに到達することを考えれば無縁とも思えない。竪穴住居ＳＨ31から出土した墨書土器も、竪穴住居という少々不似合いな場所ながら丁寧な運筆のものであり、川口関を中心とした何らかの施設が当遺跡に存在していた可能性も捨てきれない。

**c　下之川古墳との関係について**

下之川古墳から出土した須恵器類は、概ね田辺編年のＴＫ209型式期に並行すると考えられる[18]。下之川富田遺跡からは、当該時期の遺物は明確には出土していないが、下之川古墳の造営後まもなくと考えられる土壙墓ＳＸ11が存在する。

ＳＸ11は、前述のように大きくは田辺編年のＴＫ217型式に相当するが、竪穴住居群とは一定の時間差を有していると考えられる。つまり、竪穴住居群と下之川古墳とは、土壙墓ＳＸ11を介して時期的に連続していると考えられるのである。今回の調査区からは、下之川古墳と同時期と考えられる住居跡は確認できなかったが、当遺跡内にその時期の住居跡が存在している可能性は高いであろう。

さて、伊勢において、これまで古墳とそれを造営した集落とが明確に判明した例はほとんどない[19]。下之川は、盆地として閉塞性の高い地勢であるため、この点が明確になる可能性が高い。このような地域を利用して、古墳群とその集団との関係を考察していく方法も検討する必要がある。

なお、下之川富田遺跡に隣接する三谷集落の山手には、横穴式石室が存在するとも言われている。今回それを確認することはできなかったが、注意すべき問題と考えられる。

**5　平安時代の遺構・遺物について**

平安時代の遺構は、Ａ地区の北部で数基のピットを確認したのみである。しかし、当遺跡に当該時期の集落が形成されていたことは明らかである。

出土遺物のなかでは、志摩式製塩土器が注目される。この土器については山本雅靖氏によって分布などが検討されており、伊勢・志摩はもとより、伊賀地域にまで分布の見られる遺物であることが指摘されている[20]。これまで、雲出川上流部における当該遺物の出土は、発掘調査事例が少なかったこともあって明確には知られていなかったが、他地域と同様、この地域にも分布の認められることが確認された。

**6　中世の遺構・遺物について**

**a　中世前期の遺物**

中世前期の遺物として、この下之川の地において陶器椀（山茶椀）類と瓦器椀類とのどの程度の割合で認められるのかを注目していた。それは、上流部の多気は、両者がほぼ拮抗する程度の出土が確認できる地域であり、そのため、多気の地が一種の境界領域として認識できる[21]ことから、隣接する下之川の動向が極めて重要と考えるためである。

しかし、中世前期の遺物は極めて少量で、互いの比率を求めるまでには至らなかった。瓦器椀は１片のみ確認したに止まり、山茶椀類も10数点出土したのみである。

ただ、少ないながらも、山茶椀類が優勢するらしいという指摘は可能かと考えられる。この傾向は、多気よりは下流で、山茶椀類が濃密に分布する地域により近い、という点からも首肯される。

**b　中世後期の遺物**

中世後期の遺物のなかでは、中北勢系の羽釜の出土が特筆される。

中北勢系の土師器類は、多気では全くといってよ

いほど確認できないことから、多気における南伊勢系土師器の圧倒的な優越性が窺われ、その背景には何らかの政治的要因すら窺われることを推測している[24]。

しかし、今回の発掘調査によって、多気に最も近い下之川においてこの土器が確認されたことから、多気における南伊勢系土師器の特殊な位置がより強調されることとなった。また、雲出川流域における中北勢系土師器の動きは、下流部では雲出川を境にほぼ明確に分布が途切れ、中・上流部では流域内に点々と分布の認められることが確認されている。今回の調査成果は、一方でこのような動向を裏付ける結果となった。南伊勢系の鍋に対する中北勢系の羽釜の動向は、今後より追求を深めていくべき問題である。

### c　中世後期の遺構

中世後期の遺構は、15世紀前半代から16世紀前半代までのものが確認されたと考えられる。ピット群の存在から、掘立柱建物は数棟存在していたものと考えられる。

この時期の遺構については、遺跡の西部丘陵上に存在する富田城跡および宇城跡との関連を考える必要がある。両者は別の遺跡として登録されているが、実際にはひとつの城であろう。当遺跡は、この城跡のちょうど麓にあたる集落であるため、あるいは“村の城”といった視点も必要かと考えられる。

## 7　総括～下之川の位置づけ～

以上、発掘調査成果を基礎に、いくつかの検討と問題点を指摘してきた。

今回の調査によって、下之川富田遺跡の一端が明らかになった。弥生時代前期には、いちはやく遠賀川式土器のを受け入れた遺跡であった。古墳時代末には、横穴式石室を受容し、それに関わる集落が、続く飛鳥・奈良時代にまで継続した。飛鳥・奈良時代には、精製された暗文土師器を伴い、また、墨書土器も確認されている。中世では、多気には見られない中北勢系の羽釜も搬入されていた。

これらの事象を総括すれば、下之川という地は、それぞれの時代で重要な文化を生成してきた場所であると言うことができよう。とくにそれは、隣接する多気との比較によってより鮮明に浮かび上がる。つまり、多気が一種の境界領域としての文化を生成してきた場と評価されるのに対し、下之川はトップ・モードにより敏感に反応することによって地域文化を形成した場、ということになろうか。

多気と下之川という、隣接する地域であるにもかかわらず、それぞれがかなり個性的な文化を担っていたらしい、という視点は、今後各地の地域史を考察していくうえでも重要な問題となろう。

【註】

(1)奥義次「三重県における凸帯文系土器出土遺跡の分布相」（『Miehistory』vol.1　1990）など
(2)佐原真「畿内地方」（『弥生式土器集成』本編2　1968）
(3)井藤暁子「入門講座弥生土器－近畿1－」（『考古学ジャーナル』No.195　1981）
(4)愛知考古学談話会『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題』資料編II・研究編(1988)および第1回東海考古学フォーラム豊橋大会実行委員会『突帯文土器から条痕文土器へ』(1993)など
(5)若林邦彦「弥生土器地域色顕在化の構図～中期前葉の近畿とその周辺の甕形土器の製作技法と系譜を中心に～」（『弥生文化博物館研究報告』第2集　大阪府立弥生文化博物館　1993）
(6)松本洋明「弥生土器・考察V～大和型甕と土器作り集団の出現（後編）～」（『みずほ』第12号　大和弥生文化の会　1994）p29
(7)鈴木克彦「伊勢湾沿岸地方における凸帯文深鉢の様相－伊勢地方からの視点－」（『三重県史研究』第6号　1990）
(8)谷本鋭次『中ノ庄遺跡発掘調査報告』（三重県教育委員会　1972）
(9)伊藤久嗣ほか『納所遺跡』（三重県教育委員会　1980）
(10)真田幸成「第6章　総括」（『上箕田』上箕田遺跡調査会・鈴鹿市教育委員会　1970）p54
(11)村山邦彦「伊勢に於ける前期弥生文化攷」（『三重考古』第2号　1978）
(12)この三角縁神獣鏡については、伊勢野久好氏により詳しい紹介がされている。伊勢野久好「旧一志郡内の首長墓」（『天花寺山』一志町・嬉野町遺跡調査会　1991）
(13)伊藤裕偉『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1996）
(14)田辺昭三『須恵器大成』（1980　角川書店）
(15)中村浩『陶邑』III（大阪府教育委員会　1978）・『和泉陶邑窯の研究』（柏書房　1981）
(16)宇河雅之「明気窯跡群」（『明気窯跡群・大日山古墳群・甘槽遺跡・巣護遺跡』三重県埋蔵文化財センター　1995）
(17)吉村利男ほか『平生遺跡発掘調査報告』（平生遺跡調査団　1976）など
(18)美杉村ふるさと資料館に陳列。同館の御好意により、出土須恵器を実測することができた。近く、何らかのかたちで公表する予定である。
(19)あえて言えば、斎宮跡と塚山古墳群との関係が挙げられる。
(20)山本雅靖「志摩式製塩土器考」（『考古学論集』第3集　考古学を学ぶ会　1990）
(21)伊藤裕偉「北畠氏の拠点・多気の構造」（『日本歴史』587　1997）
(22)伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」（『研究紀要』第1号　三重県埋蔵文化財センター　1992）

# 報告書抄録

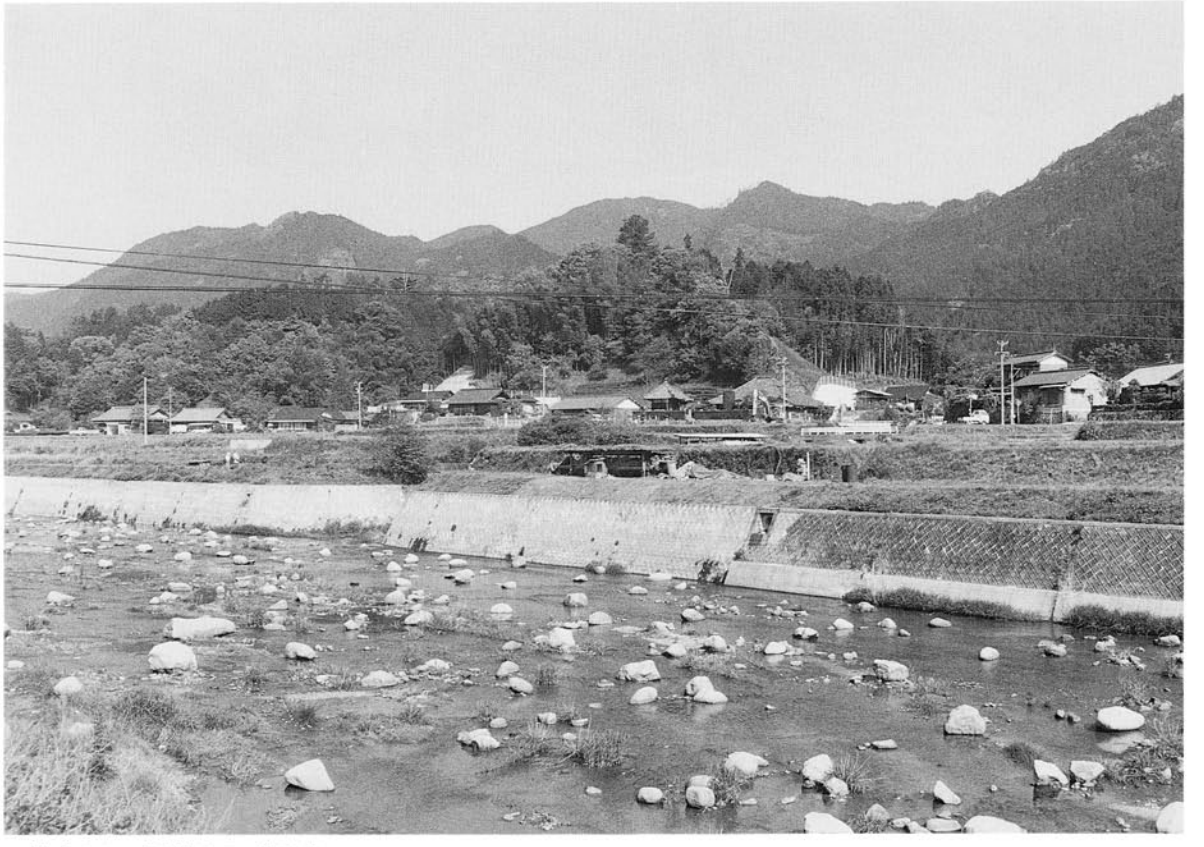
| | |
|---|---|
| ふりがな | しものかわとみた |
| 書名 | 下之川富田 |
| 副書名 | 一志郡美杉村下之川所在遺跡の調査 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 三重県埋蔵文化財調査報告 |
| シリーズ番号 | １７０ |
| 編著者名 | 伊藤裕偉 |
| 編集機関 | 三重県埋蔵文化財センター |
| 所在地 | 〒５１５－０３２５　三重県多気郡明和町竹川５０３　TEL 05965(2)7031 |
| 発行年月日 | 西暦　1998年３月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 下之川富田遺跡<br>（旧称富田遺跡） | 三重県一志郡<br>美杉村下之川<br>字富田 | 24406 | 11 | 34°<br>33′<br>12″ | 136°<br>20′<br>30″ | 19970506<br>～<br>19970716 | 2,800 | 平成９年度県営畜産経営環境整備事業（一志地区）に伴う事前調査 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 下之川富田遺跡 | 集落跡 | 縄文後晩期 | | 突帯文土器ほか | |
| | | 弥生前期 | 小流路 | 突帯文系土器・<br>弥生土器・石鏃 | 遠賀川式土器の壺は、山間部では希少。<br>突帯文系土器との供伴も興味深い |
| | | 古墳前期 | | 古式土師器 | |
| | | 飛鳥～奈良 | 竪穴住居跡<br>掘立柱建物<br>焼土坑<br>土壙墓 | 須恵器・土師器<br>鉄鏃 | カマドの残存良好 |
| | | 中世 | ピット・石組土坑 | 陶器・土師器 | |

# P L A T E

遺跡を南方上空から望む



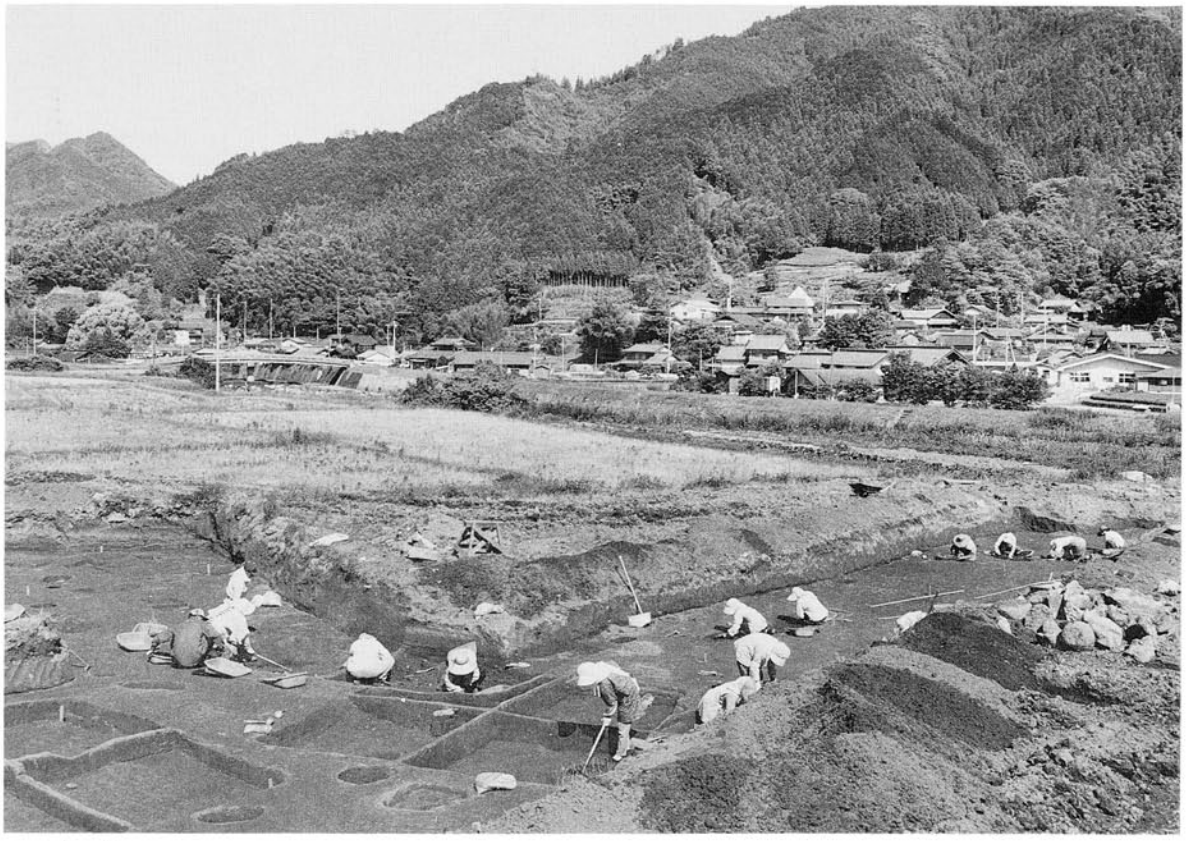
北東から（手前は八手俣川）

A地区（北から）

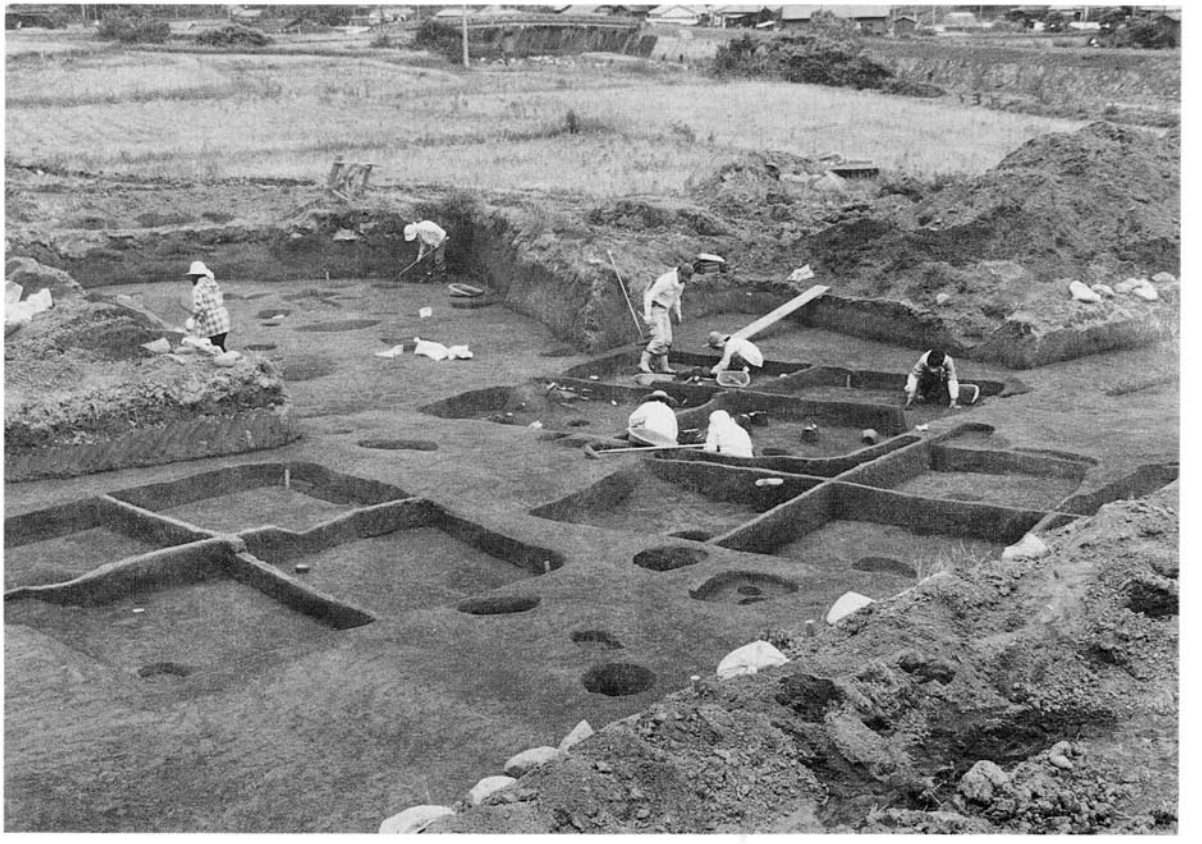
調査風景(1)

重機掘削

遺構掘削（A地区）

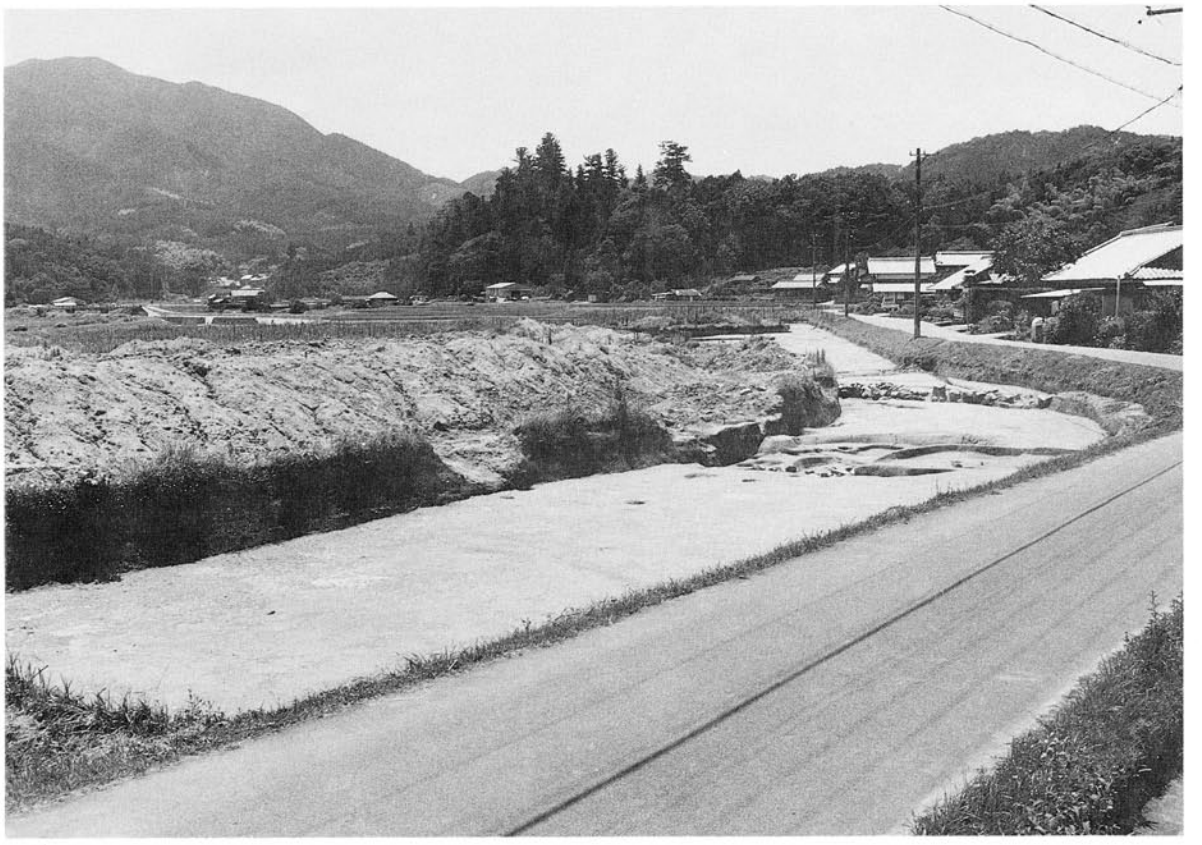


A 地 区



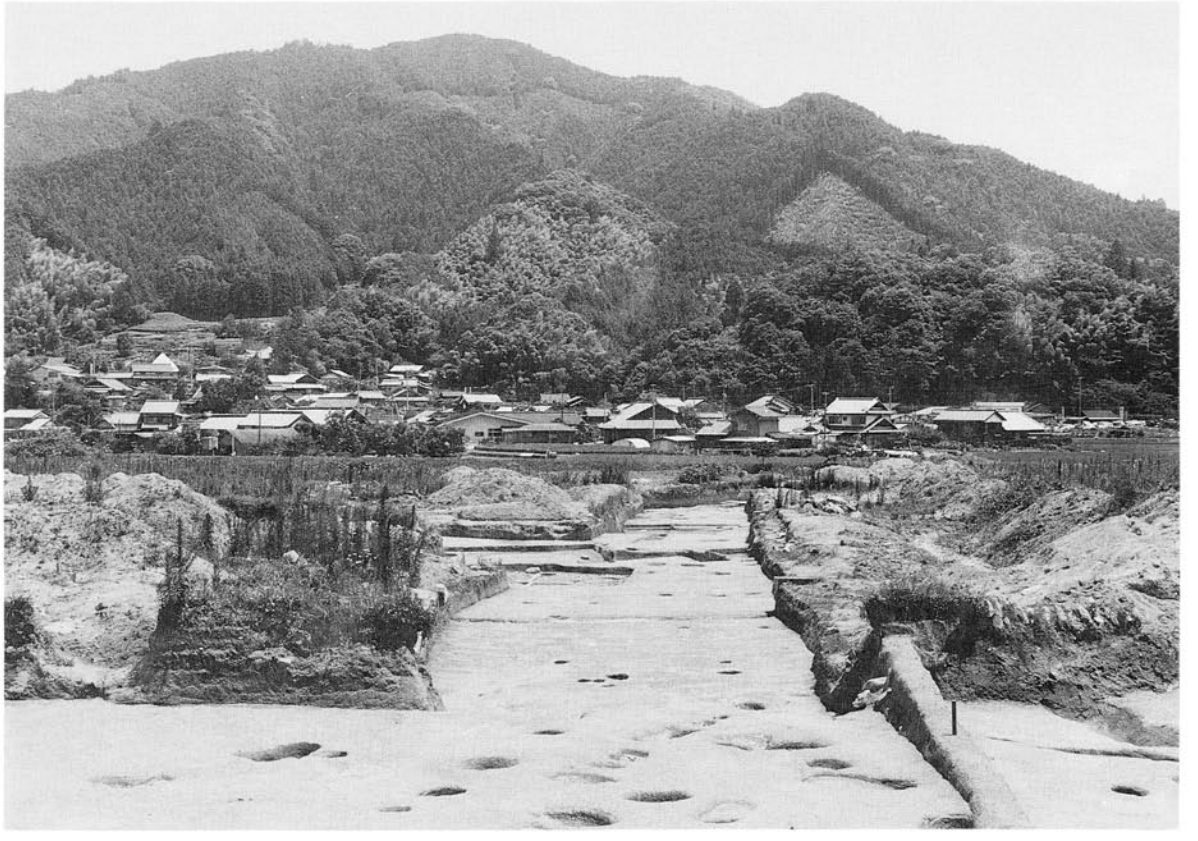
A地区　竪穴住居跡群

A地区遺構(1)全景



北から

北から



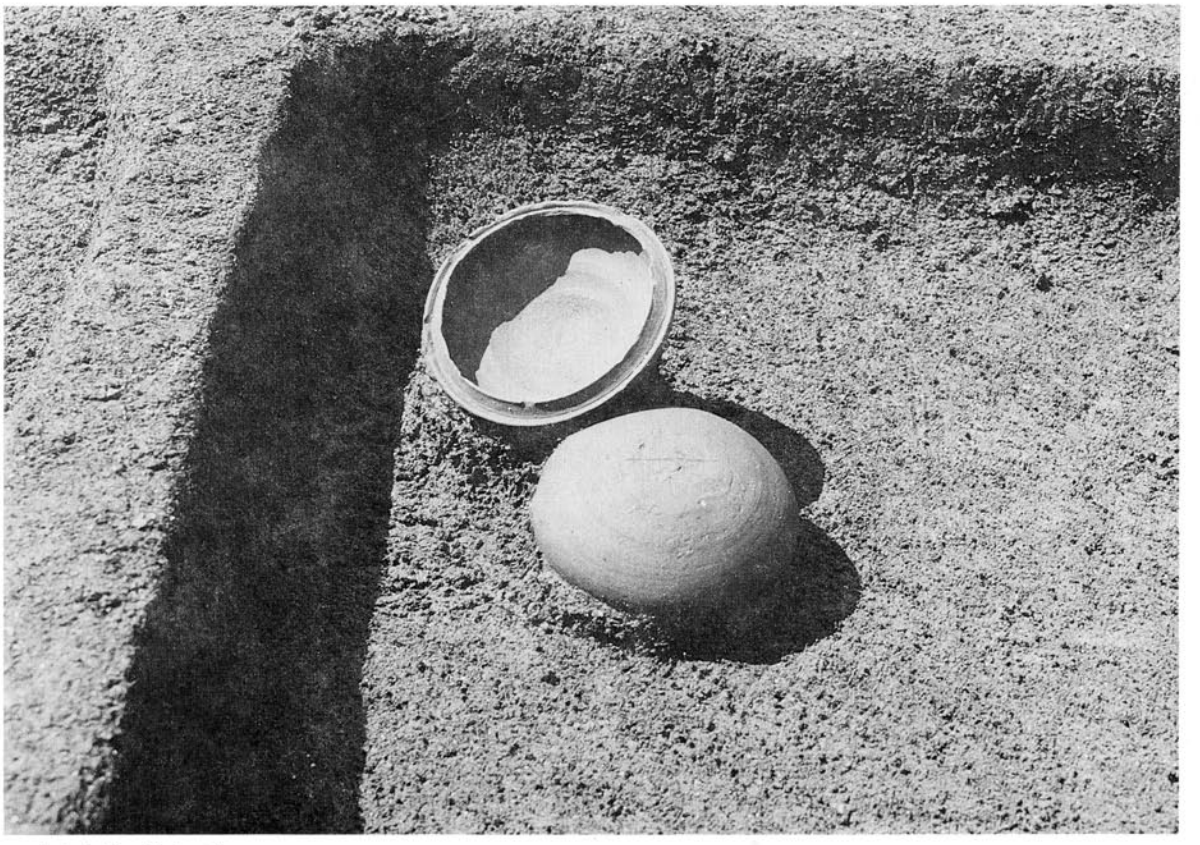
全景（西から）

調査区土層（A地区、北から）

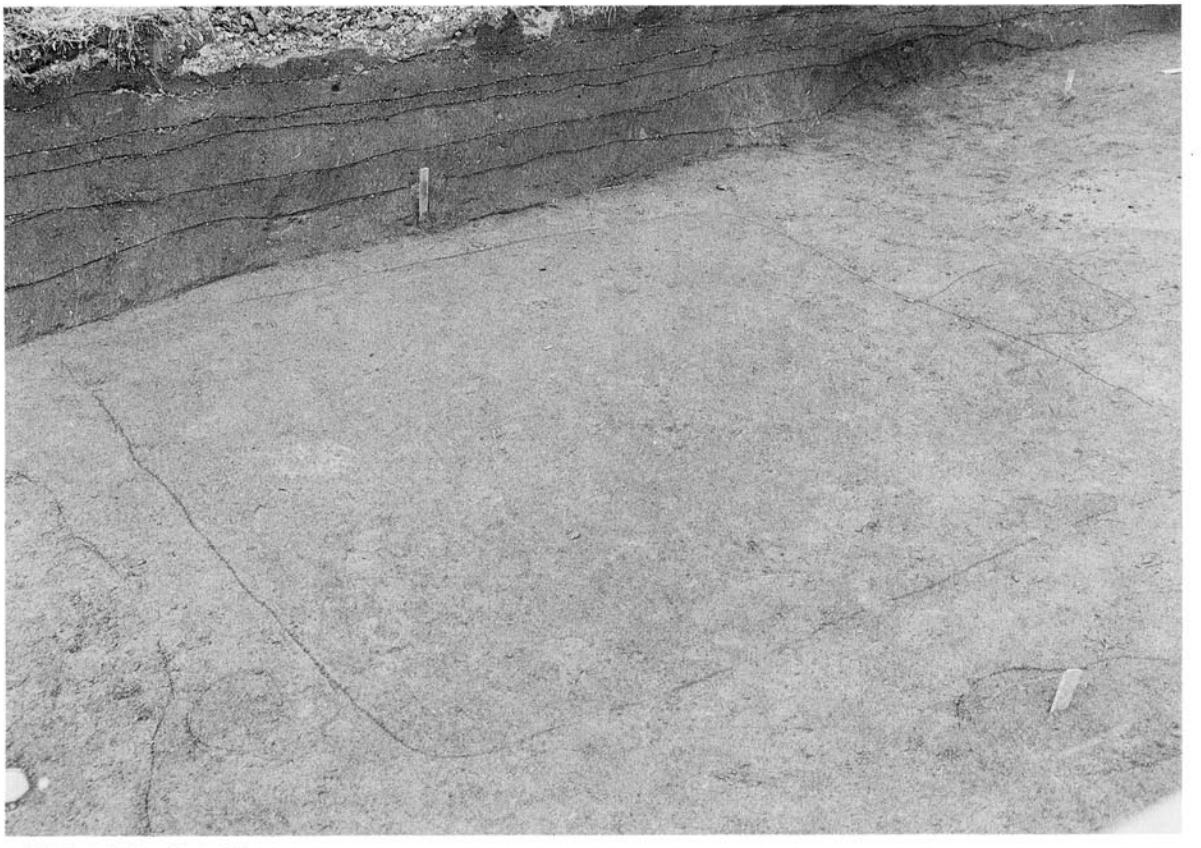
土器出土状況（西から）

全景（西から）

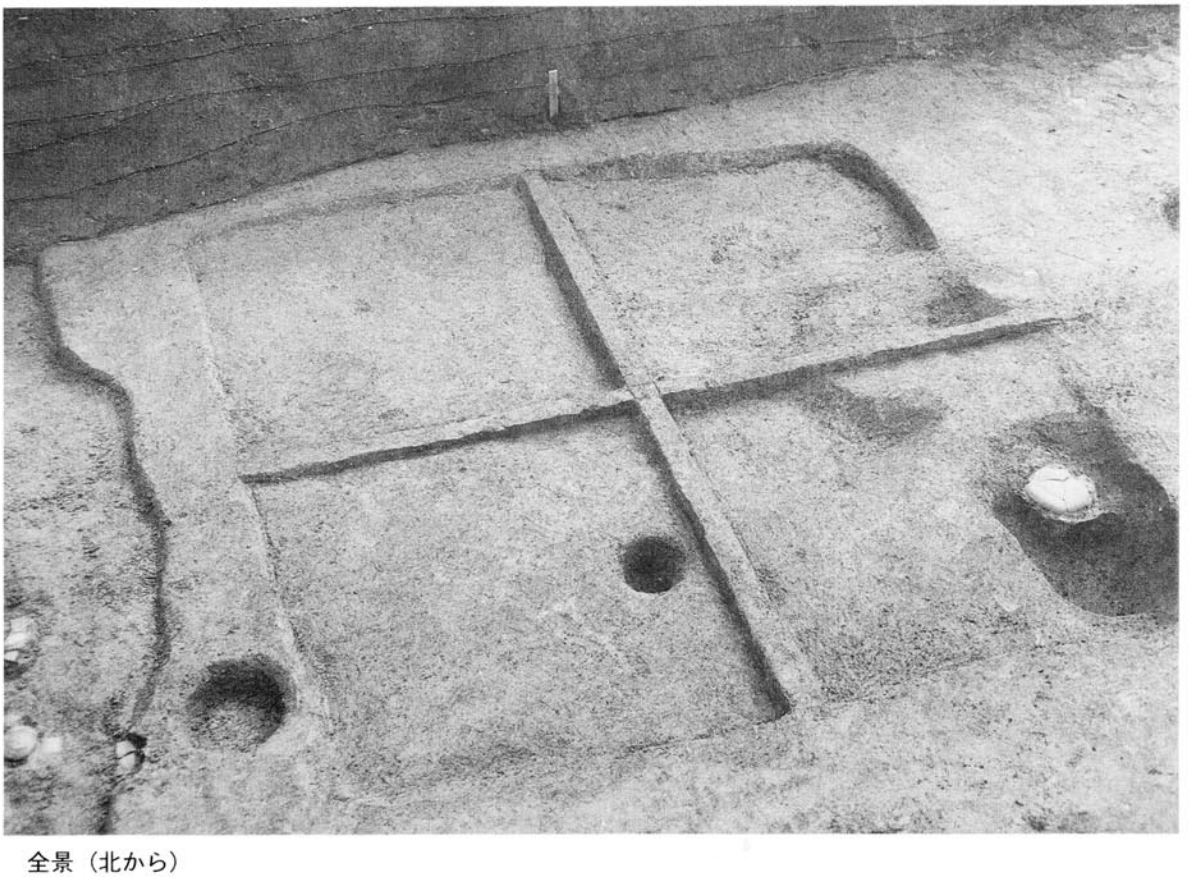
全景（南から）



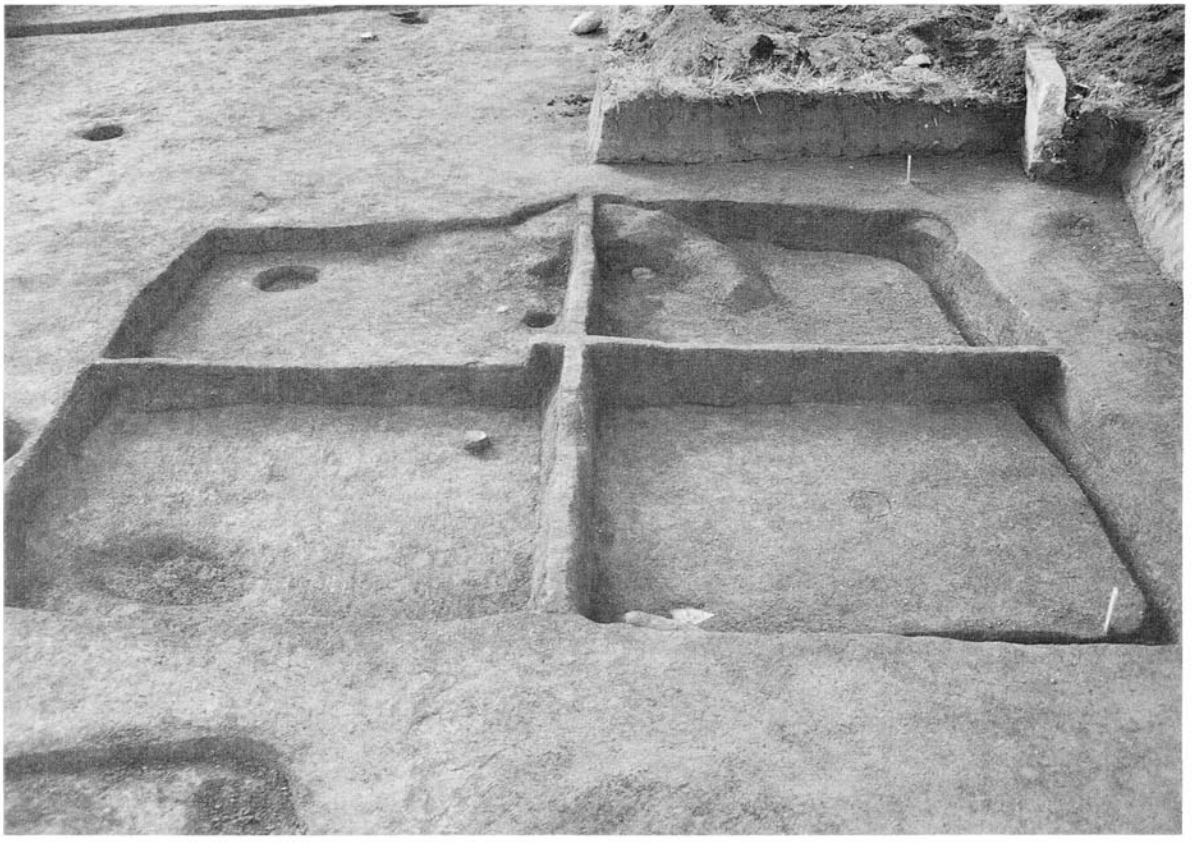
出土土器（東から）



検出の状況（北から）



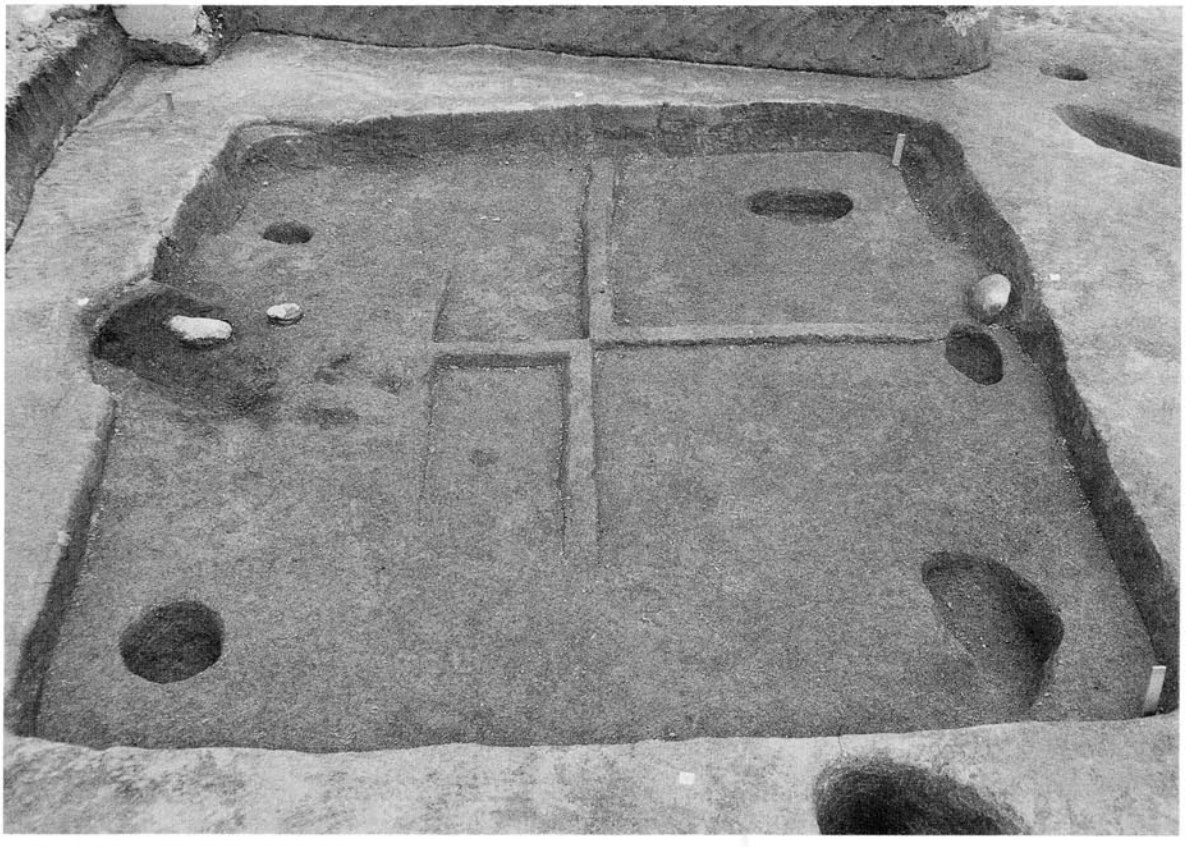
全景（北から）



全景（東から）

東壁から検出された石（南から）

カマド（東から）



貼床の断ち割り状況（南から）

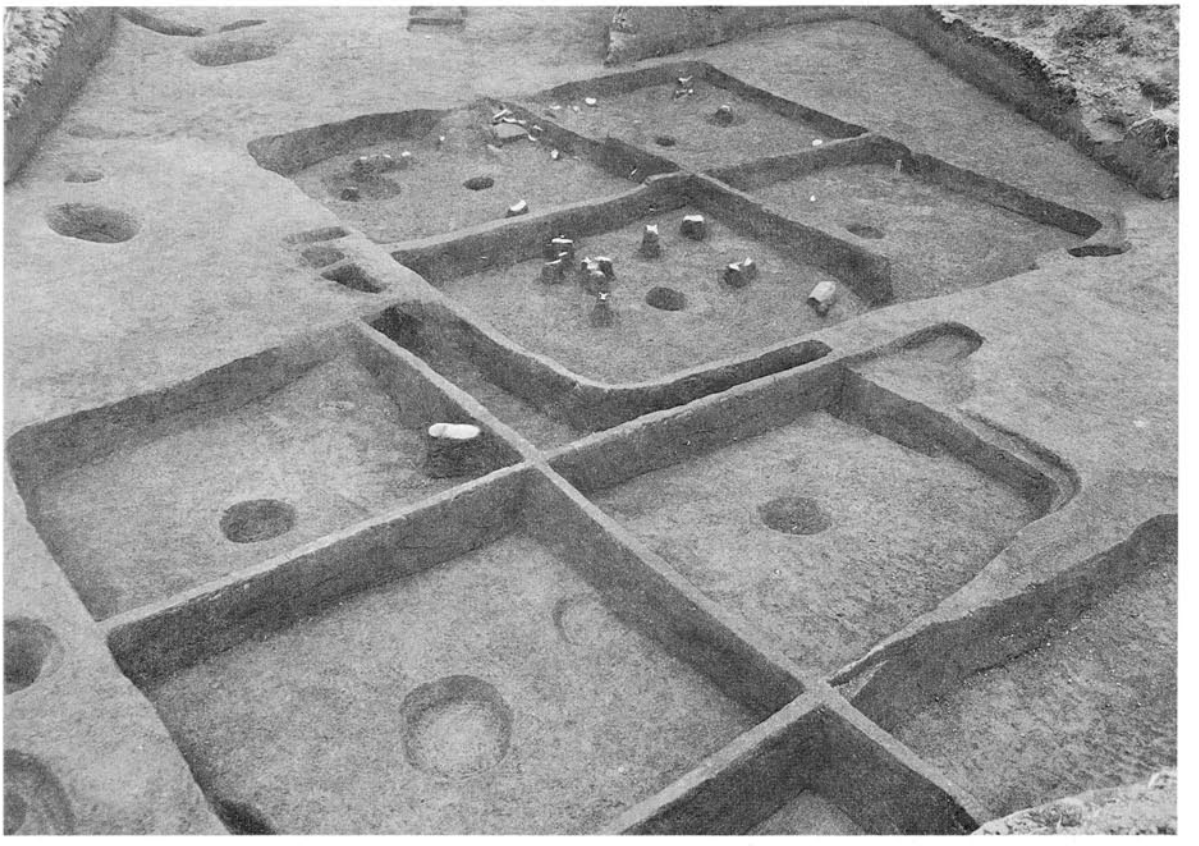
竪穴住居跡群（南西から）

SH16（南から）

煙道　検出の状況（南から）

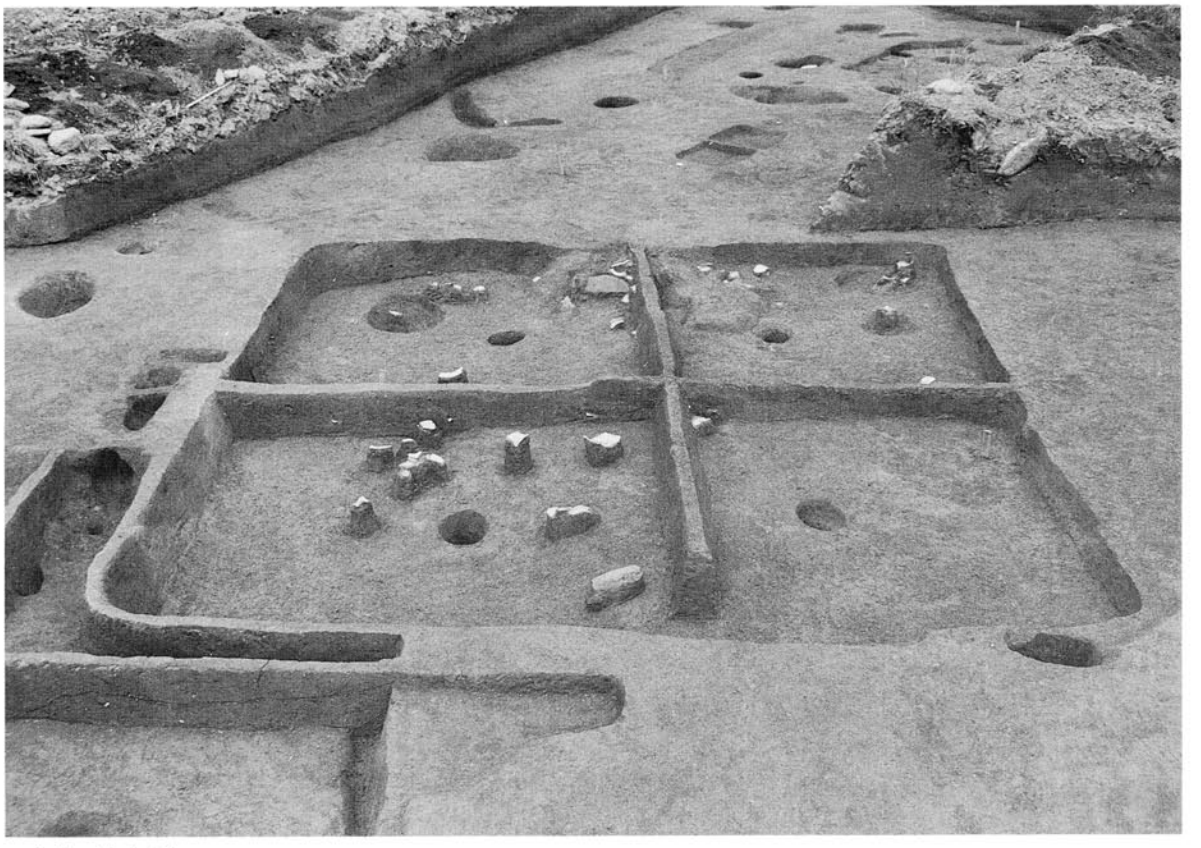
カマド（南から）　煙道がトンネル状に残っている。

SH16カマド（南から）



SH15とSH16（南から）

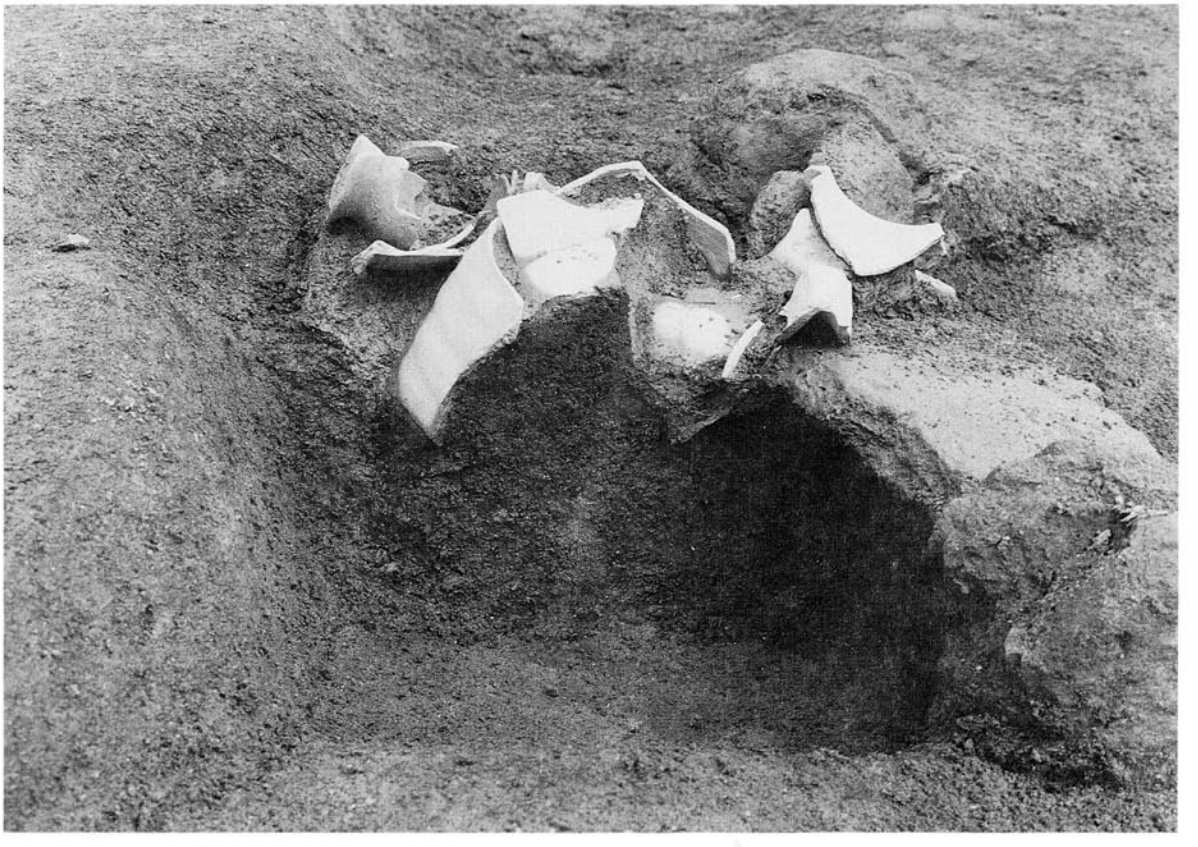
A地区遺構(11)竪穴住居SH15



全景（南から）

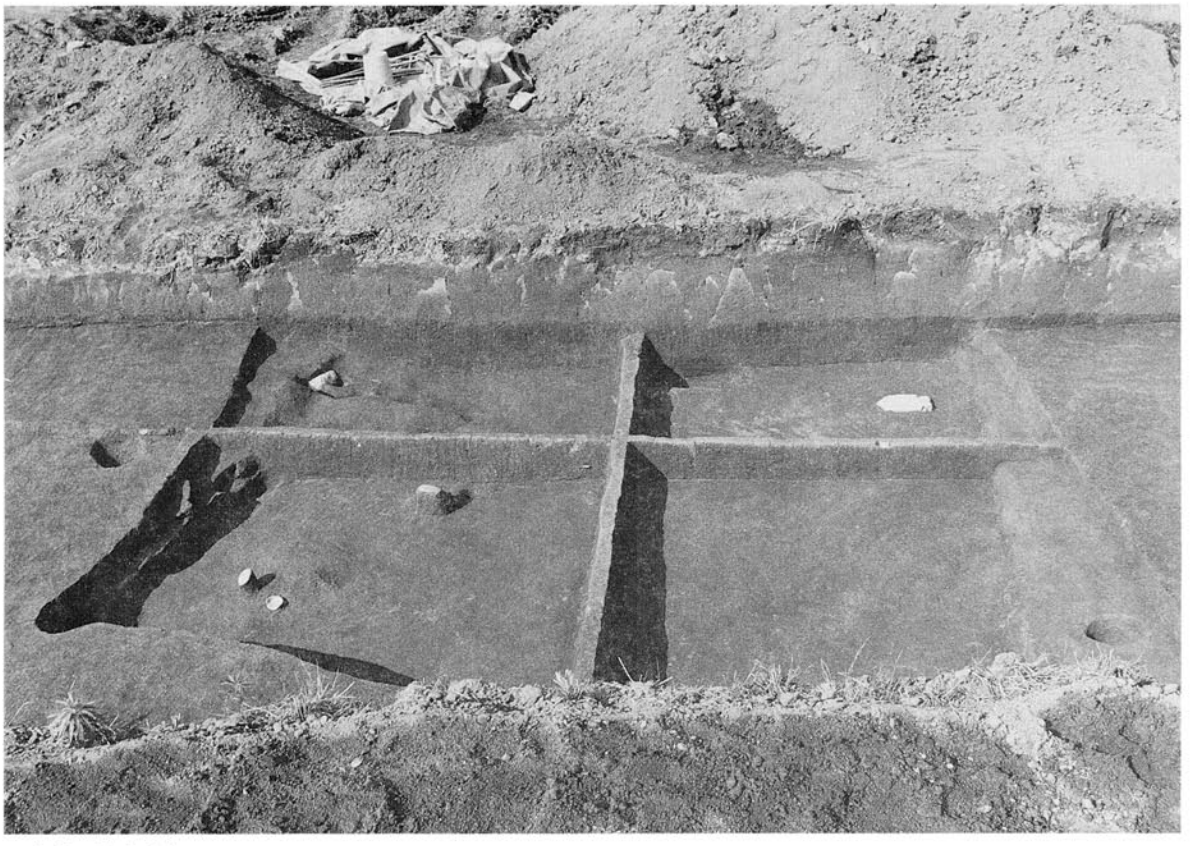
カマドb　土層（西から）

カマドb　完掘状況（南から）



カマドb　長胴甕ほか出土状況（西から）

A地区遺構⑬竪穴住居ＳＨ17



全景（南から）

土器出土状況（南から）

全景（北から）

SH23aのカマド土層（北から）

ＳＨ23ａ　カマド（東から）

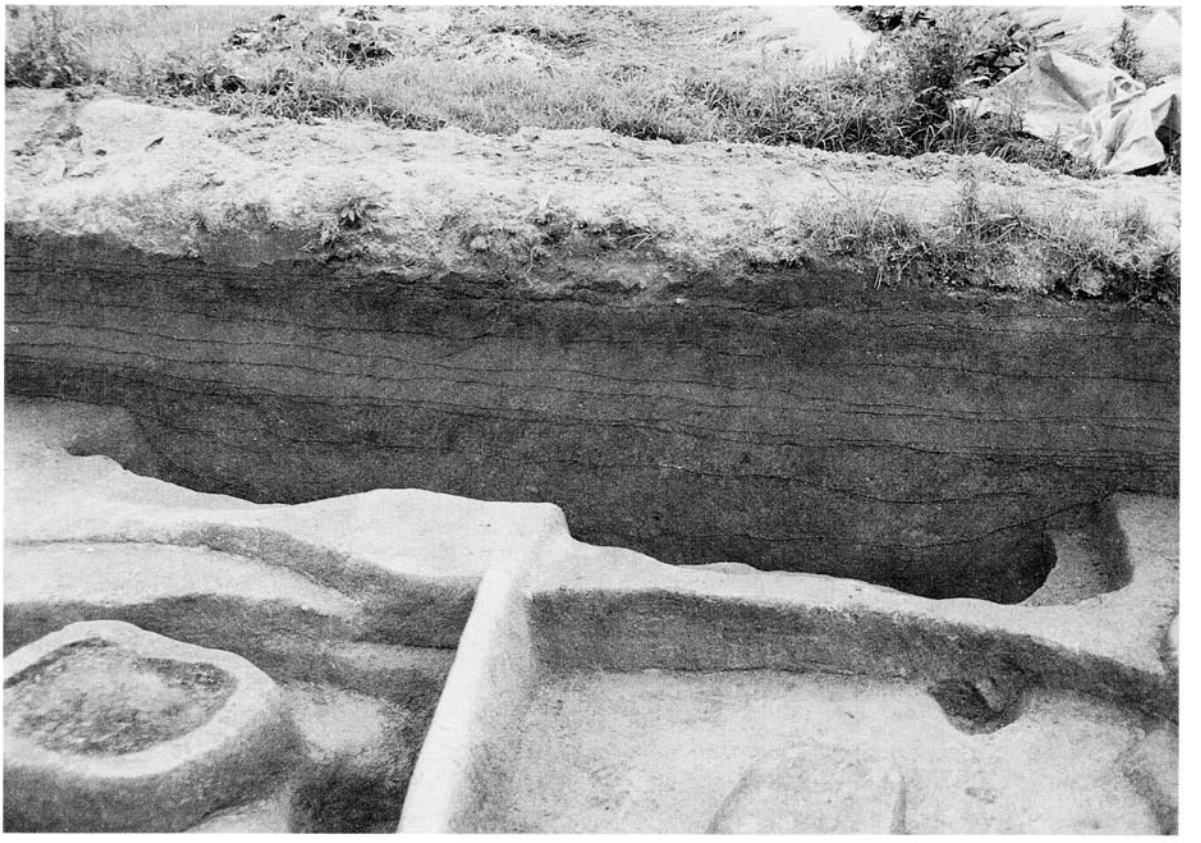
ＳＨ23ａ　カマド（東から）

全景（西から）

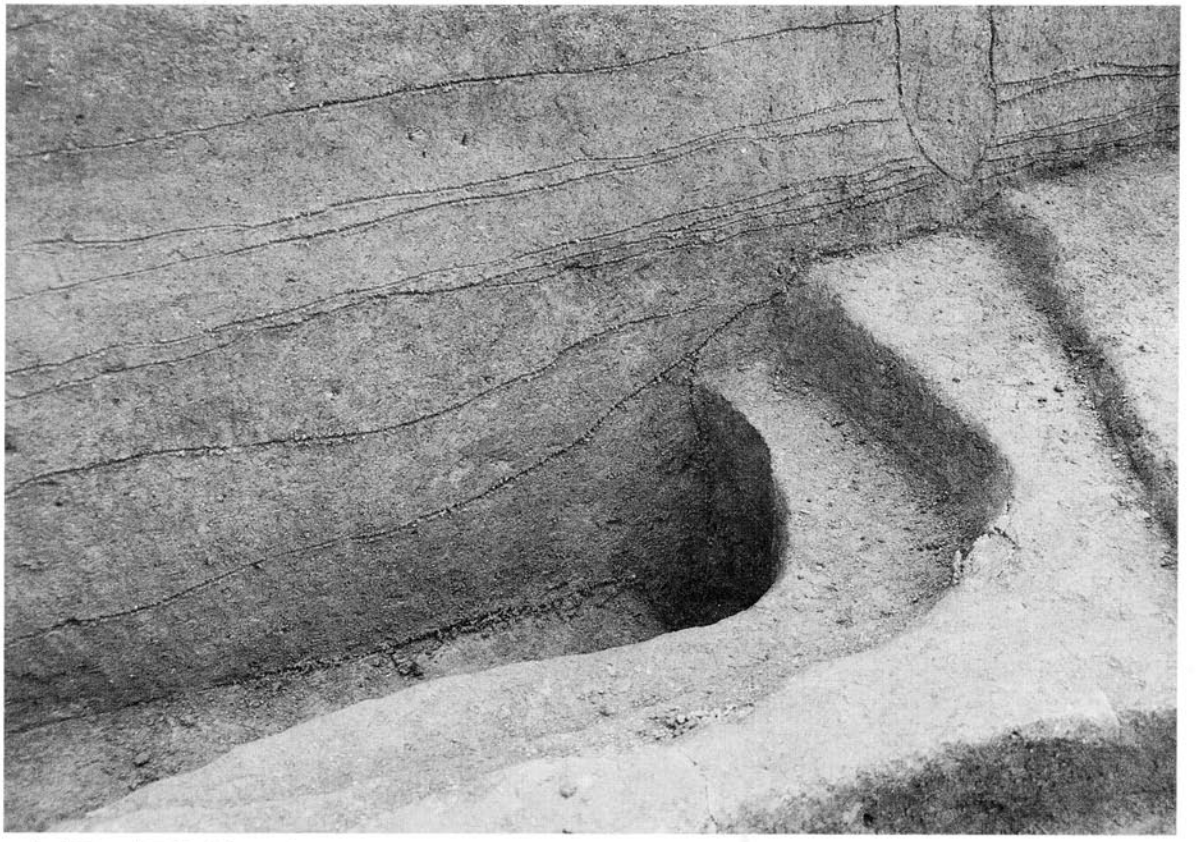
全景（東から）

ＳＨ28（西から）

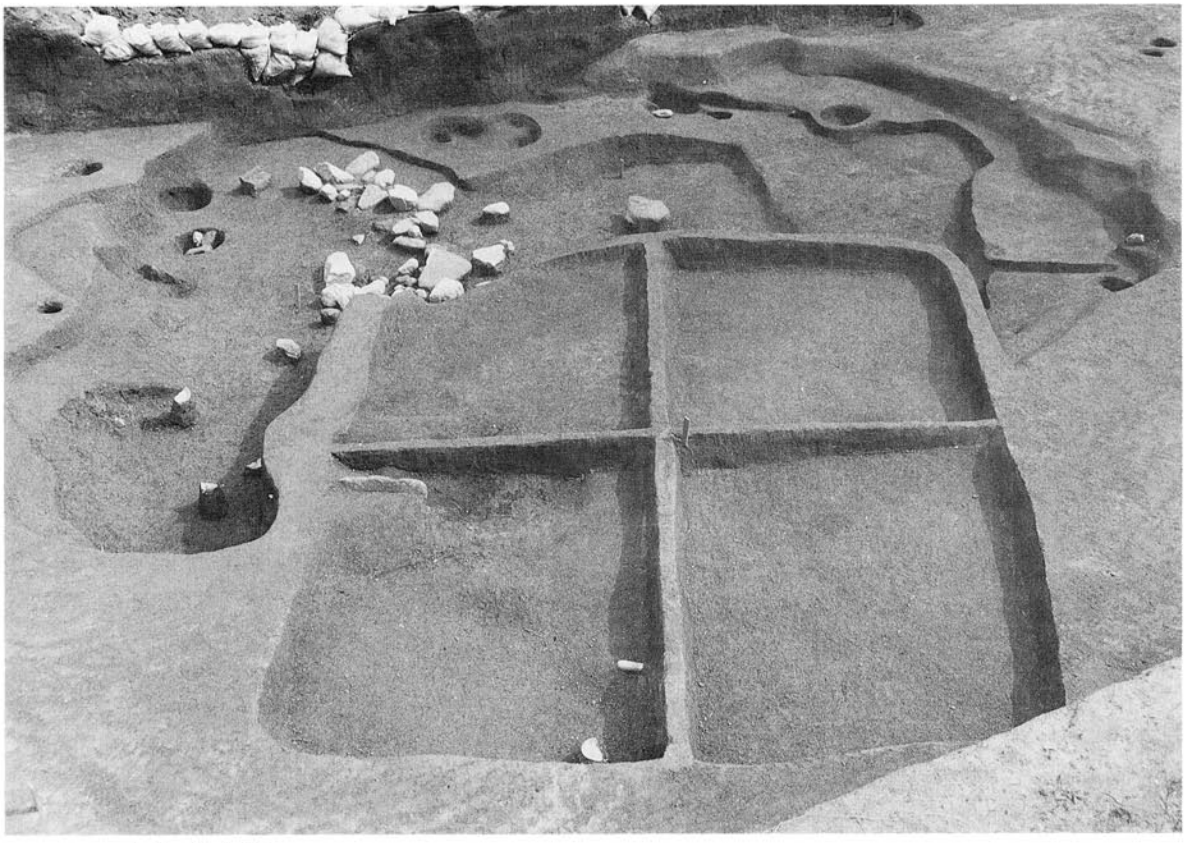
ＳＨ25（西から）



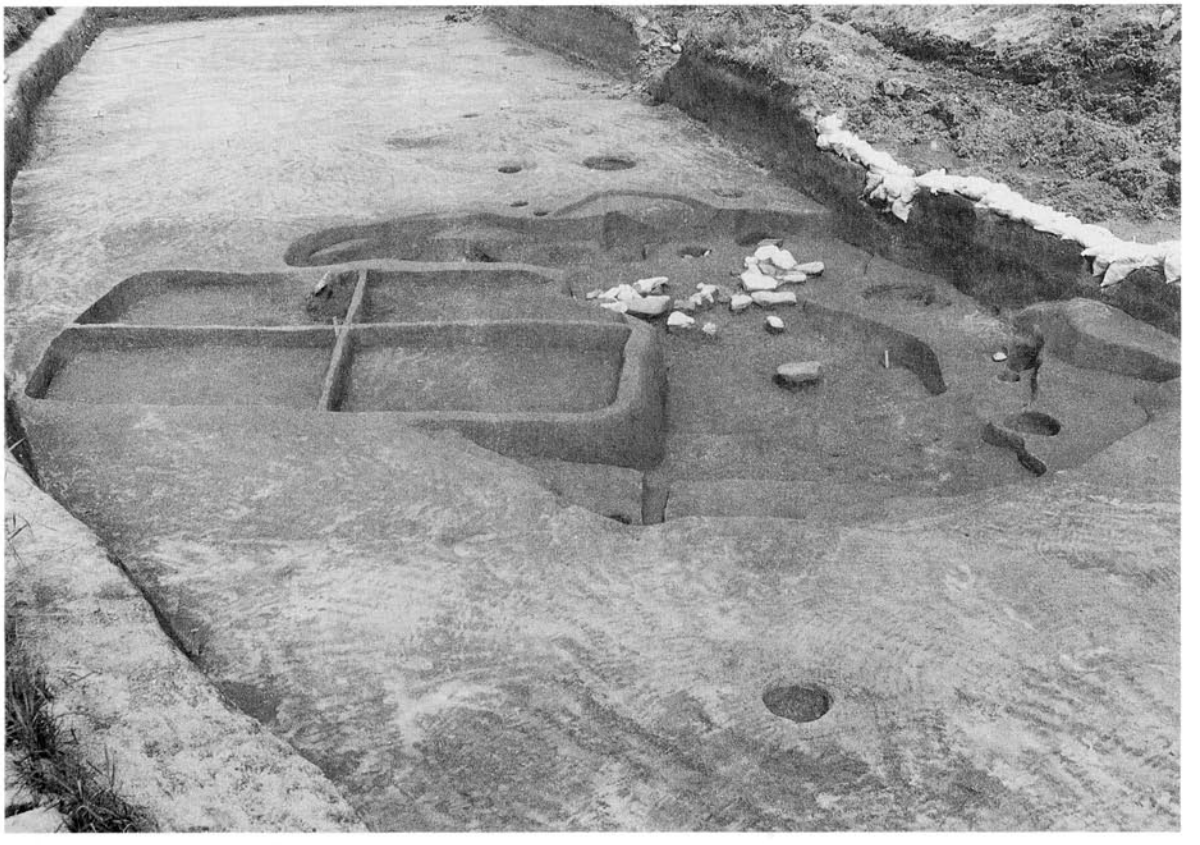
全景（南から）



南東隅の壁周溝（南から）



SH31　全景（北から）

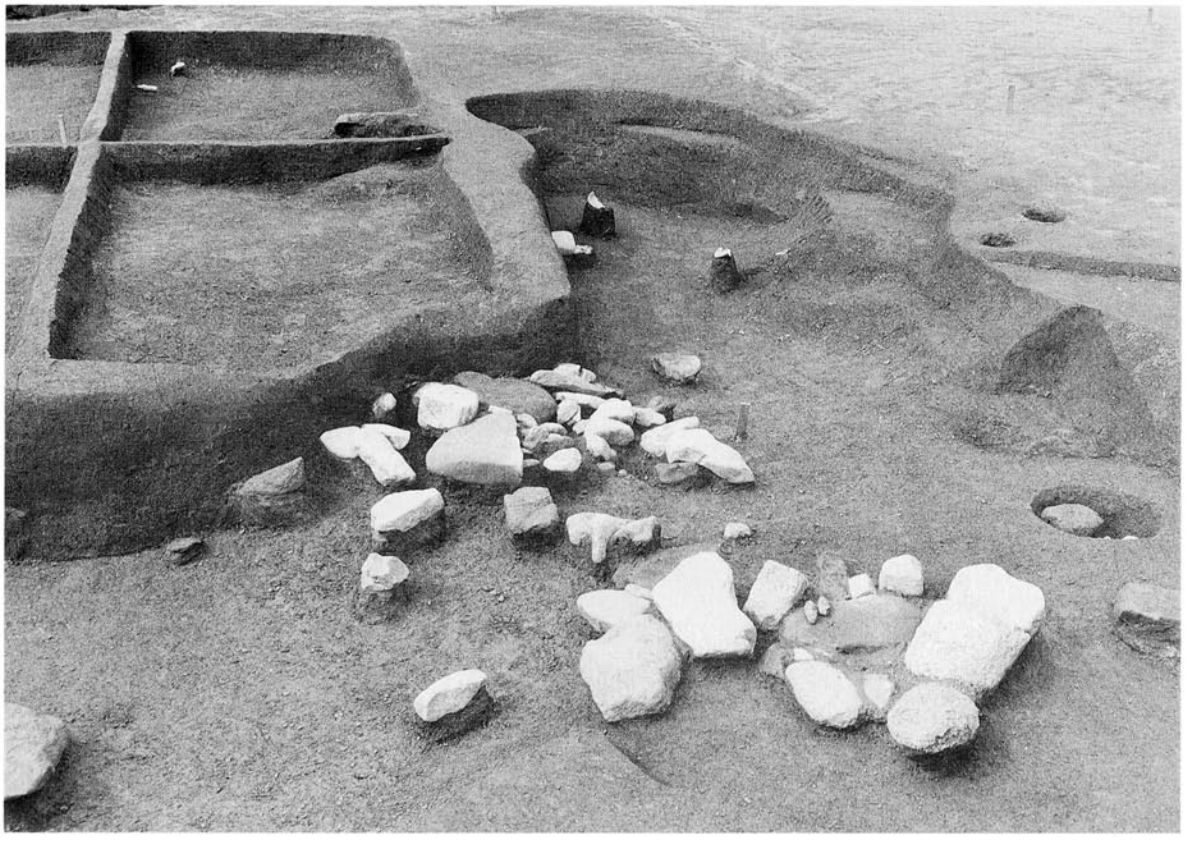


SH31・SZ32・33（南から）

カマド（西から）

カマド（南から）

A地区遺構㉑土坑SZ32・33



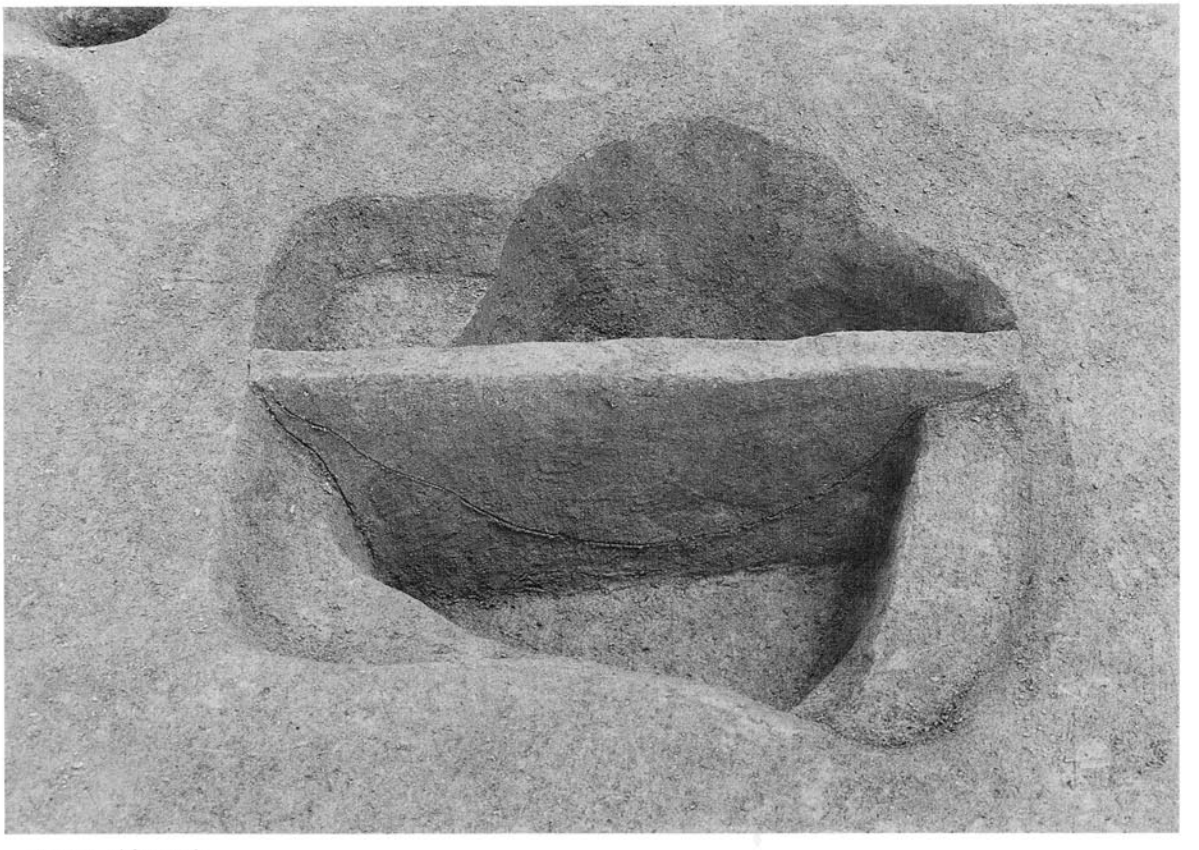
中央の礫群（東から）

北西隅で検出した円形の炭化物（南から）

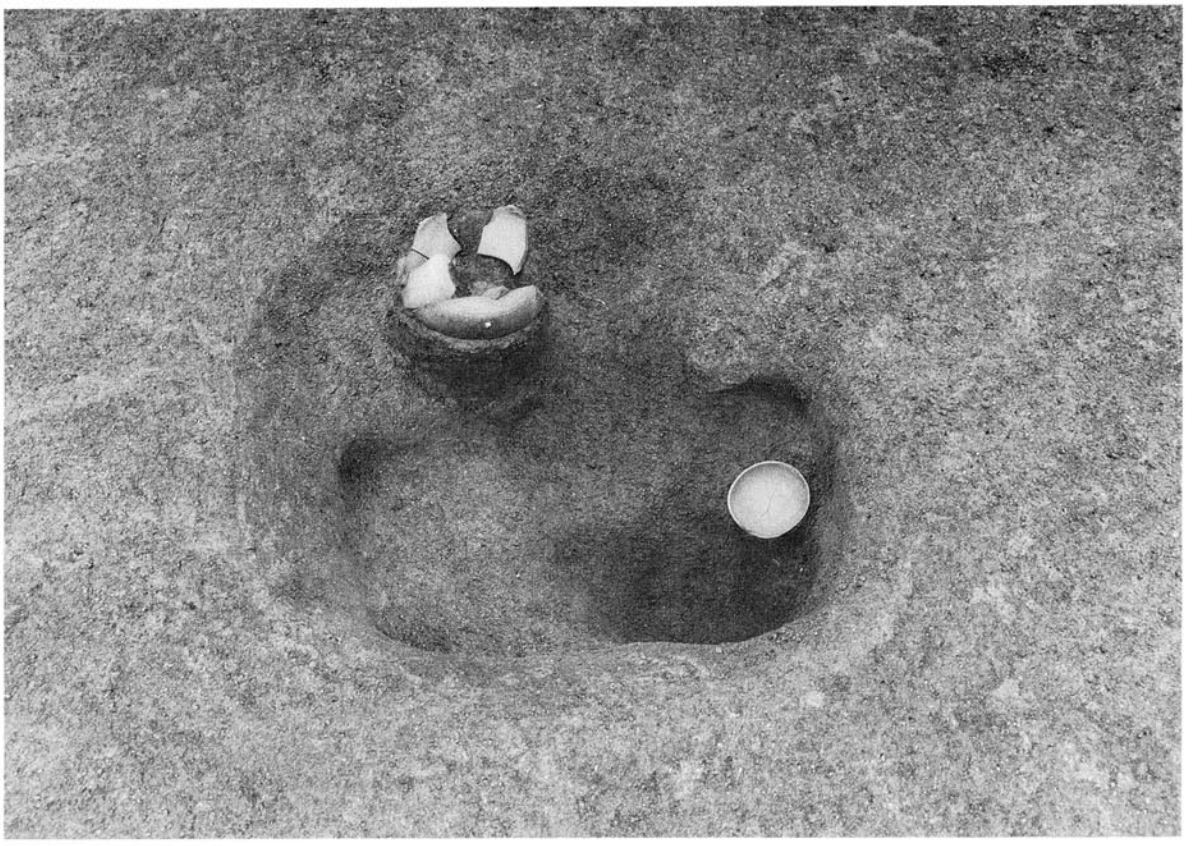
SB12（東から）

SD35・37（西から）

ＳＢ63付近（北から）



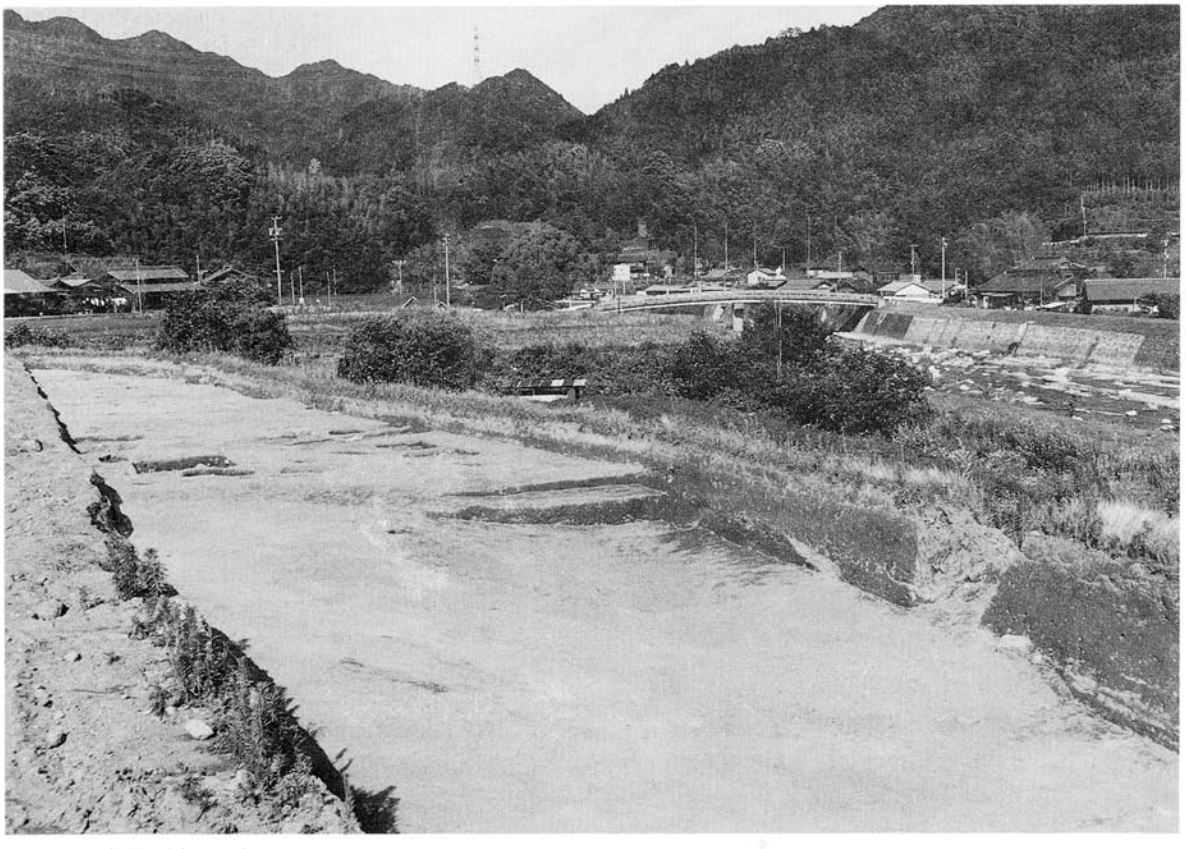
ＳＫ９（南から）



ＳＫ18　o 20－pit 2（南から）

ＳＦ64（南から）

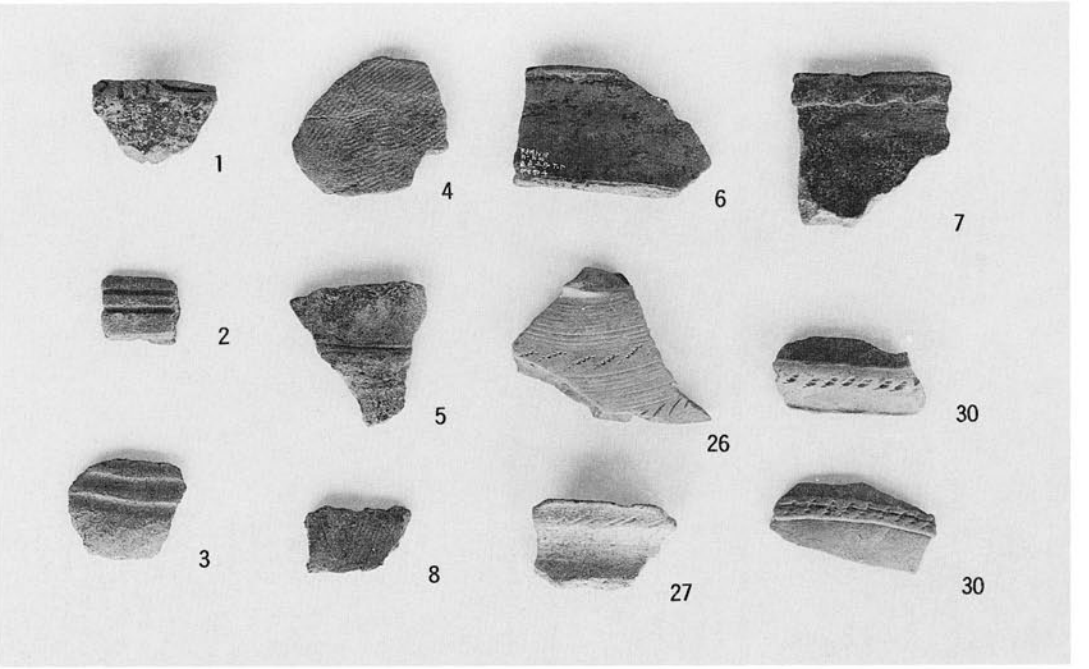
Ｂ１区全景（南から）



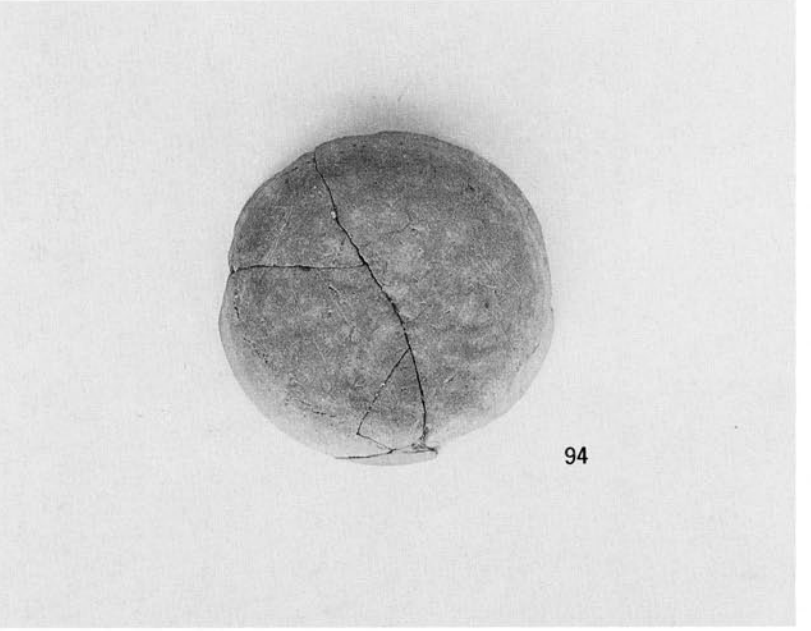
Ｂ２区全景（南から）

B 2区全景（北から）

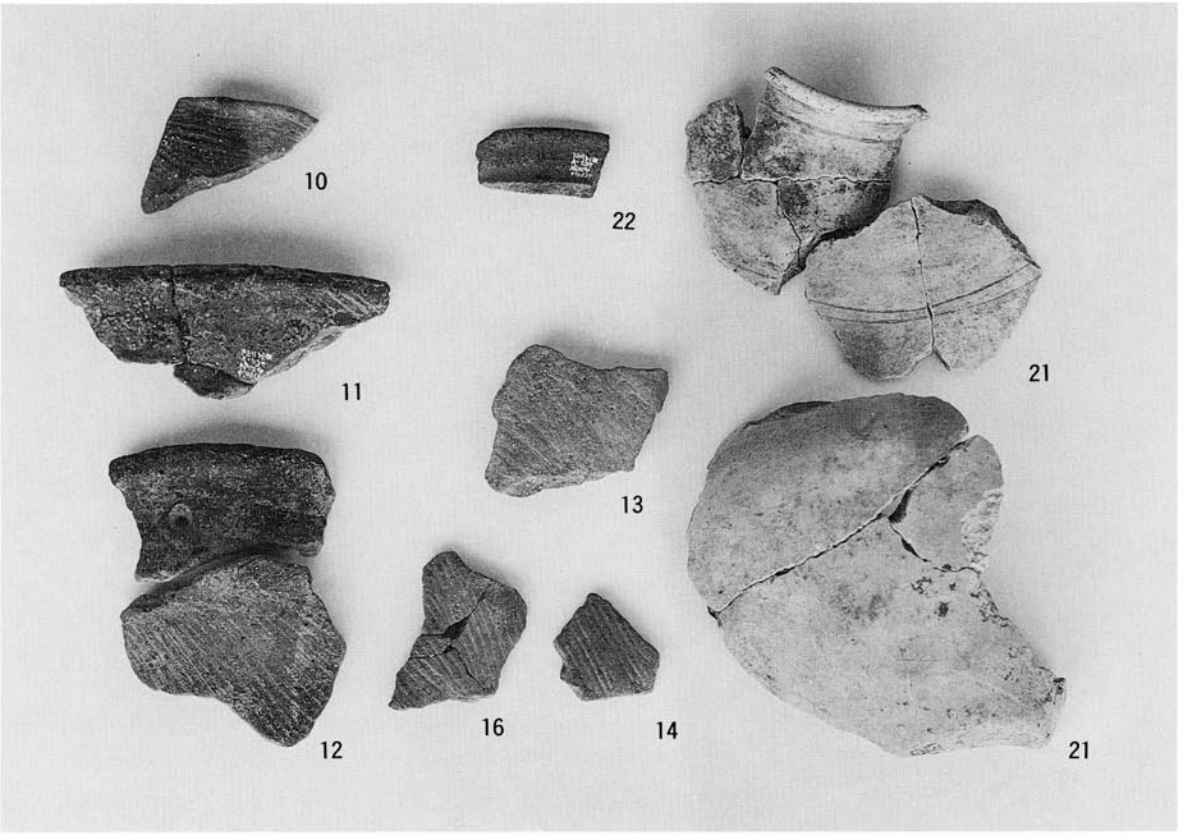
SK61（東から）



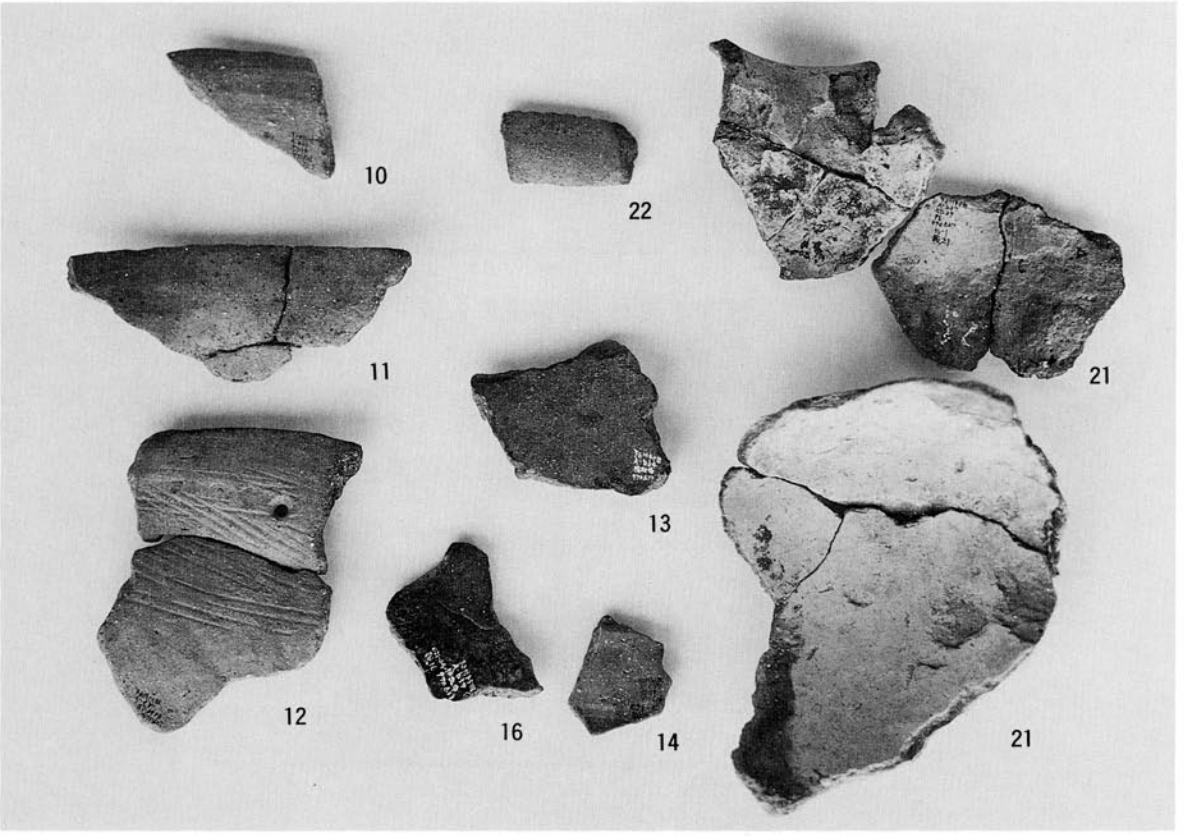

縄文土器・古式土師器




墨書土器




弥生前期の土器（外面）




弥生前期の土器（内面）

平成10(1998)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年8月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告170

下　之　川　富　田

～一志郡美杉村下之川所在遺跡の調査～

１９９８年３月

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　㈲第一プリント社